本作品は、田中芳樹氏原作の小説『銀河英雄伝説』に対する二次創作物であり、「らいとすたっふルール2004」にしたがって作成されています。

一、著作物の二次利用に関しては、以下の条件にすべてあてはまる場合、個別の許諾なしにこれをみとめます。

　１，個人によること。

　２，営利を目的としないこと。

　３，それによって経済的な利益を得ることがないこと。

二、前項の定めるところにかかわらず、以下の場合は、著作物の二次利用をみとめません。

　１，その二次的著作物に、露骨な性描写や同性愛表現が含まれる場合。

　２，その二次的著作物が、特定の宗教・思想あるいは政治団体の宣伝もしくはそれらへの批判を目的としたものである場合。

　３，その二次的著作物が、らいとすたっふ及びその所属作家の社会的信用を失墜させ、または経済的損失をあたえるような内容である場合。

　４，その他、らいとすたっふがとくに不適切とみとめる場合。

— Heldensagen vom Kosmosinsel —

銀河英雄伝説

星を仰ぐもの

Star Gazers

(下)

猫屋　真

表紙/挿し絵 南秦広(サークル『銀の砂』)

目次

イゼルローン再び …… 7

ゲルタ怒る …… 15

ヴァンフリート再戦 …… 31

勲章と英雄と …… 42

セカンドラウンド …… 48

自由への戦い …… 64

脱出 …… 82

エピローグ …… 95

注： 後書きのページを最初に読まれませんように。

主要登場人物

★本編オリジナルキャラクター

【帝国側(Reich)】

ラインハルト・フォン・ミューゼル
(Reinhard von Müsel)
一七歳にして、大佐。重巡航艦『ノルデンⅦ』艦長。金髪と蒼氷色(アイス・ブルー)の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。

ジークフリード・キルヒアイス
(Siegfried Kirchheis)
同じく一七歳の大尉。ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感じの良い青い目の長身の若者。重巡航艦『ノルデンⅦ』艦長付き副官。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト
(Annerose Graffin von Grünewald)
ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。

ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール
(Winfried von Riefenstahl) ★
帝国軍准将。育ちのいい貴族の坊ちゃん雰囲気の青年。シュミットバウアー大佐の士官学校時代の同期生で、優等生。三一歳。根はまじめなタイプだが、ややお気楽極楽な性格であり、幼年学校から士官学校時代は『軽薄貴公子』と呼ばれていた。ブラウンシュバイク公に連なるリーフェンシュタール伯爵家の三男。

ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー
(Johann Klementz von Schmittbauer) ★
帝国軍大佐にして男爵家の長男。短くした金茶色の髪、光を受けると金色に見えるブラック・グリーンの瞳。痩身。生真面目な、古武士的とも言える性格。帝室に敬意を抱いており、貴族の義務としての対同盟戦へ志願する。幼年学校以来のヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールと同期。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー
(Cornelia Gertrude von Schmittbauer) ★
シュミットバウアー大佐の妹。愛称はゲルタ。二二歳。エルフを思わせる端正な細面、赤みの強い金茶色の巻き毛、エメラルド・グリーンの瞳。誇り高い意思的な容貌の女性。兄譲りの長身。

フレーゲル男爵
(Baron von Flegel)
ブラウンシュバイク公の甥。ラインハルトより五歳年長。二〇歳の時には帝国軍少佐。本編の時期には二二歳で大佐。外伝1には「戦場経験もなく帝国軍少将たり得る云々」とあったが、一応はイゼルローンまでやってきていることにしよう……

アルツール・ロイシュナー
(Arthur Reussner)
中佐。『ノルデンⅦ』副長。老練な船乗り(後に『ブリュンヒルト』の艦長。原作では中佐で艦長になっているが、旗艦艦長なんだから大佐でしょう)。

オットー・シェンク・シェーラー
(Otter Schenk Scheler) ★
大尉。『ノルデンⅦ』砲術長。

アーベル・ツア=ミューレン
(Abel Zur Mühlen) ★
大尉。『ノルデンⅦ』航海長。

ヨハン・ツゲントフルース
(Johann Tugendfluss) ★
大尉。『ノルデンⅦ』機関長。

ヴァルト・シュニッツラー
(Walt Schnitzler) ★
大尉。『ノルデンⅦ』戦務長。

ホルスト・ジンツァー
(Horst Sinzer)
大佐。重巡航艦『メルンベルクⅧ』艦長(後のミッターマイヤー四天王の一人)。

クルト・マイヤー
(Kurt Meyer) ★
『ノルデンⅦ』砲術士。曹長。禿頭顎髭の悪人面の下士官だが、ラインハルトとキルヒアイスに絶対的信頼を置いている。特技はフォークダンス(?)。

アレクサンデル・バルトハウザー
(Alexander Balthauser)
大佐。重巡航艦『グライフェスヴァルトⅥ』艦長(後ロイエンタール麾下に入り、よく働きます)。

エミール・フォン・オイゲン
(Emil von Eugen)
大佐。重巡航艦『ハイテルバッハⅡ』艦長(何度もビッテンフェルトを救う、あのオイゲン参謀長です)。

グレゴール・ギュンター・マルクグラーフ
(Gregor Guenter Markgraf)
大佐。重巡航艦『シュトラスンクⅣ』艦長(後にシュタインメッツを補佐した苦労人)。

マントイフェル
(Mathieu von Manteuffel) ★
少将。陽動部隊司令官(マントイフェルは非常に有名なドイツの軍人の名前です)。

シューラー
(Frank George Schuler)★
少佐。陽動部隊先任作戦参謀。

ロベルト・“シュピーゲル”・クルツバッハ
(Robert "Spiegel" Kurzbach)★
中佐。ブラウンシュバイク公爵の私兵団に所属する。ヴィンフリートに請われてその参謀長格としてヴァンフリート七-四基地へ同行する。

【自由惑星同盟側(Free Planets)】

ヤン・ウェンリー
(Yang Wen-li)
中佐。同盟軍第八艦隊作戦参謀。魔術師ヤン(このころは未だそう呼ばれていないけれども……)。第五次イゼルローン要塞攻防戦終了後の人事異動の狭間で、偶然、第八艦隊の幕僚団に臨時所属となる。

アップルトン
(Appleton)
中将。第八艦隊司令官。この人がどんな人だったのか、本編にも全然紹介はないし、まるでアムリッツァで戦死するためだけのキャラクターのようで、気の毒です。フルネームすらもらっていないし…

ステン・ビョルケル
(Sten Björker) ★
准将。第八艦隊作戦先任参謀。

アーバークロンビー
(Walter Abercrombie) ★
少佐 第八艦隊情報先任参謀。

キャヴェンディッシュ
(Thomas Cavendish) ★
少佐。第八艦隊戦務参謀。

アドロフ
(Victor Vladimir Kondratovich Adrov)★
少将。同盟軍第八艦隊第三分艦隊司令官。

ルイシコフ
(Yuliii Rodionovich Ryzhkov) ★
中佐。第三分艦隊参謀長。

ホイットニー
(Cortny James Whitny) ★
少将。第八艦隊第五分艦隊司令官。

バリー・シグニチャー
(Barry Signature) ★
中佐。第五分艦隊参謀長。

アレックス・キャゼルヌ
(Alex Caselnes)
大佐。後方勤務本部付き。ヤンの士官学校時代の先輩で、ヤンにトラバース法による養子の受け入れを打診する(ユリアンがヤンの所へ来るのは、この戦いが終わって間もなくのことです)。

若手の国防委員
(Job Trünicht)
出世頭、近い将来の同盟元首を嘱望されるとある若手国防委員。

イゼルローン再び

ラインハルトが指揮する『ノルデンⅦ』以下三隻の重巡航艦がイゼルローンへ帰還したのは、帝国暦四八四年八月二五日のことである。一五日前、意気揚々と出撃していった二〇〇隻近くの、敗残と言うにはあまりにも徹底的に撃ち減らされた姿を見る要塞将兵の視線は、意外にも冷たいものではなかった。

『ノルデンⅦ』の帰還に先立ち、ゼークト大将麾下の要塞駐留艦隊主力六五〇〇隻も帰還を終えていたが、こちらは一艦の艦艇も一機のワルキューレも失わない、無傷の帰投だった。

軍事力の動員には莫大な軍事費が不可欠であり、消費額は艦隊の行動距離に比して急激に増大する。駐留艦隊主力の回廊外への動員は、ゼークト大将の一存で行い得るものではなく本国の承認が必須だった。

「我が艦隊主力をもって叛徒どもの目をヴァンフリート宙域から逸らしめ、もってヴァンフリート全域を皇帝陛下の御稜威（みいつ）のもとに、叛徒鎮圧の鞏固なる足場とせん」

視野の内に『失敗』の文字のかけらすら見いださぬかのようなゼークトの説明に、艦隊総司令部、および統帥本部の中で危惧の声がなかったわけではない。陽動を称して艦隊主力を動かすとしても、叛徒どもがそれに乗ってくると言う保証はない。あるいは乗ってきたとして、陽動で終わればよし、万が一にも正面からの戦いに向かって叛徒どもが好戦的感情を奔騰させてきたとしたらどうするのか。

あるいは――――

「そもその要塞駐留艦隊はイゼルローンの守りをもって任ぜられた、皇帝陛下の艦隊である」

叛徒どもが、全面的な戦闘に引きずり込むことで駐留艦隊主力を回廊の外側に拘束し、その一方で小賢しくも別働隊を組織してイゼルローン回廊の突破を図ったとしたらどうなるのか。昨年の大規模な戦闘の打撃は、帝国軍艦隊からもイゼルローンを後詰めする戦力的余裕を大きく削いでいる。要塞の守りはすなわち、帝国の守りである。要塞の守りが破れたとき、神聖不可侵の帝国領は叛徒の蹂躙するところとなるのではないか。

半可通の戦略論と、『帝国の不可侵』なる教条論を無原則に搗き混ぜたような批判を、ラインハルトなら笑殺しただろう。

第一に、昨年の第五次イゼルローン要塞総攻撃での損失は叛徒…同盟軍…にも、帝国軍と同様の戦力的な疲弊をもたらしている。『小賢しくも別働隊を組織して…』と言うが、今の彼らにそんな余裕はない。よしんば可能であり、要塞の『雷神（トォール）のハンマー』を躱して帝国領へ侵入し得たとしたとしても、補給が続かない。艦隊主力が出払ったとしても、要塞に残る数千の戦闘艦艇は、輸送部隊を掃滅するには十分以上のものである。

笑うべきは、教条を信奉するの余り、自己矛盾に陥っている愚かしさと、みずからの愚かしさを客観できない視野の狭窄ぶりだった。敵を、彼らが自称する自由惑星同盟（フリー・プラネッツ）と呼ばず、『叛徒』と蔑称する。彼らは外敵ではなく、帝国の中の叛乱分子であると強弁する教条は、彼らによる『帝国領侵入』への危惧と相容れない。同盟をあくまで叛徒と言い切れば、すでに帝国領は侵入され、蹂躙されているのであり、彼らを外敵と認定すれば、彼らを叛徒と呼ぶその言葉自体に矛盾を来す。

もともと理由があって生じる慣習なり、成文化された法律なりが、謂われを見失って根拠を論じることさえ禁忌とされるに至ったのが教条である。論理性の有無より、その墨守が優先し、目的化しているのだから、そんなものを前提に戦略的議論が成立するはずもないのである。

ラインハルトから見れば笑止極まりない、しかし、もっともらしい修辞にくるまれた『議論以前の建前論』は、実に数十回にわたって要塞と帝都の間で応酬された。その結果として帝都からゼークト大将の許へ送られたのは『皇帝陛下はゼークト大将の忠誠と忠勤を誼(よしみ)給いたり』という、はなはだ曖昧な結論だった。

ゼークト大将は、これをフリードリヒ四世からの承認と解釈して出撃準備に着手し、一方帝都の軍事官僚達は、成功すれば作戦は承認されていたことになり、失敗すればゼークトが皇帝陛下のご意思を見誤っていたと主張し得る状況を確立したことに安堵することになった。ゼークト大将から見ればいい面の皮と言えなくもないが、成功の果実だけを自分の手許に残し、失敗の苦い杯は自分以外の誰か…たとえば実戦指揮官…に押しつける程度の官僚的手腕にすら欠けるようでは、帝国軍大将の地位を保つのも覚束ないのである。

脱線が甚だしくなったが、グロルマン戦闘グループをヴァンフリート宙域へ送り出すと同時に、ゼークト大将は駐留艦隊主力約六五〇〇隻と共にティアマト宙域に出撃した。これでグロルマン准将が、五〇隻の大型輸送船に満載した軍需物資をヴァンフリート七‐四基地に無事に搬入し、基地の飛躍的強化に成功すれば、これまでかなわなかった『叛徒の猖獗領域深くに帝国の拠点を確立する』という巨大な戦略的成功の実現者としての栄光がゼークトの許へ転がり込んでくるはずだった。

しかし、ゼークト大将の願望をよそに、作戦は完膚無きまでに失敗した。要塞に帰還し得た残存艦艇僅か三隻という惨状が報ぜられたとき、ゼークトは一瞬にして皮膚を蒼白に変じさせた。

ゼークトの怒りに物理的な方向性を与えてしまったのが、コーヒーを運んできていた従卒の上げた小さな悲鳴だった。司令官の激怒の形相に恐怖を覚えた彼は、身を竦ませて司令官の視線を逃れようとしたが、吐きだした息が咽喉を震わせてかすれた笛のような音を立てたのが、ゼークトの逆鱗に触れる結末を招いた。

副官が止めるいとまもなく、受け取ったばかりだったコーヒー・カップを、ゼークトは不幸な従卒に叩きつけた。避けようとして足を滑らせたことが、彼にさらなる不幸を呼び、唸りを上げて飛来した白磁のカップは、熱い液体を撒き散らしながら彼の鼻梁に激突した。鼻梁の砕ける鈍い打撃音、カップが割れて散乱する甲高い破壊音に苦痛の悲鳴が重なり、駐留艦隊旗艦の艦橋に時ならぬ三重の不協和音を轟かせた。

「そやつをさっさと連れて行け‼ それから、全艦に伝達、ただちに要塞に帰還するとな‼」

ゼークトは彼が敗報を運んできた不幸の使者ででもあるかのような視線を従卒に浴びせ、吐き捨てるように命じた。

「無能者めが‼」

砕かれた鼻梁と、顔面一杯に浴びせられたコーヒーの火傷からの苦痛で泣き叫ぶ従卒が艦橋から連れ出されていくのに、ゼークトはもう一度、火を噴くような唸りを漏らした。彼の許へ軍事的成功の果実をもたらすどころか、彼が無能と断じたのはむざむざと戦隊を全滅させ、敗北の後始末という災厄を押しつけたグロルマン准将に向けたものだった。

要塞に帰り着くなり、生き残った三隻の艦長たち、ラインハル

ト、シュミットバウアー、ジンツァーの三人はゼークト大将の執務室へ呼び出された。官僚的な責任転嫁に基づく叱責と非難を予想していた彼らだったのだが、ゼークト大将は彼らを責めなかった。
「卿らはよくやった。少なくとも最小限度の補給を成功させたのみならず、叛徒どもを強かな目に遭わせたことは、帝国の誇りを末代にまで伝えるものだ」
それが賞賛を示す言葉だと気付くまでに、ラインハルトですら数秒を要したほどだった。
「恐れ入ります。一にかかって皇帝陛下の御稜威と、よろしきを得た司令官閣下の作戦指導の賜（たまもの）であります」
半瞬で面（おもて）から驚きの色を拭い去ると、ラインハルトは用意してあった言葉を返して深々と…心にもなく…頭を下げた。
「任務を完璧には果たし得ず、友軍将兵を敵地に残したまま帰還したことは遺憾の極みと考えます。何とぞ、友軍救援の作戦には我らを加えていただけるよう、皇帝陛下のお許しをいただけるよう、お力添えをお願いします」
「友軍救援？」
一瞬、苦いものがゼークトの面上をよぎるのを、ラインハルトは無視して素早く言葉を継ぐ。
「ヴァンフリート七‐四基地より、友軍を無傷で救い出せば、今次の作戦における我が軍の成功はさらに輝きをいや増し、叛徒どもに救いがたい敗北感を抱かせるにいたると、小官は信じます」
「…」
ヴァンフリート七‐四から味方将兵を無傷で脱出させれば、今回の作戦の失敗は償われる――ゼークトがそう解釈するであろうことは十分に計算済みのラインハルトだった。
即答を、ゼークトは与えなかったが、彼らに退出を命じた際の言葉が、明らかにラインハルトの上申に心を動かされていることを示すものだった。
「作戦の研究は士官たる者の義務である。十分に研究しておくように」

そんないきさつがあり、『ノルデンⅦ』を要塞宇宙港に入れて直ぐ、ラインハルトとキルヒアイスはほとんど休む暇も惜しんで新たな作戦の計画に手を染めている。新たな作戦…無論のこと、ヴァンフリート七‐四基地の救援作戦である。
ゼークトとの会見結果を知らされ、キルヒアイスの眉が大きく動く。意外、というよりも驚きを示した動きだった。
「ラインハルト様、つまり…」
「そう、ゼークト大将閣下は、よく帰ってきた。よくやった。俺たちの働きに満足している、と仰せだ」
「ええ、そうですね。しかし…どうしてでしょう？」
キルヒアイスの疑問は、彼らが称賛に値する働きをしなかったという自意識を意味しない。全滅してもおかしくない状況下で、とにかくも十分な弾薬・燃料と、当座必須の食糧の補充に成功し、三隻の巡航艦とその搭乗員、同じく三隻の輸送船搭乗員を生還させたのである。これで、負けたのはお前達がなってなかったからだ、などと叱責や懲罰を浴びたのではたまったものではない。
勝つための権限も資金も与えられていなかった。にも関わらず全面的な責任だけは取らされる。帝国軍では珍しくもない事例だったし、ある程度、そう言った理不尽な問責がなされることを覚悟していただけに、ゼークトの態度は意外すぎて驚きを誘ったのだ。

ラインハルトは嗤う。本質的な彼の気性とは正反対を指向しているとは言え、ゼークトの心理程度なら開いた本を読むよりも容易い。
「問題をすりかえようとしているのさ」
「すり替え…ですか？」
「ああ。官僚（やくにん）のお得意だ。ゼークト…」
「ラインハルト様」
キルヒアイスの視線に気付いたのか、ラインハルトは一瞬言葉を詰まらせ、それから咳き込むようにして『大将は』と続ける。無意識にとは言え、いや無意識だからこそ彼らの上官を呼び捨てにしたことが知られれば、今は寛大に見えるゼークト大将の態度が一変しかねない。彼らがいるのは要塞の艦長演習室。少なくとも何を話しても安全と信じられるリンベルク通り（シュトラーセ）の下宿ではない。
「大将としては、俺たちの部隊が全滅したことよりも、艦隊主力を素早くティアマトから退かせて兵力を損なわなかったことを、より大きな軍事的成果だと主張するつもりなのさ」
「しかし…それでは」
今回の作戦の目的はヴァンフリート七‐四基地への大規模な補給だった。基地を、制式艦隊の補給・整備も可能な本格的基地へ大きく拡張するのに十分なレベルの。その任に当たったグロルマン戦闘グループが全滅し、補給も基地を向こう三ヶ月程度維持できる程度に留まった以上、作戦は失敗である。
「失敗したら責任をとらなきゃならないだろう？」
ラインハルトの言葉は冗談めかしているが本質を突き通すものだった。
キルヒアイスは頷く。
「つまり、何らかの形で処罰を受けなければなりませんね」
二〇〇隻の艦艇を失い、五〇〇〇人の将兵を死地に放置する結果になった。言い方を変えれば、たかが二〇〇隻、たかが五〇〇〇人。毎年、数千の艦艇、数十万の死者を大量生産する対同盟戦の中では、『誤差』と呼べる数。ゆえに、責任をとったところで、ゼークト大将には、軍法会議、あるいは罷免や降格といった重罰に直面しなければならない恐れは全くない。だが、高級官僚の通例通り、ゼークトもまたその経歴に毛筋ほどの瑕疵を与える引責すら許容しないだろう。
それ以前に、『たかが二〇〇隻、たかが五〇〇〇人』。その考え方自体、精神（こころ）の深奥を強烈に軋ませる、ある種の嫌忌をキルヒアイスに抱かせずにはいられない。
「そうだ。だから、作戦は成功したのだ、と主張しなければならないってことになる。俺たちが還ってきたことも、とにかく補給は成功だったんだと主張できる根拠にはなるしな」
「…卑怯ですね」
一瞬、ラインハルトはキルヒアイスの言葉を取り損ねたようだった。
青い水晶を思わせる、しかし、無機質な鉱物には絶対に不可能な生気に満ちた光を閃かせる蒼氷色の瞳が、不思議そうな色合いに蒼く翳って見えた。数瞬、華麗な万華鏡（カレイド・スコープ）に似て、複数の彩（いろどり）が通り過ぎた後、理解の光が取って代わった。
「だからこそ、俺たちがいる」
潜めた声。ほとんど吐息としか思えぬ、聴覚の下限に辛うじてひっかかる程度の囁きだったが、声に秘めた覇気は隠しようもなかった。
「それで…」

居住まいを正し、キルヒアイスは話題を引き戻した。
「再戦は可能でしょうか？」
『責任のすり替え』が成功してしまえば、ゼークトはヴァンフリート七‐四を忘れる。いや、思い出したくない失敗を思い出させる忌まわしい言葉として、ヴァンフリート七‐四へのあらゆる新たな作戦の提案に対して耳をふさぐようになるのではないか。
キルヒアイスの危惧は、当然ラインハルトの共有するところだった。
「一応、考えてはある」
「…シュミットバウアー大佐…ですか、ラインハルト様？」
「ああ、よく分かったな」
「リーフェンシュタール准将はシュミットバウアー大佐の親友ですし、ゲルトルーデ（フロイライン・ゲルトルーデ）嬢の…恋人のようですから、大佐は准将を救いたいと思っておられるでしょう」
『ゲルタに似合うのは花嫁衣装であって喪服ではない』――――自暴自棄になって無意味に生命をすてるような行動に出るな。ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーが込めたメッセージを、キルヒアイスはそう理解していた。恋人のために生きろ、と。
ラインハルトがいきなり口調を変えたのはその時だった。
「キルヒアイス、俺か姉上か、どちらかひとりしか救えない、そんな状況になったら、お前はどうする？」
思考のハンドルを切り損ねて、悲鳴を上げそうなほどの話題の転換は、ラインハルトがあるいはキルヒアイスと似たようなことを考えていたからかも知れない。
だが、問われてこれほど困る質問というのも他にはないのではないか。親友か恋人か。究極の選択というやつだけれど、こうも気軽に究極の選択を迫られてはたまったものではない…え？、今、何と？…恋人!? 恋人って…まさか…!?
全身の血流が音を立てて頬へ上がってくるような錯覚を、キルヒアイスには錯覚とは思えなかった。ラインハルトとアンネローゼのいずれか一人しか救えない状況、親友か恋人か…つまり、アンネローゼ（イコール）＝恋人!?
ラインハルト様にとって一番大事な方はどなたですかと逆に聞き返し、無論アンネローゼに決まっていると応じるラインハルトに、私にとってもそうですと切り返す。それはまだ数年後の二人の会話である。ラインハルトに較べて老成していると言われる、あるいはより精神的な平衡感覚に恵まれているキルヒアイスだったが、この時は一七歳。まだ少年と呼ばれてしかるべき年齢からは自由ではいられなかった。
「シュミットバウアー大佐に、リーフェンシュタール伯爵家へ口添えを頼んだ」
不意に真っ赤な顔になって黙りこくってしまったキルヒアイスに、ラインハルトはあっけにとられたが、『究極の選択』に固執する意思は全くないようで、さっさと元の話題に視線を戻してしまっている。
「――――それでシュミットバウアー大佐は？」
ヨハン・クレメンツの、硬質な彫像を思わせる表情の動きの少ない風貌をキルヒアイスは思い浮かべている。大量に上昇してきていた血流は、ようやく頭の働きを阻害しない程度には下がり始めていた。
ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーという人物の為人を、キルヒアイスは彼なりに察している。ただ単に密告してくれ、というだけでは首を縦に振ることはなさそうだった。
ふと、キルヒアイスはあることを思いつき、それを思いついたことに、まるで咽喉の奥に生臭い臓物でも詰め込まれたような、

吐き気を催すような不快感を覚えた。ラインハルトをして、確実にヴァンフリート宙域へ赴かせるには、そういう手段もある。手段はあるが…

「…口添えというよりも、密告の依頼だがな。形は意見具申だが」

曰く、『ゼークト大将は自らの小功に安んじて、リーフェンシュタール准将とその部下を叛徒どもの版図のただ中に孤立させたまま放置しようとしている。よろしくゼークト大将に命じ、幸いにも生還した作戦部隊の残存士官に指揮を執らしめ、リーフェンシュタール准将以下の救援作戦を再起せしむるべきである。仮にも帝室の藩屏たるリーフェンシュタール伯爵家の一族と、その忠良なる部下を敵地に放置し、拱手して死に赴かせしむがごときは、不忠の大なるものとして皇帝陛下の為に採らざるものである』。

キルヒアイスは頷いた。

「それで、シュミットバウアー大佐はどうやってリーフェンシュタール伯爵家へ口添えなさる気でしょうか？」

ラインハルトの描いたように形のいい眉が初めて、微かな危惧に翳ったようだった。

「何も言わなかったが…キルヒアイス、こう思うんだが」

少し考え、それからラインハルトは言葉を継いだ。

「シュミットバウアー大佐の自宅には執事とか、使用人とか言うのがいるかな。調べられないか？」

反問しかけ、キルヒアイスは察した。ヨハン・クレメンツの行動原理を、キルヒアイスはラインハルトよりもよく理解していると言ってよかった。彼の判断基準は、それが帝室の為になるか否か。なると信じた以上、無記名の書簡やそれに類する手段を、ヨハン・クレメンツは是とするまい。そして、ヨハン・クレメンツの行動や考え方を、ラインハルトやキルヒアイス以上に熟知し、予測している存在が帝都にないとは限らない。

一方、ヴァンフリート七‐四救援作戦の再起は、ある意味で今回の作戦失敗を認める意味合いを帯びるのだ。ゼークトとは言わず、軍首脳が今回の失敗にもゼークトへ寛恕を示そうとしているとすれば、余計なことは言われずに済めばそれに越したことはない。

「分かりました。たしか…トーンという名前の執事がいたと思いますが。直ぐに調べてご報告します」

「頼む」

「それと…」

言い差したものの、不審そうな視線を上げてくるラインハルトを前に、キルヒアイスはそれ以上の言葉を連ねることができなかった。腐敗臭に似た、強烈な不快感が嘔吐を伴って咽喉の奥からせり上がってくるのを、キルヒアイスは必死にこらえた。

「――では、行ってきます」

唐突に立ち上がった親友に、ラインハルトは不審を隠しきれないようだったが、それを言葉に変えようとはしなかった。問うてどうする。キルヒアイスが自分に不利益なことをかけらほどでもするはずはない。キルヒアイスが口にしなかったということは、口にすることが自分にとって良くないことになると判断したからだ。キルヒアイスがそう判断した以上、とやかく言う必要などない。

絶対の信頼を示すその態度に、キルヒアイスは心から感謝した。

「キルヒアイス」

「はい」

「こんなこと、早く終わらせたいな」

「ええ」

キルヒアイス微笑う。その笑顔はもう完全にいつもの彼だった。

「そのためですから」

しかし――――
艦長演習室を出て自室へ向かう道すがら、それでもキルヒアイスは自問を続けていた。
ベーネミュンデ伯爵夫人に無名の密告状を送りつけ、ラインハルトと自分を窮地に追い込むという理由付けで、ラインハルト指揮の下にヴァンフリート宙域への再出撃を命じるよう要路に働きかけさせる…その思いつきが、どうしてあれほどまでに、まるで腐肉のただ中に踏み込んだような汚臭と嫌悪に満ちた思いを引き起こしたのか、と。

『人類史上、他に比肩すべき存在を求め得ぬナンバー2』
ジークフリード・キルヒアイスを評する際、後世の歴史家の多くが共通して使用する表現がそれである。そして、この評言には、『ただし…』に続く注釈を伴う場合が極めて多かった。
「ジークフリード・キルヒアイスが唯一欠いていたのは、謀略に対するに謀略を以て対する能力であったとも言える。能力と表現するのが不適切であれば、その能力を行使するための気質の欠如と言い換えても良い」
それがジークフリード・キルヒアイスという人物の限界であり、ラインハルト・フォン・ローエングラムが、その覇業の過程に於いてパウル・フォン・オーベルシュタインを重用し、あるいはハイドリッヒ・ラングのような佞人の跳梁をある程度まで許した理由である…後年、キルヒアイスの為人についてそのような分析が広く行われるようになる。無論、キルヒアイスその人はもちろんのこと、ラインハルトの名さえ歴史を彩った個人の一人として語られるようになって後のことではあるが。

これはある程度まで真実を穿った分析であり、オーベルシュタインがリップシュタット戦役を前にしてラインハルト陣営に加わっていなければ、同戦役はあるいは帝国全域を巻き込んだ長期の内乱と化していたかも知れない。あるいは、ラングの存在を無視しては、ローエングラム王朝黎明期の反ラインハルト派によるいくつかの陰湿な策謀が、開花前の段階で摘み取られずに歴史を動かした…という強引な仮定も不可能ではない。
「しかしながら、それゆえに権謀を糧とし、術策によって渇きを癒す人柄ではなかったとしてジークフリード・キルヒアイスを非難するは余りに愚かである」
治世初期に犯したいくつかの失敗ゆえに、ラインハルト・フォン・ローエングラムが否定的に評価されるのは、天体望遠鏡が顕微鏡の機能を併せ持たぬが故に非難されるがごときものであり、無意味である。後にラインハルトに向けた評価と同じ論理において、エルネスト・メックリンガーはその手記に記している。
「一つの国家が新たに成立するとき、運営がその根本に於いて清廉であるか否かによって、長きにわたって歴史の一角を占め続け得るか、あるいは短命な泡沫として歴史の表舞台から消え去るのかの命運を定められると言って良い。国家にしても、国家の規模に至らぬ組織にしても、流血と陰謀によって樹てることはできても、それら陰惨な事実の存在を知り、必要性を認めつつも、敢えて拒否する人物を欠いたとき、創業は単なる暗黒劇と化してしまう。思うに、権謀術数の世界に距離を置き得たからこそ、ジークフリード・キルヒアイスはラインハルト・フォン・ローエングラムと創業の行の長きを共にできたのである」
この時期のキルヒアイスの視野には、ローエングラム王朝の創業などという遠い道しるべは入っていない。無論、メックリン

ガーにしても、この時期は人づてにラインハルトの存在を知るのみだった。ラインハルトやキルヒアイスを評した手記にしても、さらに後年、彼自身が元帥号を帯びて後の回顧に他ならない。帝国暦四八四年の後半においてすら、ゴールデンバウム王朝は、まだ不動の鞏固さを誇り、自由惑星同盟との戦いもまたこの先数百年にわたってもその終焉を迎えぬかに見えていたのであるから。

ゲルタ怒る

九月五日。

帝都（オーディン）。

晩夏。街路樹からはまだ蝉の合唱が聞こえてくる。ただし、それほど盛大でも力強くもないが。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーは律動的な歩調で家路をたどっていた。正確には、『律動的』というには少々、乱暴な足取りだった。左右に振り分けて細ひもで筒状に束ねた金茶色の髪が、必要以上に広い歩幅に合わせるようにうなじの後ろでぴょんぴょんと跳ねていた。宮廷貴族好みのやたらに装飾の多い服装を避け、動きやすさを優先させた簡素な装いが、余計に彼女の身体の動きを弾けるような活発さに見せている。

兄同様、鍛えても筋肉が太さを増さない体質らしく、一見したところでは『嫋やかな深窓の令嬢』と言って通るのが、今のゲルタ…コルネリア・ゲルトルーデの容姿だった。

「一体、どうしてあんなに石頭なの？ 二言目には規則、規則。まるで大帝陛下自らがお定めになった法律みたいに言い立てて‼」

すれ違う人々が、驚いて振り返るのには気づいていた。エルフを思わせる細面と、鮮やかなエメラルド・グリーンの目、そしてこれも兄譲りの長身の若い娘が眦を決した表情で舗道を闊歩していくのは、確かに周囲の目を引き寄せるに十分な光景に違いなかったから。まして、その鮮やかな翠の眸が、光の加減で金色を帯びたブラウンの光をまとっているとあっては———。

コルネリア・ゲルトルーデ…兄をはじめとする彼女に親しい人々の呼び方を借りればゲルタは、いつもなら、怒りを皮膚一枚

下に押し込むことになれている。が、この日は少々事情が違っていた。
本来、シュミットバウアー男爵として宮廷に伺候し、『皇帝陛下への意見番』として皇帝にも近侍しなければならない兄ヨハン・クレメンツは、典礼省の愚にも付かない裁定によって宮廷を遠ざけられ、生命を賭けて最前線のイゼルローンで叛徒たちと戦わなければならない。兄が将官としての地位を得られぬ限り、シュミットバウアー男爵は父の代で絶えることになる。
「『皇帝陛下への意見番』などと申しましてもね…」
典礼省の下っ端役人…継嗣にあたっての賄賂を露骨に要求し、兄がはねつけると、下級貴族に対する侮蔑も露わに言い放ったのだと言う。
「一介の男爵の意見など、皇帝陛下は必要とされてなどおりませんよ。まして、継嗣のために必要な費用すら工面できぬような貧乏男爵の意見など…」
自分なら、そやつにその場で手袋を投げつけたかも知れない…ゲルタは本気でそう思う。一三歳だった兄は眉一つ動かさず、『引き取っていただきたい。卿の助力を借りてまで男爵家の継嗣を果たそうとは思わないから』と言い返した。
「先代のコルネリウス様もああ言う、冷静な中にも一本芯の通った方でした。まことにご立派でした」
ことあるごとに執事のハンスが彼女に語って聞かせたエピソードだった。
「余り、人と深入りするな」
その兄がことあるごとに妹に言い聞かせたのがその言葉だった。
当主と言わず、シュミットバウアーの人間は帝室のために生命を捨てなければならない…切り捨てかねるような他者との関係を持ちすぎれば進退を誤る。

ヨハン・クレメンツは言わなかったが、ゲルタには分かってしまった。兄が戦場で斃れることがあれば、可否はともかく彼女がシュミットバウアーの家を代表する立場になる。そして、彼ら兄妹の祖父、そして父、二代にわたって当主が非業の死を迎えているシュミットバウアー男爵家だった。
兄にもしものことがあったら、自分がシュミットバウアー男爵家を継ぐのだ…ゲルタがそう決心を固めるようになったのは、まだ一〇歳の声を聞いていなかった年頃である。幼い日の思いこみだけに、かえって揺らぎの入り込む余地が少ないらしい。通常の貴族…下級という注釈は付くけれども…の子女としての生活の傍ら、ゲルタが受けてきたのは軍事教練やら戦術学の初歩やら、あるいは歴史や戦史の講座など、およそ良家のお嬢様にはあるまじき教育だった。
二〇歳になった頃に、頼み込んで兄に組み手を相手してもらったことがある。最初はあしらうつもりだったらしいヨハン・クレメンツだったが、最後には真剣に応じたあげくに、あやうく妹の右腕をへし折りかける羽目に陥った。
「痛ぁっ‼」
思わずゲルタが上げた悲鳴に、ヨハン・クレメンツは呆れたように問うたのだ。
「今…女みたいな悲鳴が聞こえたが、お前か…？」
わたしですっ‼ 憤然とする妹に、ヨハン・クレメンツは苦笑した。
「自分より強い相手には喧嘩を売るな。殺されるぞ」
腕が格上の相手でも、手加減できるレベルをすでに彼女の格闘術は超えている。相手の力量を見切ることと、余計な諍いを避けること、それ以外の目的で格闘術の技量などひけらかすものではない…兄の言葉を素直に首肯したゲルタだった。

兄の忠告を容れたわけではなかったが、学生時代を通じてゲルタは他者との深い交わりを求めなかった。友人は数多くいたし、その中には親友と呼べるような相手も少なくなかった。が、関係を仲介する存在…学校なり、共通の友人なりがなくなれば、時の流れが自然に互いの記憶を薄らがせ、絆を解きほどいてしまうのを、敢えてとどめようとはしなかった。ただ一つの例外を除いては…

だから、兄の次の一言には顔を真っ赤にして絶句する以外になかった。

「ヴィンフリートに組み手を挑んだりするな」

兄にとっても、ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールは唯一、単なる友人という域を超えた相手に違いない。そして、自分にとっても。

「志願の意志と、皇帝陛下への忠誠は、軍務省としても高く評価するものではありますが…」

再びゲルタの歩調が荒っぽくなってきたのは、ここ数ヶ月で何度か足を運んできた、帝国軍軍務省での出来事を思い出したからだった。

ゲルタは今年、帝都の大学を卒業した。成績自体は、歴史学に関するそれが突出している以外はまず中の上といったレベルで、研究者としての残留を大学から慫慂されるほどのものではない。

ゲルタの志望は、あくまで兄同様に軍士官として前線に出ること…正確には、万一の時に兄に代わってシュミットバウアー男爵家を嗣げるよう、軍士官への道に就くこと…だった。だから、一二歳の時には幼年学校に、一六歳の時には士官学校にそれぞれ願書を出したものの、いずれも拒否された。やむを得ず、一般の学校に籍を置いていたのだ。

ちなみに一五〇年間もの戦い、特に第二次ティアマト宙域会戦での戦慄すべき人的リソースの損失から、帝国軍軍務省も民間での予備兵力の養成に一定の援助を与えるようになっている。普通の学業と並行させて、ゲルタが通ったのも、そう言った非公式の教育機関だった。

だが、ゲルタの志望は、帝国軍が前線士官に女性を採用した事例がない、というただそれだけの事実で実現の機会を与えられようとはしなかった。

「意志と忠誠はもちろんです。それなりの教育も受けてきました。その証明書もあります。どうして認めていただけないんでしょうか」

「それが規則だからです」

ゲルタ自身の言葉を借りれば、それが大帝ルドルフの定めた祖法でもあるかのように、係官は厳かな口調で言い切ったのだ。

「前線に赴く帝国軍士官、いえ士官に限らず下士官、兵といえども、女性を採用することは、我が軍の内規として許されていません。後方勤務本部なら、まあ、なんとかならぬでもありませんが――」

「でも、叛乱軍は女性を戦闘部隊に組み入れていると聞いています」

それが、叛乱軍…自由惑星同盟軍…の『野蛮さ』を強調するための報道とは知りつつ、ゲルタは敢えて論拠とせずにはいられなかった。

「彼らにできることがどうして？」

「叛乱軍と、ルドルフ大帝陛下以来五〇〇年の光輝ある我が帝国軍をひとしなみに論じるのは、皇室の藩屏たる貴族の一員として見識に欠けた言辞と申し上げざるを得ませんぞ、フロイライン・

シュミットバウアー」
「でも…」
「叛乱軍は女子供までを前線に駆り立てねばならぬほど窮しているのです。我が帝国が、彼らの窮乏のあまりの苦し紛れの策を真似せねばならぬ理由など、どこにもありません」
言い切り、不意に係官は表情を緩めた。ただし、ゲルタが思わず身震いした程、その笑いは下卑た好色さを帯びていたのだけれども。
「フロイライン・シュミットバウアーほどの容色があれば、一介の軍人として帝国に報じるよりももっと帝国のためになることがありましょう」
「分かりました。もうお願いしません‼」
相手が後を続ける前に、席をたったのは、後にどんな言葉が続くかが容易すぎるほどに予想できたからだ。曰く、それだけの容姿をお持ちなら、宮廷で皇帝陛下のお目に止まることも難しくはありますまい。
「後宮にて陛下にお仕えするのも、貴族の子女として立派に帝国に報じていることになります。何なら、フロイライン・シュミットバウアーが宮廷に上がるための仲介を買って出てもよろしいのですが」
———と。
後宮に入り…そして、寵姫として皇帝陛下に仕える。そのような選択肢も、自身の人生にあり得たことを彼女も熟知していた。一五歳の時に届き、僅かな期間を経て事実上、取り消された宮廷…いや、後宮への招聘。数ヶ月の時間差で、今のグリューネワルト伯爵夫人(グリューネワルト)が帝都の一角で『発見』されていなければ、ゲルタ自身が、フリードリヒ四世の数ある寵姫の一人とされていたことは間違いない。
とは言え、グリューネワルト伯爵夫人さえいなければ、フリードリヒ四世陛下の寵愛を自分一人のものとできたはず…などと単純に信じ込めるほど、ゲルタは単純でもなければ自身の容姿を過大評価もしていなかった。たとえば、クララ・フォン・ヒルデスハイム伯爵令嬢のように。また、後宮へ入りたかったかと訊かれれば、帝国貴族の一員として『然り(ヤー)』と答えざるを得ないが、本音は『否(ナイン)』だった。
クララ・フォン・ヒルデスハイムは、グリューネワルト伯爵夫人を『成り上がり者』と呼び、その排除に血道を上げる…そういった貴婦人のグループに入っているらしかった。その背後に後宮のやんごとない貴婦人の姿があることを匂わせて、ゲルタにも参加を強要し、断れば、継嗣もできない貧乏男爵家の娘と、ことあるごとにゲルタを誹謗中傷する。もっとも、こちらはヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールを巡っての嫉妬らしいのだから、ため息をつかずにはいられない。
「———あ」
不意にゲルタの足が止まった。
慌ててスーツの上着の内ポケットを探る。捜し物がそこにきちんとおさまっているのを確認して、ほっと安堵の息をついた。
昨日、前線の兄から届いた書簡だった。暗号化され、兄ヨハン・クレメンツの署名のついた超光速通信メール(F・T・L)を、出がけに媒体化(マテリアライズ)したものが入っている。リーフェンシュタール伯爵親展指定なので、ゲルタ自身にも中身は読むことはできなかった。
ただ、ヨハン・クレメンツはこう言い添えてきていた。
「ヴィンフリートに関わる内容で、伯爵の助力を得るため、できるだけ早く、直に伯爵にお届けしてほしい」

幸いリーフェンシュタール伯は自邸にいたが、アポが取れたのは午後遅く。軍務省のアポも午後だったから、郊外に近い自宅に戻ってから出直すのでは時間が厳しい。そう思って、親書を内ポケットに仕舞って出てきたのだ。

軍務省で頭に上った血を下げるのに喫茶店に立ち寄ったりしていたから、時刻はそろそろリーフェンシュタール伯爵とのアポの時間に近い。

地上車を拾おうかとも思ったが、歩いていっても半時間とかからない。幼い頃から何度も通った道である。目を閉じて歩いていっても迷うこともない。

思い決めてくるりとつま先を回した時、ゲルタは気配を察した。

中心街からはすでに少し離れていたが、帝都のビジネス街の一角。大帝ルドルフが、新無憂宮（ノイエ・サンスーシー）を見下ろすような建築物を禁止したため、帝都の中心部は、そのほとんどが中層のビルであり、かつ外装も地球の中世時代のそれを模したものが多い。

彼女が足を止めたのは、メインストリートから一本裏に入った、しかし、二車線の車道を挟んで広い歩道とビジネスビルが建ち並ぶ一角だった。平日の午後、ビジネス街の一角に人影と車が絶えていた。

車道側を歩いていたゲルタは、ふわりと身体を宙に浮かせた。一メートル弱の距離を跳び、歩道の建物側に着地する。

路上駐車していた二台の地上車のドアがいきなり開いた時、ゲルタの両目が西に傾き始めた太陽（ヴァルハラ）の光を弾いて金色に煌めいた。

「こんなところで何をしていらっしゃるんですか、男爵」

「そういう貴女こそ、こんなところをふらふらしていると危険ですよ、フロイライン・シュミットバウアー」

フレーゲル男爵は、大貴族の子弟らしく整った容貌を、何かしらねついいびつな感じの笑いに歪ませた。

「どこが危険か、そうでないかくらい分かります。もう、幼稚園児ではないんだし、おしめはとっくに取れていますもの」

「本当に取れているかどうかは、この目で確認したわけではありませんからね。拝見の栄を賜らば、幸いに存じます、フロイライン」

余り上品とは言えない、はっきりと言えば下品に類する冗談に、男爵の左右で笑いが起こった。

笑いの主に目をやったゲルタの表情がはっきりと強ばった。自然に全身から余分の力が抜け、それでいて両脚が瞬発を予期して静かに撓む。

「それで何か御用ですか？」

「渡してもらいたいものがあるのですよ、フロイライン」

優位を確信した表情で、フレーゲル男爵は笑顔のゆがみを深くした。

「渡してもらいたいもの？」

「シュミットバウアー大佐から、リーフェンシュタール伯爵へ宛てた書簡です」

「――――!?」

「素直に渡してくだされば、少々辛い目を見ることになりますよ」

フレーゲルは気取った仕草でパチリと指を鳴らす。一見、ゆったりした歩調で男たちが左右に散る。ほとんど足音もせず、また緩やかに見えて動きに隙がなかった。

靴を脱ぎ捨てて走り出そうとして、ゲルタは諦めて靴に足を入れ直す。兄は正しかった。一人一人はともかく、五人同時は無理。下手に抵抗すれば、殺される。そういうレベルの相手ばかり。

「理由を聞かせていただけます？ どうして、兄からの書簡が必要

なのか？」
「ほう…どうして、書簡が届いたことを知っているとは聞かないのですね」
「聞いても無駄です。男爵がご存じであることは事実ですもの。なぜ、ご存じなのかを訊いても意味はないです」
「相変わらずですね。怖くないんですか？」
「怖い？」
「この連中は、もともとオフレッサー元帥の装甲擲弾兵師団上がりの連中です。前線で少々拙いことをしでかして軍から逐われたのを、フレーゲル男爵家の私兵として飼ってあるのですよ」
「――」
　エメラルド・グリーンの目がきつい光を帯びて、フレーゲル男爵の面上を薙いだ。たおやかと言っていいゲルタの面差しが、そうすると一気に兄のヨハン・クレメンツに似て、金茶の毛皮をまとった猛獣に二重写しになって見える。
「まあ、いいでしょう」
　鼻白んで、フレーゲルは視線を逸らした。
「書簡を渡していただきたい」
「理由を聞かせてくださらなければ、ダメです」
「力尽くで、言うことを訊かされたいのですか」
「力尽くでも、ダメです」
「聞き分けのない」
「訳もなく、人のものを取り上げちゃいけない…男爵のお母様は、そうおっしゃらなかったの？ それとも、お母様の言うことも聞けないような、わがままなお坊ちゃまのまま大きくなられたのですか？」
　唇を歪める男爵に、ゲルタは思いっきり平板な、しかし、よく通る声で浴びせかけた。
　たまりかねたのか、フレーゲル男爵とゲルタを取り囲んで周囲に散らばっていた男たちの一人が笑い出した。
　見る見るフレーゲル男爵の顔がどす黒く変色する。
「こ…この、言わせておけば‼」
「また、暴力ですか。進歩ないですね」
　それがゲルタの作戦だとフレーゲルが気づいたときは遅かった。怒りに任せて一歩近づきすぎていたことに気づいたとき、彼の身体は鮮やかな弧を描いて宙を舞っていた。天地が反転し、背中が思い切り激しく舗道に叩きつけられた。視界に火花が飛び、肺からたたき出された空気は悲鳴となってほとばしり出る。
　彼の右腕を決めたまま、体重のない者のようにゲルタの長身がくるりと一回転する。フレーゲル男爵は視界が半回転するのを感じ、右肩と肘の関節が発した異音を聞いた。顔面が舗道に叩きつけられて、もう一度視界に火花が舞い散った。同時に関節と筋肉をねじ切られそうな激痛が全身を走り抜け、甲高い悲鳴の形をとって咽喉から躍り出た。
「こ…殺せ、この女を殺せ‼」
「理由だけ聞かせてください」
　息も切らさずに、ゲルタは舗道にねじつけた男爵の顔を覗き込んだ。
「そ…その書簡を伯爵に渡してもらっては困るのだ…」
　右腕を決められ、ねじり上げられている激痛で、それだけのフレーズを紡ぎ出すのに、何度も息継ぎをしなければならなかった。
　困ったように、ゲルタの目が丸くなった。
「どうして？」
「だ、か、ら…い、痛い、腕が…腕が折れてしまう…」
「だって、これ、腕を折る技ですから。折れる前に話してもらえれば、手は離します。書簡のことも考えます」

「お…おい。救けろ、わたしを救けろ！この女を引きはがせ」
「その前に首を折ります」
　靴の踵がうなじをぐいと押さえつけ、男爵の悲鳴は絶息寸前の苦鳴に変わった。ゲルタが僅かに力を込めただけで砕ける…格闘術とはまるで縁のないフレーゲルであっても、踵に押しひしがれた頸骨の上げた軋みの意味は余りに明らかだった。
「そんなこと…ただですむ…とでも」
「わたしを殺せ、と命令されたのは男爵です。いずれにしても殺されるんです。その前に男爵に詳しいお話しをしてもらうくらいの権利はあると思いますけれど？」
「わ…わ、わ…かった。話す。話すから、足をどけてくれ」
　フレーゲル男爵の話にゲルタは目を丸くした。
　ヴァンフリート七‐四基地の存在と救援作戦自体は報道されたものの、作戦は成功し、『叛徒どもの版図深くに帝国の橋頭堡を確立した』とのみ説明されていたのだ。
　作戦の無惨な失敗も彼女を驚かせた。それ以上の驚きを誘ったのが、作戦そのものに兄ヨハン・クレメンツと、ヴィンフリートが関与しているらしいこと、さらにグリューネワルト伯爵夫人の弟であるラインハルト・フォン・ミューゼル大佐が敗残部隊を率いて帰還したことだった。
　ヴァンフリート基地のことは報道の範囲のみでしか知らなかった。ヴィンフリートがその基地の司令官として赴任しているなど、思いもよらないことだっただけに、さらにその基地への補給作戦が失敗したと聞かされたゲルタが蒼白になったのは当然のことだった。
「…ミューゼルは…シュミットバウアー大佐のコネでリーフェンシュタール伯爵に口添えを頼み…次回の作戦から外れる気に違いないのだ。最低でもヴィンフリートだけは無傷で救出しなければ、帝国軍の面子は丸つぶれだが、それすら難しいくらいにヴァンフリートのあたりの叛徒どもは数が多いらしいのだ」
「次回の作戦？」
「こうなった以上…その書簡が伯爵にわたっては面白くない。せっかくミューゼルを追いつめるチャンスだというのに、奴に作戦からはずれられては元も子もない」
「どうやって追いつめるのですか？」
「…」
「聞かせてください‼」
　『ぎゃあ』とも『げぇ』ともつかない悲鳴に、二人を取り囲んだ傭兵たちはうんざりしたような視線を見交わした。もともと彼らはこの雇い主に好意は抱いていなかったし、ましてやうら若い細身の女性に一挙動でねじ伏せられるとあっては、基本的に筋肉信仰な彼らを幻滅させるに十分だった。
　フレーゲル男爵が、腕の一本を犠牲にするつもりでゲルタを取り押さえろと命じていれば、彼らにとって彼女を男爵から引きはがし、その場で押さえつけるのも車に押し込むのも大した困難を伴う事業ではなかった。敢えて彼らがそうしなかったのも、フレーゲル男爵への反感と幻滅のしからしむるところだったに違いない。
「痛…痛い…分かった、話す――ヴィンフリートだけ無傷で救出するんでは…まぐれで成功するかも知れない。だから…頼む、少し手を緩めてくれ…だから、基地要員全員を一人残らず救出する命令を出して頂けるよう、伯父上から働きかけてもらっているのだ」
「――なるほど、そうなんですか」
　上着の内ポケットに視線を落とし、それからゲルタはふわりと男爵から離れた。注意深い観察者なら、さっきまで蒼白だった頬に血の色が戻っていることに気づいたに違いない。

フレーゲル男爵は、しばらくは解放されたことにも気づかないかのように、無様な格好で舗道に頬を押しつけたままだった。しぶしぶという言葉をそのまま絵にしたような仕草で、傭兵の一人が男爵の身体を起こし、姿勢を立て直させる。背中の方へねじ上げられた右腕を下ろされた時に激痛が走ったらしい。乱暴な手つきで傭兵の手をはね除けようとして、さらに激痛に呻吟する羽目になった。

その目の前に、封書が差し出される。

唖然として視線を上げた先に、微かな金色の光を帯びたエメラルド・グリーンの眸があった。

「差し上げます」

「な――――」

「暗号化されていますから、貴男に読めるかどうかは知りませんけれど、お話を聞いて、この手紙をリーフェンシュタール伯に届けても仕方がないと分かりましたから。そんな卑怯なことを伯爵に頼むような手紙、兄からのものであっても取り次ぐわけにはいきません」

「後悔することになるかも知れないぞ」

立ち上がりながら、フレーゲルが毒づく。ゲルタは眉をぴくっと跳ね上がらせ、ポケットに手を差し込んだ。

傭兵たちが身構える。

「お顔が汚れています」

ポケットから取り出したハンカチを、ゲルタはフレーゲルに差し出した。さすがにフレーゲルは受け取ろうとしなかったが、傭兵の一人が貴婦人への礼とともに受け取り、それからフレーゲルへ放ってよこした。

思わず受け取ってしまい、フレーゲルは忌々しげに土埃にまみれた顔面を拭った。

フレーゲルが顔を拭い終わるとゲルタは手を差し出したが、彼は一瞬彼女を睨みつけてから頭を振ってそれを自分のポケットに収めた。

「一応、わたしも貴族としての礼は知っているつもりですのでね」

「――――？」

フレーゲルは咳払いし、ひどく居心地悪げにゲルタの視線から眼を逸らした。

「貴女の兄上も、ミューゼルの奴と連(つる)んでいる。ミューゼルの奴を罠にはめると言うことは、シュミットバウアー大佐も一蓮托生と言うことです」

「兄の選択に口を挟むつもりはありません。そんな手紙を書かせるような人に、兄が従うとは思えませんけれど。ご不要なら、このまま持ち帰って破棄してしまいますけれど？」

「――――よこせ‼」

慌てて身を乗り出し、ゲルタの手から封書をひったくる。ひったくった後、大あわてで飛びすさって距離を取ったのが、ゲルタから見ても滑稽だった。本人の主観は別として、彼女がその気なら、ひったくられる瞬間にもう一度、今度こそ首の骨が砕けるくらいに投げ飛ばすのに全く困難を覚えない程度に無駄を極めた身体の動きだったから。

だが、書簡を手にしたフレーゲル男爵は、再び優位を確信したようだった。

「もう一度訊きますが、シュミットバウアー大佐だけを次回の作戦から外すよう、命令を出して頂くこともできるのですよ、貴女が望み、相応の条件を呑んでくれるならね」

「お断りします」

にべもない調子で、ゲルタはフレーゲルの言葉をはねつける。

「そんなやり方で生命が助かっても、兄は恥としか思わないでし

ょうし、わたしも帝都でそうやって女を脅したり、前線の人たちを陥れたりすることしか考えていないような人の愛人になんかなりたくないですから。正妻というならもっとお断りです。別れるときに、愛人なら契約の破棄で済みますけれど、正式の婚姻だといろいろと面倒でしょう？」

再び失笑は傭兵たちからだった。

屈辱にどす黒く顔を染めて車に乗り込む直前、フレーゲルはもう一度、ゲルタをにらみつけた。真っ赤に血走った目に見つめられるのは、さすがに心地よいものではない。困惑して視線を僅かに逸らしたところへ、引きつったような声が届いた。

「わたしだとて軍に籍を置く者。いつも安全な後方に引っ込んでいるような男かどうかは、そのことはいずれ証明してのけますからね。その時は、貴女を安全な帝都でのうのうとしていると嗤ってやる、覚えていることですね‼」

つまらない捨てぜりふだこと…ゲルタの感想は身も蓋もない。今日にしても、前線に出られる身になりたいと希望する彼女を、無碍に門前払いしたのは帝国軍そのものではないか。少なくともフレーゲル男爵は、希望すればいつでも前線で叛徒たちと戦える立場にあるのだから、彼が前線に出たところでゲルタを嘲笑える筋合いではない。

リーフェンシュタール伯爵にはアポのキャンセルと無礼を詫びる連絡をしなくては…すぐ届くとは思えないけれど、兄には奇禍で書簡をなくしてしまったことも知らせなければならないだろう。

フレーゲル男爵が大貴族の特権で交通を封鎖でもしていたのか、さっきまで地上車一台も通らなかった車道が、にわかに混み始めているのに彼女は気づいた。

不意に目の前に大きな影が立ちふさがる。

「フロイライン・シュミットバウアー」

さっきの傭兵の一人か、とちょっと心臓を跳ね上がらせかけてから、ゲルタは安堵の笑顔に変わる。彼女に格闘術を教えてくれた、これも元装甲擲弾兵の退役士官だったのだ。通称、『大佐』。本名が極秘というわけでもなかったが、ゲルタにとっては『大佐』で十分だった。相手が語らぬというのであれば、あえて踏み込む必要がどこにあるだろう。

「ご無事か？」

「ええ、無事ですけれど、何か？」

「ヘル・トーンから連絡をもらってね。貴女が襲われる恐れがあるから、護衛に行ってくれと」

「ハンスから？」

他にどんな事情を予測したとしても、先代から無給で仕えてくれている執事の名はゲルタの予想の範囲外にあった。

「わたしが襲われる？」

「確かに襲われていたからな。あの青二才を真っ先にのしたのは上出来だった。他の連中は、フロイラインのかなう相手じゃなかったからな」

「見てたんですか？」

だったらすぐ助けに入ってくれればよかったのに…これでも身体中冷や汗でびっしょりになっていたのですから――口をとがらせるゲルタに、危なければすぐに助っ人に出たさ、と『大佐』は相手にしなかった。

「そのために人数も動かしたからな」

「え――‼」

言葉に嘘はなかった。

『大佐』の合図で街路や路地、果ては路駐の地上車からサム・アップした右手が掲げられる。その数、約二〇。

ゲルタの眉が曇った。

「『大佐』、『大佐』の部隊動かすのって、すごくお金がかかるんでしょう？」
「金？ 金ならもうもらったさ。でなければ、こんな人数を動かせるわけないだろうが？」

満面に心痛を浮かべて玄関のポーチまで出て来ていたハンス・トーンは全身で安堵を表しながら、『大佐』に送られて帰宅したゲルタを出迎えた。
何度も礼を繰り返すトーンに、『大佐』は苦笑で応じ、護身用だと一振りのナイフをゲルタに委ねた。
ゲルタは首をかしげる。一見プラスティック製のペーパー・ナイフのように軽い。護身用だと言っても、ペーパー・ナイフでは用をなさないだろう。
「ハイ・ポリマー製。磁気やX線に反応しないし、薄くて軽いから質量測定や人手のチェックにもかからない。耐久性は余りないが、二人や三人ののど笛ぐらい平気で掻き切れる。咄嗟の護身用にはもってこいだ」
新無憂宮（ノイエ・サンスーシ）にもこのナイフを持って入ったことがあるが、一度も気付かれたことはない———本当か嘘か分からない言葉を言い置いて、『大佐』は立ち去った。
「それでハンス？」
ゲルタは問う視線を執事に向けた。
「実は連絡がございました」
ハンスの説明は簡単だった。
差し出されたプリントアウトには、『フロイラインの身体に危害が及ぶ恐れが強い。すぐに『大佐』に連絡し、護衛を頼むように。『大佐』は事情を知っている』とあり、今朝、彼女が家を出て三〇分もしない内に届いたという。
「PDA（ケータイ）で知らせてくれればよかったのに」
「はい…それが…」
泡を食って『大佐』に…お嬢様の護身術の先生という表現をハンスは使った…連絡した。すぐに彼女に知らせようと言う彼を止めたのは『大佐』だった。
「知らせると、お嬢様が行動を変えられて、それがかえって危険な事態を呼ぶ、と」
確かにそんな知らせをもらってリーフェンシュタール伯爵を訪ねるコースを変えたりしていれば、『大佐』が彼女を発見するまでの時間もかかる。彼女が何も知らないで予定の行動を取ってくれていた方が、護衛する側としてはやりやすいに違いない。
ハンスを問いつめるのはその程度にして、ゲルタは彼に事情を伝えておくことにした。
「ええ、お嬢様のような方に手を出そうなんてとんでもない連中ですとも、本当に」
五人の傭兵に取り囲まれたと聞いた瞬間、ハンスは今にも息が止まりそうな表情になったが、予め『大佐』が手を回してくれていたと聞かされて大きくうなずいた。
「でも、書簡はお渡しになった…と言うことですか？」
「ええ。だってフレーゲル男爵、とんでもない思い違いをしているの。あの手紙が、男爵が思っているような中身ではないってこと、兄様のことを少しでも知っていたら、すぐわかるはずなのに」
次期作戦から外してくれ、どころか次期の作戦をできるだけ早く始めさせてくれ。それも、ヴィンフリート一人を救い出すのではなく、フレーゲル男爵がミューゼル大佐に押しつけるつもりだった『無理難題』の実行を求める内容だろう。つまり基地の要

員全員をすべて救い出す。それもフレーゲル男爵の言葉を借りれば、ヴィンフリート一人を救い出すのも困難なほどに叛徒どもが数を揃えている、そのただ中から。
つまり、ゲルタを襲って書簡を奪ったところで何も変わらない。むしろ、書簡を読んだフレーゲル男爵自身がこれ幸いとリーフェンシュタール伯爵を焚きつけ、次期の作戦の開始を早めさせるに違いないのだ。
「兄様…ではないわ。兄様がこんな手の込んだことをするはずはないし…」
ここまで考えれば、ゲルタにも今日の騒動の裏側にいる人物が概ね読みとれた。
彼女自身も、仕掛けの巧妙さには感心しつつも、精神（こころ）の本質のところでは『何か、イヤだな』という感覚から免れない。有効だとは分かっていても、魂そのものが反発し、実施に対して心身が動かない。そんな感じがするのだ。
兄が自分と同じで、この程度の筋書きは描けるだろうが、実行しようとしないだろうことをゲルタは確信していた。
であれば――――後は自明だった。
ラインハルト・フォン・ミューゼル大佐。あのグリューネワルト伯爵夫人の弟。それ以外に、今日のこの騒ぎの演出家はあり得ない。
グリューネワルト伯爵夫人が彼女…コルネリア・ゲルトルーデと同い年であり、弟のラインハルトが五歳年下であることは知っていた。
一七歳にして大佐。かつ、数千光年を隔てて、あのフレーゲル男爵をも自らの謀略の糸に絡め取る、野心に満ちた策略家。その姉とはどんな人物なのだろうか。クララ・フォン・ヒルデスハイムが口を極めて罵るように、二人で宮中を牛耳ろうとする、あざといい野望にあふれた姉弟なのだろうか。ラインハルトへというよりも、その姉であるグリューネワルト伯爵夫人に対する積極的な興味がゲルタの胸裡に芽生えたのは、この時がはじめだった。
「違う――――」
まず、兄がそんな人物を支持して、ささやかとはいえ、言ってみれば妹まで巻き込んだ謀略に加担するはずはない。
加えて――――
「堂々としている」
それが理由だった。
ラインハルト・フォン・ミューゼルが単なる野心家なら、フレーゲル男爵の推測通りに、十中十は死地とも言うべき危険な作戦からは逃れようとするだろう。だが、おそらく間違いなく、ミューゼル大佐は本気で基地要員全員を一人残らず救おうとし、まかり間違って宮廷がヴィンフリート一人だけを救い出せなどと命じないように手を打っているのだ。
『大佐』に護衛のお金を出したのもミューゼル大佐だろうし、ひょっとしたらフレーゲル男爵に嘘の密告をして彼女を襲わせるようにし向けたのもミューゼル大佐かも知れない。『大佐』がもう少し早く出てきてくれれば、フレーゲル男爵に兄の書簡を渡さずに済んだはずだが、それすら予め計算されたタイミングだったのかも知れない。
推測に過ぎなかったが、それがほぼ正鵠を射抜いているだろうことを、ゲルタは僅かも疑わなかった。
だが――――ふと兆したのは胸の底が凍り付くような不安だった。
不安は、ヴィンフリートがヴァンフリートなる叛徒たちの星系から脱出できずに戦死するのではないか…というものではなかった。ゲルタは、ヴィンフリートが無事にヴァンフリートから帰還してくるだろうことに万分の一の疑いも抱いてはいなかった。

不安は、その後のことに属した。不安は、このラインハルト・フォン・ミューゼル大佐に発していた。
兄ヨハン・クレメンツは、帝室の存続を第一と考え、すべての価値観の基準をそこに置いている。
けれども、ヴィンフリートは、帝国のあり方に完璧の満足を抱いていない。ゲルタと二人切りになった時にだけ、弾みのように漏らしたのがフリードリヒ四世への不満であり、門閥貴族中心の帝国政府の有り様だったから。
そこに、このミューゼル大佐という存在が新たに加わったとしたら…
それがどのような事態に繋ると予想すべきなのか、さすがにゲルタにも想像しかねた。しかし、ラインハルト・フォン・ミューゼルなる若者が階梯を登り詰めていくとき、兄とヴィンフリートとの間に何かしら決定的な出来事が生じるに違いない…それが、この時のコルネリア・ゲルトルーデの直感だった。直感が直感というだけに終わらず、極く近い未来の一端を垣間見せたものだと、論理によらずして察したこと、そのことが不安の源に他ならなかった。

フレーゲル男爵から黄色の薔薇の花束と共に高価なシルクのハンカチーフ・セットが届けられたのは、その翌日のことである。
お嬢様に暴力を振るうような男に礼状など必要ありません…と憤りを露わにするハンスをなだめて、ゲルタは返事を認(したた)めた。
一言、『武勲を』。
花束から黄色の薔薇を一本、わざと萎れさせて添えた。

☆☆☆

執務デスクの上に置かれた書簡と、帝都からそれをもたらした使者の間に、ゼークト大将は不機嫌極まりない視線を往復させた。書簡は特殊な包装を施され、宛先に指定された個人にしか開封できない。開封すれば、半時間もしないうちに書類そのものが崩壊して粉末状に変わって判読も再生も不可能になる。
本来、帝都からイゼルローン要塞駐留艦隊司令官に宛てられるような公式文書に使われるものではない。書簡を取り交わした当事者の間が、互いの胸の裡にすべてを呑み込んで一切の証拠を残さないのを目的とする、言ってみれば『後ろ暗い』目的にのみ使われる文書とさえ言える。
「これが…帝都からの命令書だと言うのかね、男爵」
ゼークトの言葉は、自らの不機嫌と相手への配慮の際どい平衡の上で辛うじて平穏を保っていた。
「そうです。少なくとも、わたしがこうしてわざわざイゼルローンまで参ったと言うこと自体、この書簡が十分に重要なものであるとお分かりになるはずだと思いますが」
もう一度、ゼークトは書簡と使者の間に視線を往復させ、それから書簡を手に取った。個人認証を入れて開封し、さして長くない文書に素早く目を走らせる。まず眉間に縦皺が寄り、怒りよりも困惑が面上を覆った。
「説明を聞いても良いのかな、男爵？」
ブラウンシュバイク公爵家とリーフェンシュタール伯爵家の連名で記された文書は、ゼークトへの依頼事項として、『ミューゼル大佐をしてヴァンフリート宙域に赴かせしめ、リーフェンシュタール准将を救出せしめよ…』としている。ラインハルト自身からの示唆もあって、実施を計画している作戦である。ゼークトにしてみれば、わざわざ門閥貴族の代表者たるブラウンシュバイク公爵や、その有力な連枝であるリーフェンシュタール伯爵家が秘

密文書を認めてまで依頼してくるような中身には思えなかった。
「もう一度、お読みいただけますか？」
　使者――――フレーゲル男爵は冷ややかな調子で応じ、ゼークトはもう一度、書簡に目を落とした。そのこめかみが震え、眉の端がわずかに跳ね上がるのに、フレーゲルは唇を歪めるように薄く嗤った。
「リーフェンシュタール准将の救出…そして、卿を作戦立案に加えよ…そういうことか」
「実施部隊には無論、リーフェンシュタール准将一人ではなく、何とやら言う辺境の基地将兵全員を脱出させるつもりで行動してもらいますが、帝都のあたりでは五〇〇〇人やそこらの平民を救うために、わざわざ艦隊を動かすことを、必ずしも快くは思っておりません。勿論、公式の命令ではそうは言いませんが」
「公式の命令が出る…と言うことか」
「出ます」
　歪んだような嗤いを、フレーゲルは一層深くした。不快そうにゼークトが眉を顰め、視線を逸らしたが、フレーゲル男爵の意に介するところではなかった。
「公式命令としては、基地を撤収し、基地の要員を帰還せしめよ…との内容が発令されます。間もなく、閣下のお手元にも届くでしょう――――ですが、お分かりと思いますが、閣下。帝都のあたりでは、別に基地将兵すべての救出など望んではいないし、前線の一介の巡航艦艦長風情が巨大な功を立てて英雄となる有様なども見たくはない。要するに、リーフェンシュタール准将一人を救い出せれば十分と言うことです」
「…」
「作戦が順調に進まぬようなら、ミュッケンベルガー元帥自らがイゼルローンに赴かれ、全般の指揮を執るとまで言っておられるようですが…」
「ミュッケンベルガー元帥が…？ たかが、ヴァンフリート七‐四基地の救援作戦ごときの全般指揮を？」
「そのたかがの基地一つ、きちんと処置できずに宇宙艦隊司令長官直々のお出ましまで見るようなことになれば、帝国最重要の拠点の守りを預かる身としてはいかがなものでありましょうかね、大将閣下」
「要は、ミューゼル大佐に指揮させた作戦を半ば失敗させ、責任を取らせたい、ということなのだな、卿の言いたいのは？」
　ゼークトのこめかみに太い怒筋が浮かび上がり、痙攣するようにぴくぴくと蠢くのを、フレーゲルは心地よげに見下ろした。大貴族の子弟に共通の通弊として、相手が抵抗できない権威を背景に、弱者をいたぶる機会が得られた場合に自制の箍（たが）が極度に緩む傾向がある。フレーゲル男爵もその例に漏れなかったが、この時には辛うじて節度を取り戻している。今回、彼が陥れるべき相手はラインハルト・フォン・ミューゼルである。度が過ぎて、ゼークトに無用の怒りを抱かれてしまっては、それすらかなわなくなってしまう。それでは、わざわざイゼルローンなどというはるかな辺境の地へ赴いてきた甲斐がないと言うものではないか。
　リーフェンシュタール准将一人を辛うじて救出したと言うのでは、叛徒どもに『帝国軍は敗走した』と宣伝する絶好の機会を与えるようなものである。基地の確保に失敗したのは、前回の作戦部隊の失態であり、よろしく作戦部隊の生き残りをして将兵全員の撤収を実現せしめるべし――――現に作戦部隊からも、その旨の希望が連絡されてきている。是非にも陛下より、ゼークト大将へご内意をお示しいただきたい。
　ゲルタから奪い取った…実際には手渡された…シュミットバ

ウアー大佐からの書簡を証拠に、『ミューゼルを窮地に追い込む』ための作戦実施上申に自ら新無憂宮に伺候したフレーゲル男爵だった。

ブラウンシュバイク公爵からの口添えのおかげで、謁見室の前で延々と待たされる不愉快さからは免れた男爵だった。が、大儀そうに玉座にもたれかかっているフリードリヒ四世に向かって熱弁を振るうのもはなかなかに骨の折れる作業には違いなかったのである。普通なら、誰か他の人間に上申を任せたに違いない。陰謀の相手があのラインハルト・フォン・ミューゼルでなければ。また、そのための材料を入手するのに、ゲルタにはまたしても投げ飛ばされる屈辱まで味わわされたのだ。何としてでも、ミューゼルに、そしてゲルタにも彼に逆らったことを一生の悔恨として後悔させてやらねば、どうにも気分が晴れないというものではないか。

特に――――

「立派な階級章をお付けですけれど、帝都で女を苛めて喜んでいるなんて、階級章が泣いていません？」

そう言って、淡く金色に煌めく翠玉の瞳を真っ直ぐに向けてくる生真面目なゲルタの面差しが、じりじりとした痛みを伴って男爵の胸の裡に灼き付いていた。

「余の内意を告げに、そちがゆくか？」

「陛下のご命令とあれば、臣は宇宙のいずこへなりと、喜んで赴く所存にございます」

フリードリヒ四世にそう問われ、反射的に跪礼をもって応諾した時、彼はまさにゲルタに向かって反論していたのだ。『わたしだとて軍人です。前線に出るのが恐いのだ、などとは言わせませんよ』――――と。

「よし、ゆくがよい、フレーゲル男爵」

さして感銘を受けた風でもなく、フリードリヒ四世は淡々と頷いた。

もう一度深々と拝礼し、謁見室を立ち去るフレーゲル男爵の背を、おそよ個性的でもなければ帝王らしい力強さとも無縁な言葉が追いかけた。

「武勲を期待しておるぞ」

「――――無論、失敗したとしてもそれは前線指揮官の無能の所以に過ぎません。帝都ではリーフェンシュタール准将一人救い出せればよしとしているのです。将兵全員を救い出そうなどとあがいたのは、現場の暴走。閣下に対してはいささかの咎めもありませんし、それどころか、リーフェンシュタール伯爵はもとより、我が伯父上のブラウンシュバイク公も、連枝の一人を死地より救い出した閣下の動きを大いに徳としようと仰せです」

「ブラウンシュバイク公がか…？」

ゼークトの表情にあからさまな打算が動くのを確認し、フレーゲルはほくそ笑む――――わがこと成れり。

一方、ゼークトもフレーゲル男爵の表情を読んだらしく、にわかに表情を引き締めた。

「だが、それは卿の口約束というに過ぎぬな」

「いえ、そんなことはありません」

巨大な執務デスクの上に放り出された、こちらはごく普通の書類にゼークトは視線を吸い寄せられた。ブラウンシュバイク公爵家の紋章が刻印されたその書類には、多少の曖昧さを帯びてはいるものの、依頼事項が成就された際にはゼークト大将に厚く報いるであろうとの内容が記され、ブラウンシュバイク公爵自身とフレーゲル男爵の自筆署名が入れられていた。

「この書類を閣下にお預けしましょう。これで信じていただけま

すか？」
「預かって…よいのか？」
　なお、僅かな疑問を残した視線に、フレーゲルは軽く舌打ちする。いくら伯父だとは言え、このような念書に軽々しく署名するほど、ブラウンシュバイク公はフレーゲルに甘くはない。と言って、偽物ではない。自分でも呆れるほどの熱心さで自ら伯父を説き伏せて署名をもらったのだ。
　万一の時にも言い逃れのできるよう、書面はアンスバッハと諮れ———それが条件だった。
　いざ、文面を作るとなると、アンスバッハという男は呆れるほどに犀利で執拗だった。わずか一枚の書面を作るのに、フレーゲル男爵は丸二日、ほとんど一睡もせずにアンスバッハの添削に応じなければならなかった。普段の彼なら、半日と保たずに放り出してしまうような作業だったが…
「宜しうございます、閣下。絶対に安全な場所に保管をお願いします。このような文書をお出しすることの意味は…お分かりでしょうが」
「う…うむ」
———まだ何か不満があるのか、この男は‼
　遂に切れて怒鳴り出したい衝動を、フレーゲルはなけなしの自制心を掻き集めて辛うじて押さえつけている。しかし、あと十数秒もゼークトが逡巡するようなら、そうして渾身の努力で抑え込んだ怒声が、唇をついて迸り出るのは間違いなかった。
「なぜ、卿はミューゼルにこだわるのだ、そんなに？」
「奴が危険だからです」
　弾き返すようにフレーゲルは応じた。
「奴をこのままのさばらせておけば、いずれ近いうちに帝国に大きな仇となりましょう。陰謀と言われようと、何と言われようと、今の内にあの生意気な孺子を永遠に排除せねば、帝国は大変な危機を迎えることになりかねません‼」
　剣幕に押された…わけではなかっただろう。ゼークトとて一万数千隻の要塞駐留艦隊の指揮を執る男である。フレーゲルのような、自尊心のみを病的に肥え太らせただけの門閥貴族の子弟とは、胆力で比較になるものではない。たとえ、フレーゲルが一〇〇人集まって吠え立てても、ゼークトの顔色一つ変えさせ得るものではないのだ。
　ゼークトがフレーゲルの言葉をとりあえずでも受け入れたのは、フレーゲルの背後に立つ者を見たからに過ぎない。帝国最大の門閥貴族であるブラウンシュバイク公は無論、やはり大貴族の一員たるリーフェンシュタール伯爵の歓心は、軍事官僚たるゼークトにとって魅力あふれる買い物に間違いなかった。とすれば、虎の威を借るセールスマンの一人や二人の要求程度、受け入れるに何の抵抗もありはしなかった。
「———実は、ここにミューゼル大佐から提出された作戦計画書がある」
　そうは言っても、大貴族のどら息子に凄まれた程度で、その言いなりになったなどと噂が立ったのでは、ゼークト自身が鼎の軽重を問われる羽目にもなりかねない。お灸とは言わぬまでも、釘は刺しておく必要がある。
「ミューゼル大佐が直接指揮下に希望している艦艇数は五〇隻にも満たないが、その一方で一〇〇〇隻規模の高速艦による陽動機動を希望してきている」
「———お受けになる…つもりですか、あの孺子の作戦ごときを？」
「五〇隻で死地に赴く指揮官に、この程度の支援もできぬとは言えまい？ 卿も軍人の端くれであってみれば、その程度の理屈は理

解できると思うが？」
　正面から悪臭でも吹き付けられたような不快感に顔をしかめるフレーゲルをよそに、ゼークトは何気ない口調で続けた。
「この陽動部隊に、督戦官として卿を推したいが、いかがかな？」
「督戦官？」
「さよう…」
　僅かな兵力を率いて叛徒どもの領域深く分け入ろうとするラインハルトへの、前線士官の同情と共感は深い。まかり間違えば、陽動部隊の指揮官がラインハルトの部隊への直接支援に暴走する…という懸念も皆無とは言えなかった。
「その程度の動きすら抑えられぬとあれば、ゼークト閣下に対する上層司令部の不信を買うのではありませんか」
　フレーゲルの論理を、ゼークトは鼻先で笑い飛ばす。どこまでも虎の威を借るしか能のないバカ息子が、思い上がるのも大概にするがいい。
「だからこそ、卿のような大貴族の重鎮出身者に押さえとなって頂きたい。無論、手に余る、力不足だと申されるなら、わたしもその旨をすなおに復命するだけのことだが。ヴァンフリート星系にダッチダウンし、いかにも大兵力が到着したかのように大騒ぎをして、さっさと帰ってくればいい。子供のお使い（ミルク・ラン）程度の任務だ。ただ、卿には艦隊が陛下のご内意に沿った行動をとるよう、くれぐれも念入りに督戦を願いたい」
　フレーゲル男爵の顔色が赤くなり、そして青くなるのを、ゼークトは小気味よげな薄笑いと共に眺めていた。臆病者揃いのどら息子にしては、イゼルローンまで来ただけでも褒めてやる価値はあるが、さて、それ以上の勇気のかけらでもそのポケットに用意してきているものかどうか。
　ゼークトを驚かせたのは、ややあってフレーゲルが応諾したことだった。
「せっかくのゼークト閣下のお申し入れ、これを受けねば伯父上のお名前にも傷がつく、というものでしょうからね。喜んで参加させて頂きますよ。無論、その督戦部隊ではわたしの命令が最優先される、という条件のもとにですが」
　一度も戦場に出たこともない癖に、何を言うのか――腹の内でゼークトは苦虫を百匹ばかりまとめてかみ潰した。だが、この典型的な大貴族のどら息子が応じるなどと予想していなかったとは言え、出戦を求めたのはゼークト自身である。ブラウンシュバイク公につながる人物を無用の危険にさらしたと非難されては、彼自身の軍事官僚としての将来にも差し障りが出ようと言うものだった。
「よろしかろう。卿の指示を優先させる旨を、指揮官には徹底しておく。ただし、指揮官が戦理に反する、あるいは卿の指示が卿の危険につながると判断した場合は、必ずしも卿の指示が完璧に守られることはないと了解されよ」
「危険があると？」
「叛徒どもの勢力圏深くに踏み込むのだ。陽動部隊といえども、危険を皆無にはできぬ。無論、艦艇と将兵の保全を最優先させるべく、命じてはおくが」
　さあ、どうする――危険がある、と言われた瞬間に顔色を変えたフレーゲルに、さらに意地悪く、ゼークトはほくそ笑む。戦場は子供の遊び場ではないのだ。分かったなら、さっさと尻尾を巻いて帝都へでも逃げ帰ることだ。
　が、ゼークトの期待は再び裏切られた。
　顔色を僅かに青ざめさせながらも、フレーゲルが同意を与えたのだ。
「――戦場での危険は当然のことでしょう。ゼークト閣下、あ

なたの作戦が完璧であることを期待しますよ」
どら息子のくせになかなか腹は据わっているらしい…ゼークトの心理の中で、帝国最大の門閥貴族への有力なつてとしてのフレーゲルの存在が、彼への悪意を上回った。
「努力しよう」

ヴァンフリート再戦

ラインハルトがゼークト大将に呼び出され、ヴァンフリート七‐四基地救援のための再出撃を認める旨を伝えられたのは一〇月一一日のことだった。
「皇帝陛下より、卿の武運を期待する旨、仰せ下された」
自身が皇帝その人であるかのように荘重な言い回しの、その実、何らの実質をも伴わぬ命令書を読み上げた後、ゼークトはラインハルトにとっても意外極まる申し出を口にした。
「戦艦を…でありますか？」
「そうだ。丁度、回航されてきたばかりの戦艦がある。卿が希望するなら、貸与しよう。巡航艦では複数艦の指揮には何かと不便だろうからな」
「お申し入れには感謝致しますが、ご辞退致したくあります」
応えながら、ラインハルトは眉を顰めて、ゼークトの表情を注視した。戦艦を貸してくれるというのは最大限の好意とも言える。巡航艦に較べれば、火力・防御力は無論のこと、戦闘指揮に不可欠な通信・情報処理の能力においても格段に優っているのだ。その分、巡航艦よりもはるかに高価であり、数も少ない。戦場に出る以上、無傷で還ってくるわけもなく、最悪戦没する可能性も認めた上でなければ、一七歳の大佐ごときにそうそう簡単に『貸与』してよいというものではない。
ラインハルトの成功を見越して恩を売っておこうというのか、それとも皇帝直々の命令に対して最大限度の好意を示した証拠を残しておこうというわけか…そう思ったが、ラインハルトの神経にひっかかったのは、ゼークトの表情だった。もし、そうなら、

もっと恩着せがましい傲岸な顔をしているだろう、この要塞駐留艦隊司令官の面上に見いだしたものは、この人物がラインハルトに対して抱くにしてはもっともあり得そうにない感情だった。
「そうか、戦艦は要らぬか」
「は、閣下のご厚意には感謝の言葉もございませんが、ここは自らの手に慣れた艦を使いたくあります」
心にもない表現を並べ立てながら、ラインハルトは命令書を受領する。命令書は、彼を救援作戦の先任指揮官に任命し、それに伴う権限と責任を与えるものだった。
この命令書の方が、旗艦として戦艦を得るよりも、この時のラインハルトにとっては重要だった。それは、ラインハルトを複数の艦艇の指揮官として認める最初の公文書だった。一五歳の初陣以来、最優秀の戦闘指揮官であることを証明し続けたラインハルトに、帝国軍は戦術レベルでの指揮官たるを認めたのである。言い換えれば一介の艦長としてではなく、複数艦の指揮官として戦場で立つ資格であり、戦場での成功は将官への道を拓くことを意味するのだから。
准将ともなれば、つい数ヶ月前までのラインハルトの上官だったグロルマンと同様、二〇〇隻前後の艦艇と数万の将兵を指揮することが可能になる。もっとも、ラインハルトにしてみれば、その程度の兵力を指揮できたからと言って有頂天になるつもりなどさらさらないが。巡航艦一隻と二〇〇名に満たない部下だけが頼りの、現在の身分よりもはるかに権能が広くなり、それだけより巨大な武勲も立てやすくなることだけは認めるにしても。
作戦発起となれば、さしあたりラインハルトにはやるべきことが山のようにある。ゼークトの奇妙な表情の分析は後回しにすることにして、早々に退出すべき局面だった。
旗艦としての戦艦を貸与しようと言うゼークトの申し入れを謝絶したラインハルトの心理を、キルヒアイスは手に取るように察することができた。戦艦の最大の特性である火力と防御力は、今回の任務には必ずしも必要とされない。少なくとも、ラインハルトが企図している作戦行動では、何よりも高い機動力と敵に発見されない隠密性がものを言う。現にステルス性の向上と対電磁バーストおよび荷電粒子流防禦の強化を目的に、『ノルデンⅦ』を初めとする参加艦艇がドック入りしている。さらに、機動力と短時間の加速力増強工事の折衝に、ラインハルトは自ら工廠に赴いているほどなのだ。
それに、『ノルデンⅦ』に着任してすでに三ヶ月余り。当初、若すぎる大佐艦長に忌避を露わにしていた搭乗員たちも、今ではラインハルトの的確にして果敢な指揮ぶりに心服している…一説には、二度と同僚の前でフォーク・ダンスを踊らされたくないからだ、とも言われているが…。副長のロイシュナー中佐も操艦の名手であり、特に今回は艦長としてよりも指揮官としての職務に集中しなければならないラインハルトにとって、乗艦を変えるのは弊害のみ大きい。
だが、ラインハルトの為人を熟知するキルヒアイスにとって、この金髪の若者が敢えて『ノルデンⅦ』に留まり続ける理由はそれだけとは思われなかった。今でこそ一介の大佐でしかないラインハルトだが、彼のスケジュールでは准将の地位を得て、将旗を戦艦に掲げるようになるのは、今から一年以内に予定されている通過点的なイベントでしかない。
「何も今、借りてまで作戦計画の基本に合わない戦艦に乗る必要などかけらもない」
それがラインハルトの本音に違いなかった。
さらに、もう一つはゼークトが貸与を申し出た戦艦がラインハ

ルトの美意識に合わなかったのではないか…キルヒアイスは密かにそう思ってもいる。無論、ゼークトにしてもわざわざ旧式艦を押しつけようとするほど、軍人としての適性を欠いてもいなかった。また、彼ら高級軍人のラインハルトへの敵意が、軍人としての判断力を凌駕するレベルに達し始めるのは、ラインハルトが将官の地位を得て以降のことである。

帝都からイゼルローンへ回航されてきたばかりの戦艦『タンホイザー』は、制式艦隊旗艦として申し分のない規模と性能を併せ持った艦だった。

ただ、何か違う――――

キルヒアイスの正直な感想がそれだった。類い希な容姿と、他に比肩する者のない軍事的な天才を併せ持つ黄金の髪の若者が旌旗を掲げるべき艦として、最新鋭の『タンホイザー』といえどもあまりに無骨すぎる。名騎手が、彼にふさわしい名馬を持つべきであるのと同様に、ラインハルトにはラインハルトが座乗すべき最高の艦が用意されるべきである。それは、少なくとも『タンホイザー』ではない。何の根拠もない思いこみに過ぎないことをキルヒアイスは十分に察していたが、同時にラインハルトもまた同じ思いであろうことに確信に近いものを抱いていた。

周知のように、その覇業においてラインハルトが終始、旗艦たるを変えなかった『ブリュンヒルト』を得るのは、彼が大将の称号を帯びる帝国暦四八六年。この二年後のことである。

奇遇と言うべきだろう。ラインハルトが『ブリュンヒルト』に巡り会うまで、准将から中将を通過地点として駆け抜けていくまでの短い期間、彼に旗艦として与えられたのが戦艦『タンホイザー』にほかならない。新たな任務と、搭乗すべき旗艦を指定した命令書を目にしたとき、キルヒアイスを捉えたのは不合理極まる錯覚だった。まるで、拒まれたことを不本意とした『タンホイザー』が、自ら望んでラインハルトのもとへ現れたかのような。

いずれにしろ、それはまだ彼らの、不確定な未来でのできごとでしかない。

今、現在を生き抜けなければ、いかなる未来をも手に入れることはできないことを、ラインハルトはもとよりキルヒアイスもすでに熟知するところだった。そして、ただ生き抜くだけでは不十分であることも。彼らにとって、現在こそがあまりに巨大で、そして不合理であった。現在に挑み、撃ち倒さぬ限り、彼らにとっての望ましい未来はあり得ない。

それがラインハルトの想いに違いなく、キルヒアイスが間然することなく共有するところだったのである。

「後ろめたい…ですか？」

「ああ…」

戦艦『タンホイザー』の貸与を申し出た時のゼークト大将の表情を分析する余裕ができたのは、その日も遅くなってからだった。

「何か隠している顔だった。ただ、隠していることを俺に知られると自分にとっても不利になるから、何とかごまかそうとしている…そんな感じだ」

「…つまり、喧嘩して帰ってきたことをアンネローゼさまに気付かれまいとして噴水に飛び込んだ後のラインハルト様ということですか？」

「変な喩え方をするな」

ラインハルトは不機嫌そうに唇を尖らせたが、それ以上の反論はしないのはキルヒアイスの喩えが的を射ていることを認めた

からだろう。
　冗談はそこそこに、キルヒアイスは頭を巡らせ始める。
　ラインハルトの観察が正確で、その分析が真実に至る道を辿っているとするならば、単純に得られる回答はこうだった。その一、ゼークト大将はラインハルトにとって不利な企みをしている。その二、その企みはゼークト個人にとってはメリットがあるものの、公になると彼の公私両面の立場に対してデメリットをもたらすことになる。その三、ゆえに企みは今次の作戦をなんらかの形で失敗させ、ラインハルトが責任を問われる立場に追い込む結果を招くよう、ゼークト大将が自身の権限において何らかの行動を起こす形で実施される。その成功報酬として、ゼークトは個人への報償を得る。
「やはり陽動部隊…か？」
　キルヒアイスの分析に、ラインハルトは異議の余地を認めなかった。
「ええ」
「陽動部隊を出さない…わけには行かないな。それでは見え見えだ」
「出すには出すが、ヴァンフリート星系まで行かない内に撤収させるというのは？」
「それも却下だな。叛乱軍の艦隊と遭遇したというんなら別だが、作戦宙域まで行かずに撤退したのでは敵前逃亡だ。指揮官が従うとは思えない」
「では、陽動部隊はヴァンフリート星系までは来ますね」
　陽動部隊には第四惑星宙域（ヴァンフリート四）にタッチダウンし、帝国軍艦隊侵攻を偽装する。ラインハルトの上申した作戦はそうだったが、実のところラインハルトは陽動の効果を重視していない。理由は、効果が敵次第であり、しかも予測不可能だという点だった。敵が簡単に陽動に乗ればよし、乗らなければ、陽動の効果に依存した作戦は瞬時に破綻する。しかも、一旦戦場に出てしまえば、敵が乗ったか乗らなかったかをリアルタイムに知るのはほとんど絶望的だ。
　ラインハルトが敢えて陽動作戦を上申したのは、彼がそうしなかったとしてもゼークトなり、他の指揮官が言い出すに決まっていたからだった。自ら戦場に出ない連中が好き勝手な作戦を立てた挙げ句に、戦場での責任を押しつけられるくらいなら、先手を打って作戦を上申し、ただし、自らの責任範囲からは明確に切り離しておくにしくはない。
「誰が指揮を執るかはわかっているな？」
「ええ…そう言えば、噂ですが、督戦官というのをご存じですか」
「督戦官？」
　ラインハルトの、描いたように形のいい眉が、はっきりとした不快感を示して鋭く吊り上がった。
「知っているが…それがどうした？」
「陽動部隊のことかも知れません。督戦官が付く、という噂があります」
　キルヒアイスにその噂をもたらしたのは『ノルデンⅦ』の機関員の一人である。ラインハルトが『ノルデンⅦ』に着任直後、キルヒアイスの前でラインハルトを侮辱する言葉を吐いた挙げ句に、この赤毛の少年が条件次第でどれほど好戦的になり得るか、身を以て思い知らされた一人である。
　おかしなもので、そうやってキルヒアイスに叩きのめされた面々のほとんどが、熱烈なまでのラインハルトとキルヒアイスの崇拝者に変わっている。下士官や兵たちの間で飛び交う噂の中で、ラインハルトへの不利益をわずかでも意味するものは、彼らの耳に入った数十分後にはキルヒアイスのメールボックスに届いているという状況だった。

「できのいい上官は大事にしなきゃなりませんからね」
噂を告げた件の下士官は、そう言ってにやにやしたものだった。
「なんせ、上官のできの善し悪し一つで、俺たちが生きて還れるか、逝ったきりになるか決まるんですからね」
「ミューゼル大佐はできのいい上官ですか？」
「近来希な…ってところです。だから、要らんことで、ミューゼル大佐が偉いさんたちに足元をすくわれちゃかなわねぇ…じゃなくて、かないません」
「ありがとう。他にも情報があれば、報せてください」
合点承知…とは言わなかったが、軍隊ずれした敬礼に精一杯の敬意が籠もっていると、キルヒアイスには思えた。

「督戦官か」
歯をキリ、と鳴らしてラインハルトが小さく唸った。
「送り込んでくるつもりかな？」
『ノルデンⅦ』へ、というフレーズをラインハルトは省略した。
同盟軍の第五次イゼルローン要塞総攻撃の時、ラインハルトたちはクルムバッハという憲兵少佐を艦橋に迎え入れる羽目になった。結果的にはラインハルトが戦果を上げる上での邪魔にはならなかったが、今回の指揮の困難さはあの時とは比較にならない。
『督戦官』を名乗る分からず屋に一々口出しされたのでは、ヴァンフリート星系での指揮など執れたものではない。
「可能性はありますが…」
一瞬の沈黙を挟んでから、キルヒアイスは言い切った。仮に誰かが来るとしても、それは小者でしょう。
「戦場に出れば、先任指揮官であるラインハルト様が絶対の権限をお持ちであることは、皇帝陛下の名において明記されています」
命令書を収めた記憶カートリッジを、キルヒアイスは軽く指先で叩いた。
「命令遂行を阻害する存在を排除する権限はラインハルト様のものですから」
「しかし、なぜ来るのが小者だと思うんだ？」
「ラインハルト様と同じ理由です」
キルヒアイスは微笑む。ラインハルトの表情が既に彼と同じ結論に達していることを語っていたのだ。
半瞬後、ラインハルトの表情が苦笑に溶けた。
「俺たちを失敗させたら、死ぬからな」
「ええ。彼らにとって死んでも惜しくない程度の人物しか、送り込んでは来ないでしょうから」
「――もう一つ可能性があるとすれば、陽動部隊か」
「そうですね。でも、それはもう私たちには関係がありません。彼らがどう動こうとも、我々は我々の作戦を進めるだけですから」
「それはそうだ…ただ――」
軽く唇を噛み、ラインハルトはちょっと悪戯っぽい表情になる。上級生に悪さを仕掛けようとしている幼年学校生徒の頃と、見た目だけはあまり変わっていない…そう思うのは、キルヒアイスだけかも知れなかったが。
「どんな奴が督戦官なのか分かれば、手の打ちようが違ってくる」
「少し、調べておきましょうか。ダメもとで」
悪童の表情を消し、ラインハルトは頷いた。
「ああ、頼む」

☆☆☆

キルヒアイスが督戦官の調査に乗り出すまでもなかった。
ラインハルトがフレーゲル男爵と遭遇したのは、その翌日の

ことだったからである。
『海の霧（ゼーネーベル）』と名付けられたヴァンフリート七‐四基地救援作戦に対して、ラインハルトは巡航艦部隊からの参加志願を求めた。その結果、前回の作戦から生還したシュミットバウアー大佐とジンツァー大佐に加え、バルトハウザー大佐の『グライフェスヴァルトⅥ』、オイゲン大佐が指揮する『ハイテルバッハⅡ』、さらに『シュトラスンクⅣ』がマルクグラーフ大佐の指揮の下、作戦参加を決めていた。参加兵力は、重巡航艦六隻を中心に、軽巡航艦、駆逐艦、高速輸送艦合わせて約二〇隻余り。
ラインハルトの構想では、この約二〇隻の中で実際にヴァンフリート星系へ突入するのは重巡航艦六隻の他は駆逐艦三隻と輸送艦二隻の僅か一一隻。特に輸送艦については、大量の大型船外作業機…人間の操縦する大型の人型作業機…と、可搬型のマス・ドライバの搭載が進められていた。
ラインハルトの意図を理解しかねたらしいゼークトからは一度ならず、使用目的の説明を要求されたが、その都度、ラインハルトは拒絶した。
「使用目的を明らかにすれば、作戦目的の過半を察し得る情報を明らかにすることになります。司令官閣下を疑うわけではありませんが、万が一にも情報が漏れ、我が軍が不利に陥るような事態に立ち至った場合に、閣下のお立場を悪くするようなことはできるだけ避けたいと考えます」
見え透いた論法に違いなかったが、ラインハルトにそう言いきられるとゼークトもそれ以上のごり押しを避けざるを得なくなった。
ラインハルトが向かっている『艦長演習室』には、シュミットバウアー大佐を初めとして、作戦に参加する各艦の艦長が参集しているはずだった。ラインハルトがフレーゲル男爵と真正面から出くわしたのは、まさに『艦長演習室』へ向かう通路の途上だった。
角を曲がってきた人物の目鼻がそれと分かる距離にまで近づいた瞬間、ラインハルトは腐臭を伴った不快感が自らを包むのを感じた。嫌悪を隠すべきいかなる理由も思いつかなかったから、内心をそのままストレートに表情に反映させる。すなわち、露骨なまでの忌避の表情で相手を至近に迎え入れることにしたのだ。
フレーゲル男爵もラインハルトを嫌っていたし、ラインハルトが自分を嫌っていることを知っていたから、その両眼がちろちろと揺れる瞋恚の焔を灯しているのも当然だった。
「これは、忠勇無双の若き帝国軍の英雄でいらっしゃったか。健勝そうでなによりだ」
「珍しいところで会うものですね、男爵閣下。まさかイゼルローンでお会いするとは思いませんでした。男爵にイゼルローンは似合うとはとうてい思えませんから」
「ほう、では、卿は私がいずこなら似合うというのだ？」
「帝都にいらっしゃれば、男爵閣下をお招きしようと言う祝宴や園遊会に事欠くことはないでしょう」
帝都に引っ込んでパーティで貴婦人でも追いかけていればいい。ろくに役にも立たぬくせに、何を好きこのんで戦場などへ出てきたのか――言外に込めた意味を悟ったのか、フレーゲルの表情が見る見る険しくなるが、ラインハルトは気遣う必要をまったく認めない。そうやって貴婦人達を追いかけ回した挙げ句に、投げ飛ばされればよいのだ。
いつかの冬の祝宴の時のように…コルネリア・フォン・シュミットバウアーに投げつけられた時、フレーゲルが上げた悲鳴が脈絡なく脳裏に蘇り、それがそのまま、あからさまな嘲笑となって表情に出たようだった。

「卿は失念しているようだな、私はフレーゲル男爵家の当主として、皇帝陛下より帝国軍大佐の地位を頂いている。卿のような、戦場稼ぎの大佐と同じにしてもらっては困る」
「――戦場も知らない大佐ですか」
いい加減になさいませ、ラインハルト様…キルヒアイスがたしなめる声が聞こえたが、ことフレーゲル男爵を相手にする限り、ラインハルトは自制と極端に相性が悪くなる。
「戦場稼ぎと呼ばれることは誇りでこそあれ、何の引け目にも思いません。戦場で何の功もなく、貴族としての義務を果たすことなく地位を得たことの方がよほど引け目に思うべきでしょう」
フレーゲル男爵の表情が一変するのを、もし冷静ならラインハルトは興味深く観察したことだろう。どうやら、自分の口にした言葉のどれかが、フレーゲル男爵の感性上の痛点に痛烈に突き刺さったらしい、と。
「お、思い上がるなよ、孺子」
どす黒く変色したこめかみに太い血管をのたうたせながら、フレーゲル男爵の声が毒液をしたたらせるようなかすれ声に変わっていた。
「では、自らも戦場に出て、貴族たるに恥ずかしくない武勇を示されてはいかがです。もっとも、恐くなって戦場に着く前に逃げ出されたとしても、男爵閣下ほど戦場の外での武勇を示されていれば、だれも非難はしないでしょうけれど」
不意にフレーゲルがにたりと笑うのに気づき、ラインハルトは沸騰しかけていた感情の箍を辛うじて締め直した。
「無論、わたしだとて名だたる帝国貴族の一員だ。いつでも戦場に出る覚悟はできているし、今回、こうしてイゼルローンへ赴いてきたのも、叛徒どもと干戈を交える覚悟の上だ」
「ほう、どちらへです？ 駐留艦隊の旗艦で要塞周遊の旅でもなさるおつもりですか」
「きさまのような者にはうかがい知れぬ、高度な戦略的作戦だ。まあ、精々、ヴァンフリートの辺境で戦場稼ぎに智恵を絞ることだな。きさまにはその程度の作戦が似合いというものだ」
「期待しております。その戦略的作戦とやらを…」
思い切りの冷嘲を込めて、ラインハルトは言い放った。視線が、怒りと憎悪を帯びて絡まり合い、目に見えぬ火花を飛ばしたように見えた。
「不敏にして、戦略的でない軍事作戦というものが存在し得るとは男爵閣下のお言葉で初めて知りました」
ろくに軍事のことも知らぬくせに知ったような口を利くな――ラインハルトの内心の罵声が届いたのか、フレーゲルの顔色はどす黒さを通り越して形容しがたい色彩を帯びた。一歩を踏み出したのは、言語を介してのやりとりに限界を感じた結果、直接的な行動に切り替えようとした衝動の表れだったに違いない。しかし、さすがに戦場と訓練に鍛え抜かれたラインハルトと、ろくに軍事教育も受けていない身で肉弾戦を演じる無謀さを理解するだけの冷静さは残っていたようだった。
怒りにまかせて大股で歩み去るフレーゲルの足音を背に、ラインハルトは中断されていた行動を再開する。『艦長演習室』への参集時刻に対して、とんだ茶番が入ったため五分以上も遅れていた。
足を速めながら、ラインハルトは僅かに首をかしげた。何か重大な情報を得た気がするのだが、感情が高ぶっているせいか、記憶の断片が万華鏡さながらに脳裏を飛び回っていて、冷徹な分析を受け付けないのだ。
諦めて、ラインハルトは意識を作戦会議へと切り替えた。フレーゲル男爵との一幕は後でキルヒアイスに相談すればよい。無用の諍いを演じてしまったことに渋い顔はされるだろうけれども。

「ご用はなんでしょうか」
恭しい反問を予期したフレーゲル男爵の期待は見事に裏切られ、長身のその士官は無言のまま、突然の訪問者を見下ろしていた。ブラック・グリーンの双眸が照明を弾いて微かな金色の靄を漂わせ、彼の容貌を何かしら人間離れしたものに見せていた。
「卿は礼儀というものを知らんのか？」
フレーゲルは声を苛立たせる。焦れたのと、もともと無視されることには慣れていない。加えて、目の前の士官の風貌に必要以上の圧迫感を感じていたのだ。帝都には、このシュミットバウアー大佐のような男は決して多くない。
「卿がヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー大佐かと訊いている。然りか否かぐらい答えればどうなのだ⁉」
「然り」
いきなり声が降ってきた。
「私に所用だと伺ったが、あと二〇分で会議の予定が入っている。急いで頂けるとありがたい」
「ふん――――」
鼻を鳴らし、フレーゲルは胡散臭げに『艦長演習室』一角に設けられたブリーフィング・ルーム・エリアに視線を走らせる。
複数のブリーフィング・ルームの中でも最大の規模を持つ作戦会議室が、新たなヴァンフリート七‐四基地救援作戦『海の霧』の作戦本部に充てられていた。その作戦本部へ向かう途中のヨハン・クレメンツを不意に呼び止めたのが、『艦長演習室』区画に入ってきたフレーゲル男爵だった。
ラインハルトが知っていれば驚いたに違いないことに、彼と出会う前にフレーゲル男爵が訪れた場所こそ、『艦長演習室』だったのである。
「用は簡単だ。私は今回、陽動作戦部隊の督戦官を務めることになっている」
「督戦官？」
「そうだ。陽動部隊をどう動かすかは、すべて私の裁量下にある。つまり卿らの命運はすべてわたしの指先一つにかかっているということだ。わたしの機嫌を損ねれば、たちまち卿らの命運は尽きる…そういうことだ」
「…」
「つまりだ。私の言葉にはまじめに耳を傾けた方がよい。卿自身の生命と地位、そしてフロイライン・シュミットバウアーのためにもね」
「ゲルタの？」
なるほど卿がゲルタの望まざる求婚者か――――無造作なヨハン・クレメンツの反応が、フレーゲルの肥大した自尊心をしたたかに逆撫でしたようだった。
「わたしの話を聞く気があるのかないのか、どっちだ⁉」
「手短に願いたい」
またしても最小限の回答は、宮中での繁文縟礼に慣れきったフレーゲルの言語回路を見事に空転させる。表情が空白に取って代わり、それが理解に変わるまで数秒を要した。
「き…きさま…私を誰だと⁉」
理解は、もともと極微量の忍耐心を蒸発させ、帝都では必ず通用した恫喝の言葉となって迸り出たが、この場では相手の眉一筋動かす力もなかった。
返事の代わりに、ヨハン・クレメンツが立ち上がった。
「――――‼」

予備動作もない、野生の灰色狼を思わせる身のこなしが、フレーゲルの背に大量の冷水を浴びせかけた。およそ戦場に縁のないフレーゲルにすら、ヨハン・クレメンツが彼の生命を奪うのに次の一挙動で十分であることが悟られたのだ。
「手短に、とお願いした。ここは宮廷ではない。聞き入れて頂けぬなら、話はこれで終わりだ」
恐怖に心臓を握りつぶされる直前、ヨハン・クレメンツの言葉がフレーゲルの硬直を解いた。
「ミューゼル大佐のことだ」
「ほう？」
硬い岩を刻んだような無表情さが初めて動き、微かな興味の色が浮かぶのに、フレーゲルは内心に安堵の吐息をつく。つくと同時に、ヨハン・クレメンツへの接触を奨めたアンスバッハの言葉が蘇った。『シュミットバウアー男爵家は代々にわたって剛直なほどの帝室の擁護者として立場を貫いてきています。利に動かず、脅しに乗らず、されど帝室の為とあれば、敢えて火中の栗を拾う…もし、シュミットバウアー大佐をして、そのミューゼル大佐が帝室に仇なすものと納得せしめれば、戦場において絶対的に信頼できる協力者となりましょう』――――と。
「そうだ。私はラインハルト・フォン・ミューゼルが帝国にとって歓迎すべからざる存在だと思っている」
「…？」
ブラック・グリーンの目が底光りして先を促す。彼の話を歓迎していない様子ではない。むしろ、明らかに興味を示し始めている。
「今回の作戦を機会に、あやつを排除したい。排除して、帝国千年の礎（いしずえ）を確かなものとしたいのだ」
「手段は？」
「さっきも言っただろう。私は今次の作戦で陽動部隊の督戦官を務めることになっている。陽動部隊をどう動かすかは、私の裁量次第だということを」
「作戦を失敗させ、基地の要員を見殺しにして、責任をミューゼル大佐に押しつける…と？」
かかったな…フレーゲルはほくそ笑んだ。
「完全に失敗させるとは言っていない。リーフェンシュタール准将は、ブラウンシュバイク公にとっても親族の一人。私にとっても縁戚に当たる、生まれながらにして帝国を支えるべき血統の人間だ。彼だけは救い出す。そうすれば、卿らの責は問われることはない」
「ミューゼル大佐を除いて…は？」
「そうだ。私はミューゼルのために陽動部隊を動かすつもりはない。あくまで帝国のためを慮って部隊を督戦する。卿も、ミューゼルを助けるのではなく、ミューゼルの邪な野望から帝国を救うために行動してもらえればよいのだ。ブラウンシュバイク公も、リーフェンシュタール伯も卿の忠誠を高く評されることだろう」
「…皇帝陛下はどう思われようか。陛下の御心もまた、基地の将兵を見捨て、リーフェンシュタール准将一人の救出をもってよしとされるものなのだろうか？」
「当然だ」
何を愚かなことを…ヨハン・クレメンツが完全に話に乗ってきたとの確信が、フレーゲル男爵の口を必要以上に軽いものにしたようだった。大帝陛下以来の名家であり、大貴族であるリーフェンシュタール伯爵家の出身者であり、かつブラウンシュバイク公爵家の縁に連なる者一人の血は、万余の平民の生命をもっても購えるものではない。
「その程度の道理すら、弁えておられぬような皇帝陛下ではない。

まあ、いろいろと噂がおありな方ではあるがな。すくなくとも伯父上の意向を無視なさることはあり得ない」
「そうか…」
ヨハン・クレメンツはちらと視線を動かした。
「お話は承った、フレーゲル男爵。もはや時間もない。一つだけ、質したいが、よいか？」
「何だ？」
「ミューゼル大佐が帝室に仇なす者と決めつける、その根拠だ。男爵は、ミューゼル大佐に叛意ありとする具体的な証拠をお持ちか？」
「証拠？」
何を馬鹿なことを言っているのだ、この男は…フレーゲル男爵は口許を大きく歪めて、ほとんど表情を変えぬ相手の顔を見直した。証拠など必要があるものか。一介の帝国騎士の分際でありながら、一七歳にして大佐の地位に昇り、あまつさえこの自分に対しても平然と憎まれ口を叩く。幾ら、その姉が肉体を差し出した見返りとは言え、皇帝もあの孺子に甘すぎるというものではないか。
無論、そこまでの本音をそのまま言葉にしたわけではなく、フレーゲルはもっともらしいレトリックで私憤を公憤めかしく飾り立てた。曰く、臣が年少にして分を冒すのは乱の兆しである。曰く、ミューゼルは帝国騎士でしかない身分でありながら、上級貴族への敬意が薄い。
「帝国を支え、実際に動かしているのは伯父上を初めとする大貴族なのだ。その大貴族の一員に対して十分な敬意を示せぬと言うのであれば、帝室に対しても敬意を抱いているはずはない。帝室に敬意と忠誠を抱けぬ者が過分の地位を得れば、身の程を過ぎた野望を抱くのは当然のことだ。一旦、地位を得、権勢をおのがものとしてしまえば、排除するにも大変な労苦が要るではないか」
ヨハン・クレメンツが初めて頷くのを、フレーゲルは納得のサインと見た。
「分かってくれたようだな」
「よく分かった。卿の言葉のよって来たるところは十分に理解できた」
「それは重畳なことだ。伯父上もお喜びになるだろう」
敢えて確認の言葉を省略したのは時間の制約ゆえだった。時計は会議開始の五分前を示していたのだ。
間もなくラインハルトか、もしくは腹心のキルヒアイスが姿を現すだろう。さすがにこの場で彼らと鉢合わせするのははなはだ都合が悪いことくらいは、フレーゲルにも十分以上に分かっていた。それに、ここまで話を聞いた以上、ヨハン・クレメンツが彼の申し入れを断るなどとは、フレーゲルには夢にも思われなかった。帝国貴族の重鎮たるこのフレーゲル男爵の申し入れを…まさか、意気揚々と『艦長演習室』区画を立ち去っていく『帝国貴族の重鎮』を見送りながら、ヨハン・クレメンツがこう呟いていようとは。
「所詮は我欲か」

「フレーゲル男爵が…？」
ヨハン・クレメンツからもたらされた情報は、ラインハルトに不快さと同時に意外の念を起こさせた。不快さの由来は知れている。こともあろうにフレーゲル男爵が陽動部隊の『督戦官』などという地位を占めることへの不愉快さであり、意外さはそのフレーゲルが多少なりとも危険の予測される最前線へ自ら出てこようとしている事実に対するものだった。

「つまり、フレーゲル男爵は督戦官の地位を得て、陽動部隊を我々の不利になるよう動かすつもりだ…と？」
キルヒアイスが念を押すように問うのに、ヨハン・クレメンツは無言でうなずいた。
ヨハン・クレメンツが、その硬質な無表情さを大きく動かしたのは、キルヒアイスの放った次の質問だった。
「――それでシュミットバウアー大佐、どうして、そのことを教えてくださるのですか」
「キルヒアイス？」
ラインハルトが不審そうに眉を上げ、赤毛の親友の顔を見る。
軽く頷き、キルヒアイスは続けた。
「フレーゲル男爵の妄動は、今度の出撃を成功裏に終わらせる上での障害になる…そう判断されたと思って宜しいですね」
「私はミューゼル大佐の作戦成功を願っている。男爵の申し入れを断った以上、私もミューゼル大佐と運命共同体になったと考えてもらってよい」
なぜ、お断りになったのです――その質問を予期していたかどうかは分からない。キルヒアイスは問いを放たなかったし、ヨハン・クレメンツは声に出しては何も答えなかった。
ヨハン・クレメンツがフレーゲル男爵の言葉に興味を示した理由は二つあった。フレーゲル男爵は確たる証左をもって、ミューゼル大佐に帝室への叛意有りとして糾弾するものや否や。いや、そもそもミューゼル大佐は果たして帝室への叛意を抱くや否や。
前者への答えは『否』。フレーゲルが本音の上に貼り付けた、薄い修辞など、ヨハン・クレメンツにとっては何の意味もない。むしろ、帝室を軽んじ、自らの私憤と私欲のみを優先させるにおいては、フレーゲル男爵のような男こそが糾弾されねばならないだろう。
豪奢な黄金色（こがねいろ）の髪と、鮮やかな紅の髪が視界の隅に入ってきたのを機に、ヨハン・クレメンツは不愉快な大貴族のどら息子のことを心の中から追い出した。
追い出したが、もう一つの疑問、フレーゲル男爵の言葉に敢えて耳を傾けた今ひとつの理由には応えが出ていなかった。
あの若者。帝王の目と戦争の天才を併せ持った黄金色の髪と蒼氷色の瞳のあの少年は、果たして帝室に牙を剥く意思ありやなしや。言い換えれば、ラインハルト・フォン・ミューゼルは、ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーの敵たるや、否や。
本来、答えは必要ない。彼が、ラインハルトを帝室にとって有害と判断した瞬間に、その存在を排除すべく動けばよい。
答えは既に出ている。ヨハン・クレメンツの直感は九割九分、ラインハルトが反逆者となるべきことを告げている。ゆえに初対面の瞬間に問答無用の射殺を試みたものの、未遂の段階でキルヒアイスに阻止されたのだ。
が、今はそれができなかった。
ヨハン・クレメンツは、彼にしては珍しく薄く微笑う。あのフレーゲル男爵が、よりによってゲルタに求婚するだなどとは。
『自らを救え、さもなければ救われる資格なし』
嫋（たお）やかな外見に似ず、妹（コルネリア）の信条は苛烈だ。
二言目には『伯父上』とブラウンシュバイク公の名を挙げ、その威を以て他者を圧しようとするフレーゲル男爵のような男は、彼女にとって最も嫌悪感を刺激される相手だろう。
『人と距離を置け。いつでも死ねるように』
もう一つの信条、あるいはゲルタが常にその判断の影に潜ませている思いも、彼は大まかに察している。妹をそう教え導いたのが、他ならぬ彼自身だったから。

自責はなかった。
彼はシュミットバウアー男爵であり、妹は、あるいはシュミットバウアー男爵夫人の名を嗣ぐべき存在だったから。
自責はなかったが、痛々しさを拭うことはできなかった。だからこそ、彼女が唯一、その信条に例外を作った相手のことを見捨てるわけにはいかなかったのだ。ヴァンフリート七‐四基地からヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール以下五〇〇〇の将兵を無事に救い出せる者がいるとすれば、それはラインハルト・フォン・ミューゼル以外にあり得なかったのだから。
「いずれにしても、フレーゲル男爵の動きが分かったことで、よりやりやすくなった」
ややあってラインハルトが言った。ヨハン・クレメンツとキルヒアイスの間の、無言の暗闘に気づいたのか、気づいていなかったのか、その口調は果断な前線指揮官のそれ以外のなにものでもない。
「貴重な情報を感謝する、大佐」
ラインハルト・フォン・ミューゼル大佐の率いる『海の霧（ゼーネーベル）』作戦実施部隊がイゼルローンを出航したのは、この一七日後、一〇月二八日のことだった。フレーゲル男爵を督戦官として伴った陽動作戦部隊約二〇〇〇隻は、彼らに遅れること三日、一〇月三一日に同じくイゼルローンを出航した。

勲章と英雄と

ヴァンフリート宙域遭遇戦で『大勝利』を上げた第八艦隊司令部の功績に、同盟政府は叙勲で報いる予定だとの知らせがヤンに届けられたのは、彼らがハイネセンへ向かう途上においてだった。細やか極まる辺境での遭遇戦での勝利ゆえに、昇進は見送られる。アップルトン中将が功三級自由戦士章を与えられるのを筆頭に、ビョルケル准将も功四級、おこぼれのようにヤンも功五級章を受勲する予定である。
ヤンを憮然とさせたのは、本来、彼に与えられるべき戦勝への報償がアップルトンやビョルケルに、いわば横取りされたことではなかった。いや『横取りされた』という意識すら、この時のヤンにはない。彼は作戦の原案を作って、アップルトン中将に提案した。提案を受け入れ、実施した結果として…いろいろと経緯はあったにせよ…勝利を得たのはアップルトンとビョルケルの功績である。彼らはヤンより重い権限と、同時に責任を負っている。報われるところも厚くてよい。
ヤンを唖然とさせ、うんざりした気分にさせたのは、『この偉大な勝利を導いた功績』に対して、国防委員会の何やらいう委員が同時に受勲する…と言う知らせだった。
「本当ですか？」
唖然とした口調を、さすがにこの時は隠すことができなかった。
「その通り。『五〇年以上にわたって国防委員の重鎮として、国防の要務にあたってきた功績に鑑み』ということだ」
不愉快な知らせを告げた当の本人の口調もまた、たっぷりとした皮肉のスパイスを効かせたものだった。

受勲式典の式次第伝達のために出頭した後方勤務本部でである。告げた相手は、士官学校時代からの知り合い、ヤンにしては珍しくそれなりに敬意を払ってきた先輩だったから、文句の言いようもなかった。
「まあ、お前も二〇代も半ばで中佐なんだから、給料のことで文句を垂れ流すもんじゃないだろう、ええ？」
アレックス・キャゼルヌはヤンの士官学校の先輩であり、彼もまた二〇代にして大佐の地位に就いている。
「給料じゃありません」
功ある人に報いるのは、国家として健常なあり方だが、この叙勲が果たしてそんな健全な意味合いを持ったものかどうか、ヤンにははなはだ疑問に思われたのだ。
第一に、今回の作戦において、この委員は何も貢献していない。少なくとも、第八艦隊はヴァンフリート宙域警備という通常任務の枠内で今回の作戦を実施している。国防委員会には作戦計画を提出し、その承認は得ているが、件の国防委員が何らかの前向きな提案をしてくれた、とも聞いていない。
極めつけは、この委員が受勲するのが『勲二級』相当の勲章だということだった。アップルトン中将の受ける功三級章よりも、勲章としては一階級上である。戦場で実際に指揮を執ったアップルトンよりも、戦場とは何らの関わりもないハイネセンで、戦いのあったことすら知らなかった政治家が厚く賞されるというのはどう考えても正常ではない。しかも、自由惑星同盟では、いわゆる三級章以上の勲章に対して終身年金が支払われるのだが、問題はその額だった。二級章のそれは三級章の二〇倍。一級章になれば、三級章の五〇倍以上の金額が、受勲者に毎年支払われるのである。
ヤンを徹底的に不愉快にさせたものがあるとすれば、前線の軍人は、艦隊司令官クラスでさえ功三級クラスの受勲までで打ち止めになることが多く、一方、ハイネセンの政治家や、ごく一部の高級軍人が、さして功績もあると思えないのに次々にそういった高位の勲章を胸に飾ることだった。正確には、勲章ではなくそれに伴う年金目当てでお手盛りの叙勲をやっているのではないか…軍に入って以来、払い込んだ年金の掛け金と、今退役したらもらえるだろう年金の額を、二級以上の勲章を胸にぶら下げた政治家が受け取っている終身年金の額と比較すれば、自ずから不平の声も上がろうと言うものではないか。
「我々は、自分で積み立てた掛け金の中から年金を、言ってみれば返してもらう立場でしかないんです」
その一方で、勲章にくっついてくる終身年金は、ヤンが給料の中から支払っている税金でまかなわれるのだ。言葉は悪いが、法律を笠に着た盗賊とさえ言いたいような話ではないか。
「おい、ヤン」
キャゼルヌはさすがに顔をしかめて周囲を伺った。幸い、アップルトン中将以下は別室に案内されており、キャゼルヌが予め用意しておいた会議室内には彼ら二人以外の人影もない。
「まあ、ある意味、俺もお前さんの言うとおりだとは思うんだがね」
右手の掌で顔をつるりとなで下ろし、キャゼルヌは軽く肩をすくめた。
「実はお前さんにもう一つ知らせがある」
「何ですか？」
「年が明けたら、お前さんは大佐になる」
「は――――？」
我ながら間の抜けた声だと思ったが、他に反応のしようもなかった。

「しかし、今回は昇進はない…と聞いていましたが」
「お前さんだけさ。アップルトン艦隊の司令部は今度の受勲だけで終わりだ」
　アップルトン中将からの報告書は巧みにヤンの功績を塗りつぶしてはあった。しかし、読む人間が読めば、帝国軍艦隊の迎撃作戦を立案したのがヤン以外にあり得ないことも明らかだったのだ。
「読む人間…ですか？」
「まあそう言うことだ。お前さんの言葉じゃないが、功績のある人間には正しく報いるというのが組織としての健常なあり方には違いないからな。で、昇進と同時にヤン・ウェンリー大佐はハイネセンへ呼び戻され、艦隊総司令部付きに戻る…まあ、同時に休暇ももらえるだろうし、しばらくは骨休めでもするんだな」
　ヤンは再び顔をしかめる。彼が艦隊総司令部に呼び戻される。士官学校のエリートでもなく、最前線で、転んだ弾みに拾った功績で中佐…いや、キャゼルヌの言葉を信じれば大佐になるらしいのだが…にまで昇ってきたに過ぎない彼までを艦隊司令部に招集するような作戦と言えば、一つしか考えられない。
「また、イゼルローン…ですか」
「ところで…今日、こうやって時間を割いてヤン・ウェンリー中佐、近い未来のヤン大佐殿に会いに来たのは、何もお前に昇進の前祝いを持ってくるためじゃないんだ」
　不意にキャゼルヌが話題を変え、ヤンは面食らって思わずベレーを取って髪をかき回した。
　キャゼルヌの目が珍しく叱責の色を讃えているのに気付いたのだ。イゼルローン要塞攻略作戦。考えてみれば同盟軍にとって至上にして究極の目的に対しての作戦発動は、最大の軍事機密に他ならない。
　咳払いし、キャゼルヌが話を再開する。
「トラバース法というのを知ってるな」
「え、ええ、一応は…」
　戦死した軍人の子弟を、現役の軍人の家庭が引き取り養育する。政府からは一定額の養育費が貸与されるが、養育された子弟が軍人、あるいは軍属となった場合には返済を免除される。
「まあ、言ってみれば中世以来の徒弟制度だと思えばよろしい…いや、もっと悪質かな。金銭で将来を縛ろうと言うんだからな」
　この法案のことを説明した時のキャゼルヌは、いつものそれよりも更にさらに皮肉っぽさのつよい口調だった。
「が、今の俺はこのトラバース法を批判するのではなく、推進しなければならない立場にある。何しろ、後方勤務本部こそが軍人子女福祉戦時特例法の主管機関なんだからな」
　トラバース法の正式名を苦もなくすらすらと口にのぼせるあたり、未来の後方勤務本部長を嘱望される秀才官僚らしかった。
「打診というより、これはもう決まった話に近いんだが、生きて大佐になったら、お前さんも対象者になる、そのことを心得ておいてもらおうと思ってな」
「私には資格がないはずですが？」
　トラバース法の対象となるのは、上級の軍人…明確な規定はないが、一応大佐以上の軍人で、健全な家族を持つ者、簡単に言えば妻子持ち、最低でも妻帯者ということになっている。まだ独身のヤンは…キャゼルヌの言を信じれば、来年には大佐になることになっているとしても…両親を失った子弟を迎え入れる立場にはないはずだった。
　だが、キャゼルヌの方はヤンの思いなどどこ吹く風でどんどんと話を進めていく。
「引き取る側が家庭持ち、妻子持ちでなければならんというのは、別に条文に明文化されているわけじゃない。単なる不文律だ。た

しかにな、お前みたいな無精な独り者に、前途のある子供たちの運命を預けるのは、これは無謀かも知れん」
「無謀ですか？」
「無謀だろ？」
ヤンの渋面をキャゼルヌは無視した。
「ぶちまけた話をするとな、このところ、戦死者が増えすぎている。早い話が去年の第五次総攻撃だ。戦死者は鰻登りだし、遺族への年金、施設への補助金も増える一方だ。この際、負担が減るなら体裁になぞ構っちゃいられん…とそう言うことさ」
ならば不要不急の叙勲で、ろくに仕事もしていない高級官僚に終身年金なぞくれてやるのをやめればよかろうに…表情に出たのか、キャゼルヌがまた皮肉っぽく頬を歪めて見せた。
「言いたいことが色々ありそうだな？」
「いえ…まあ…わかりました。生きて大佐になれれば、その時は詳しくお話を伺いましょう」
黒い、先のとがったしっぽを弄ぶような表情でキャゼルヌはうなずいた。
「では、今の言葉を忘れないようにな。俺に無断で戦死したりするな。こっちにも予定って奴があるんだからな。それと、その時になって『聞いてませんでした』なんて言うんじゃないぞ」
「言いませんよ。ただ、何もかも予定通りに事が運ぶと期待されては困るんですが」
「だからって最初から予定を守ろうとする努力もしないんじゃ、予定や計画ってやつは何の意味もないことになるだろうが。まあ、そういうことだ。期待してるからな…用事はそれだけだ。退出してよろしい」
会議室のドアに手をかけてから、キャゼルヌは振り返った。
「済まん。肝腎のことを忘れてた」
「――？」
「オルタンスが“できのいい後輩”とやらに夕食をごちそうしたいそうだ。今夜、空いてるな？」
「キャゼルヌ夫人の手料理がいただけるなら、無理にでも予定を空けますよ」
「無理しなくてもいい。どうせ官舎に帰ったところで出迎えてくれるのはカビと埃と言ったところだろ」
ひどいことを言いながらひらひらと掌を振ってみせるキャゼルヌに、ヤンは問い返す。で、何かのお祝いですか、と。
キャゼルヌの表情が呆れ返ったそれに変わった。
「鈍い奴だな。受勲と昇進だ。一応、言っとかないわけにもいくまい。おめでとう、とな。二七で大佐か。うまくいけば、アッシュビー元帥の記録をしのげるかも知れんな」
「私はあんな英雄じゃありませんよ、先輩」
「忘れちゃならんのは、英雄かどうかを決めるのは、しばしば、本人じゃない。周囲だってことさ。じゃ、待ってるぞ。午後七時でどうだ」
「了解しました」
音もなく閉じたドアを、ヤンはしばし憮然として見つめていた。

後年、三二歳で元帥の地位に就くことになるヤン・ウェンリーは、しばしば、彼の先駆者としてのブルース・アッシュビーとの比較において語られることになる。
曰く、『ヤンの視野が広く戦略から政略にまで及んだのに対して、アッシュビーはあくまで戦場の勇者たるに留まった』。『戦闘指揮の果敢さと判断の速さ、攻勢における圧倒的な速度において、アッシュビーはヤンに優る。ヤンにアッシュビーの戦術能力が加

わっていれば、ローエングラム王朝は歴史上の仮定の存在に留まったに違いない』。『いずれも単純な戦争馬鹿である。評価に値しない』…云々。

ブルース・アッシュビーを評価する人も、その存在を最も否定的に見る人も等しく共通しているアッシュビー観が、『偉大な戦術家としてのアッシュビー』である。人々がアッシュビーを『戦術家』と呼ぶとき、その言葉の中には相反する二つの意味が込められている――ヤンはそう思っている。肯定的な意味合いと、逆に否定的な評価とが、である。

前者は、アッシュビーの戦場での偉大さを最も大きく捉える立場であり、後者は、この偉大な将帥が…最も狭い意味での…戦場の外では偉大たり得なかったと暗に諷する考え方である。艦隊戦闘の場では他に並びなき名将であり、銀河帝国と自由惑星同盟の相克が始まって以来、アッシュビーを超える艦隊指揮官はおそらくは存在しなかったであろう。そう主張して、反対意見に直面する論者は多くはあるまい。

しかし、その反面でアッシュビーは戦場での勝利を戦場外での勝利…いわゆる戦略的勝利に結びつける才には極めて乏しかった。彼は、帝国軍に惨憺たる敗北を味わわせ続けたが、それは自由惑星同盟政府によって予め設定された戦場の勝利を得たにとどまる。彼がどれほどの勝利を上げ続けても、戦場はイゼルローン回廊の同盟側から帝国側へ移動することはなかった。また、戦場自体もティアマト、ダゴン、アスターテ、アルレスハイムといった宙域をぐるぐると回り続けるだけで、僅かも同盟領からは離れなかった。すなわち、アッシュビーはただ戦場で敵兵を味方の兵よりも多く殺しただけの、単なる『戦闘上手』に過ぎなかったのだ――と。

残酷なほどに否定的なアッシュビー批判論…と言っても、ヤン以前の同盟軍最大の英雄たるアッシュビー元帥に対するそのような意見が多数派を占めることはあり得なかったが…に、ヤンは一理ありと思いつつも、諸手をあげて賛意を表する気分にはなれない。一〇数年にわたって、少なくとも自身が指揮を執った戦場ではほとんど負けなしの戦績を上げ続けたアッシュビー元帥に、かけらほども戦場外への貢献がなかったとするのは些か極端すぎるのではないか、そう思うのだ。

アッシュビーの最大の功績は、第二次ティアマト宙域会戦での、『帝国軍務省にとって涙すべき四〇分間』ではないか…ヤンが密かに胸の裡に抱いている感懐がそれである。あの会戦の終盤、わずか四〇分の間に、アッシュビーは帝国軍将官六〇人を戦死させた。同盟にまで正確に情報が伝わっているわけではないが、将官が六〇人も同じ戦場で斃れた以上、艦長・副長クラスの士官…大佐から中佐クラスだが…の戦死者はその数十倍から数百倍以上にも達するに違いなかった。

『海軍は二〇年かけて大佐を育てる』とは、人類の生活圏がまだ地球上にとどまっていた時代の言い回しだが、熟練した戦闘艦艦長や、それを補佐するベテラン士官を育て上げるには優に一世代近い時間を要する。実際、帝国軍が第二次ティアマト宙域会戦での人的損失を回復し終わるのは、彼らが失われた宇宙艦隊の艦艇を再建するよりもはるかに遅く、実に一〇年余りの後だったとさえ言われている。

帝国軍が宇宙艦隊の人的資源回復に一〇年余を要したという事実は、それを裏返せば、帝国軍がそれだけの期間、同盟領への積極的な攻勢を断念し続けねばならなかったことを意味する。中小の戦闘は継続していたものの、その間、同盟は数万隻の艦艇を動員し、数百万の将兵の戦死傷を覚悟せねばならない艦隊決戦の負担から免れ続けたのである。

アッシュビー元帥が、第二次ティアマト宙域会戦で帝国に強いた巨大な流血は、その後、一〇数年にわたる、擬似的な平和とも言うべき期間を同盟にもたらした。皮肉な言い方かも知れないが、それこそがアッシュビーを最も高く評価する言い方ではないのか。決して同盟軍内部のみならず、同盟領のいずれにおいても多くの賛意を得られる意見だとは思わなかったが、ヤンにはそう思われてならなかった。

最も好戦的で無責任な軍人や政治家の常套句として、『のんびり外交なんてやってないで、さっさと開戦しろ。戦艦一隻を作るには何ヶ月もかかるが、沈めるには五分で済むんだから』というものがある。アッシュビーは、彼らの言葉を最も効果的に実現してのけた、とも言えるのだが、だからといってヤンが外交よりも戦争に重きを置く考え方に賛成しているわけでもないのだ。あくまで、アッシュビーの功績を評価するのに、結果的には『数年の外交的折衝で得られなかった成果を、わずか数日の会戦で獲得した』とも言えると思っているに過ぎない。万一にも帝国側にアッシュビーに比すべき戦術家が出現するようなことがあれば、『何ヶ月もかけて建造した戦艦』を五分で沈められ、『二〇年かけて育てた』艦長を、数十分の間に数百人から数千人規模で戦死させられるのは、今後は同盟軍の側になるかも知れないではないか。

さらに一歩の考察を進めるなら、アッシュビーが『偉大な戦術家』で終始したのは、彼の責任ではない。彼は将帥であり、その最大の任務は戦場で勝利を得ることだった。彼の偉大さは、戦場での巨大な勝利によって証明された。第二次ティアマト宙域会戦は、一時的にとは言え帝国軍の戦略的な行動能力を奪い取ったと言って良い。

一方、戦場での勝利を外交の勝利へ結びつけるのは政治家の仕事なのである。慧眼な政治家があれば、帝国に外交的な譲歩を強いることで、一〇年ではなく二〇年、あるいは三〇年の比較的安定した平和を獲得し得たかも知れない。あくまで可能性の問題に過ぎないが。

こうした考察を胸の中に抱きつつも、だからといってアッシュビーや、彼に代表される軍人というものに無条件の評価を与えられないところが、後世においてもヤンに対する評価を分裂させる要因だった。

完勝を謳われた第二次ティアマト宙域会戦でもアッシュビー自身とベルティーニが戦死し、同盟軍の死傷者も数十万をもって数えなければならなかったのだ。数十万の若者に、その半ばも歩ませぬ人生の中断を強い、数倍する数の家族に決して取り返すことのできない悲嘆と、その裏返しの帝国への憎悪を抱かせて、そして得られたものは、一〇年あまりのか細い均衡の上の平和…それも、大戦闘が起こらない、という意味だけの…。果たして、同盟の市民が払った代償に見合うだけの何かしらを、同盟政府や高級軍人達は還元し得た、と言えるのだろうか。

ヤンは腕時計を見た。視線の先で、時計は午後三時一八分を指していた。午後七時にキャゼルヌ邸を訪ねるとして、シルヴァーブリッジ街の官舎に帰り、シャワーと着替えを済ませるくらいの時間は充分以上にありそうだった。

セカンドラウンド

敵基地捜索の任務を与えられていた同盟軍第八艦隊第三分艦隊が、その任を果たしたのは一〇月二〇日のことである。
「こいつは…見つかったな」
ヴァンフリート七‐四基地は惑星ヴァンフリート七の外惑星環の中にある。
小惑星帯に比較すると、外惑星環は非常に薄いのが普通である。たとえば、ヴァンフリート七の兄弟惑星であるヴァンフリート八の外惑星環は、最大でも一キロ弱の厚みしかなく、周回している岩塊にしても大きくても数百メートル、たいていは数十メートルでしかない。上下から攻撃されれば、外惑星環など何の防禦の働きも示してはくれないのだ。
ヴァンフリート七は、この意味で例外中の例外だった。何と平均で厚さが三〇〇キロもあり、最も厚い部分では四五〇キロにも達する。環というより、小規模な小惑星帯だった。この外惑星環の生成については多くの天文学者が様々な説を唱えているが、最も有力なのはヴァンフリート八との軌道交差を繰り返す内に、大型の衛星が次第に軌道を歪められ、ついにはロシュの限界を超えてヴァンフリート七に近づいた挙げ句に潮汐効果で破壊されたというものだ。ヴァンフリート星系が極めて不安定な恒星系であることは、第一惑星の特異な軌道要素や、明らかにヴァンフリートから弾き出されたと見られる浮遊惑星の存在を確実な証拠として証明済みだった。ヴァンフリート七の外惑星環生成のメカニズムが解き明かされれば、人類は恒星系の生成について新たな知識を獲得することになるのだが…。
残念なことに、この時期の人類の関心はヴァンフリート星系の秘密を解き明かすことよりも、主観に基づいて二つに色分けした自分たちのグループの、他方を攻撃し抹殺することにのみ集中されている観があった。
「ええ、敵の戦略偵察艦と思われる移動体が本宙域に集中しつつあります」
「まあ、あれだけ派手にやってのけたんだ。同盟軍が七‐四に関心を集中させるのはむしろ当然だと思うな」
長めの黒髪にやはり黒い瞳。どことなく『良い家の坊や』とでも評したい雰囲気をまとった青年が顎をなで回す。指先にそり残しの鬚を感じたらしく、ちょっと不愉快そうに眉をしかめた。
「よくここまで隠れられたものだ、何しろもう丸々三年だからな」
「…しかし、発見された以上、攻撃を受けることになります」
敵艦隊の動きを報じる分析スクリーンを前に、士官は上官を振り仰いだ。
「敵は少なくとも一個制式艦隊を常駐させています。前回は、まだ、この基地の所在が明らかになっていませんでしたが、今回は敵の全兵力がこの基地に集中してくることになります」
「ああ。ちょっと辛いな」
「辛いな…って、閣下」
「辛くないのか?」
黒髪の士官は、もともとちょっと下がり気味な目尻に微笑いじわを浮かべた。そうすると、びっくりするくらいに人が好さそうに見える。最前線の基地で僅か五〇〇〇の兵力を率いて、一個制式艦隊一万数千隻、百万以上の敵兵力と対峙している基地司令官には、およそ見えなかった。が、その笑顔には妙に見る者を安心させる何かがあった。
司令官の笑顔を前に、電子戦士官は諦めたように肩を竦めた。

「…いえ、辛いですが」
「敵一個制式艦隊、相手にとって不足はない。戦い甲斐があると言うものさ」
「それは違うでしょう」
平板な口調で口を挟むのは、副司令官・兼・参謀長のロベルト・クルツバッハ中佐。司令官…ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール准将が基地司令官として赴任して以来のコンビである。着任に際して特に頼み込んで付けてもらった。攻撃より防禦戦に強く、鏡（ディー・シュピーゲル）のあだ名を持つ、元々はブラウンシュバイク公爵の私兵部隊の士官である。
「これは死に甲斐というやつではありませんかな、閣下」
「それは困る。私は未だ死にたくない。卿は死にたいのか、ロベルト」
「いえ」
にこりともせず、クルツバッハは頭を振る。
「磁力砲（レール・キャノン）はある限り用意させましたが…宜しいのですか？」
「ああ？」
「斉射させ続ければ、あるいは一日や二日、制式艦隊による総攻撃をも防ぎ止めることはできると思います。しかし、それまでです」
「そうだね」
「それでもその手をお使いになる…と？」
「なあ、ロベルト…」
「姓か階級で呼んで頂けますまいか。閣下が部下を名前で呼ばれるのでは、示しがつきませんが」
「呼びにくいんだ、クルツバッハ中佐…なんていうのはね。それに、どう呼ぼうとも間違えなければいいんだし、第一、今は互いの呼び方を議論してる場合じゃないだろ？」
もう一度、微笑う。まるで隔意のない、無防備極まる笑顔に、クルツバッハの無表情さが渋さを増したように見えた。
「相手が一個制式艦隊だというのは事実だ。無論、この地勢だから一気に全艦隊を展開させるのは難しい。それでも、一個分艦隊…二、三〇〇〇隻くらいは余裕で半包囲攻撃ができる」
前置きもなく、ヴィンフリートの口調が変わった。
慣れているのか、クルツバッハ中佐の方も特に驚きもせずに司令官の言葉に耳を傾ける。
「こういう相手に持久はできない。ありたけの戦力を集中して撃退するか、さもなければ全滅、または降伏。選択肢はそんなものだ。私としては撃退を採りたい」
「よしんば撃退できたとしても、一時的です…」
言い差し、クルツバッハは左の眉をつり上げた。
「救援が来ると、お思いですか」
「来る」
回答は無造作だった。
「これだ」
通信文。二ヶ月前に、補給物資を満載した運荷艇の群れと共に届けられた。曰く、『ゲルタに似合うのは花嫁衣装であって喪服ではない』。
クルツバッハはゲルタ、ことコルネリア・ゲルトルーデとヴィンフリートの間柄を知っていた。
「ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー大佐…ですか」
「死ぬな、と言っている。戦い急いで死ぬな、とね」
「降伏して生命を全うしろ、という意味では？」
「なら、磁力砲弾満載で食糧は三ヶ月分ということはあるまい。

降伏していいなら、弾薬の量は少ない方がいい。その方が味方の犠牲も少ないし、敵に与える損害も少なくて済む。結果として敵味方から恨まれずに済む。降伏だって受け入れてもらいやすい。三ヶ月、待て、ということだと私は解釈した」
「三ヶ月、ですか？」
　数えるまでもない。前回の救援作戦…それが基地の大拡張を目指したものだったなど、ヴィンフリートにもクルツバッハにも思いもよらぬことだった…が八月末。今は一〇月末。そして、この次の、おそらくここ数年来で最大規模の後世表面爆発とそれに伴う磁気嵐は一一月六日頃にヴァンフリート星系を見舞うはずだった。
　ヴィンフリートの意見を容れるなら、次回の救援作戦は間もなく実施に移されるはず。可能性としては磁気嵐に乗じた一一月上旬と見るのが妥当だった。
「一回、ないしは二回、撃退すれば間に合いますな」
「だろ？」
　またいきなり子供の笑顔に戻った。
　分からん人だが、無能ではない…“シュピーゲル”クルツバッハが、この臨時の上官に対して下した評価がそれである。
「だから、その手段を採る。そう言うことだ。ダメだったら、その時は私が責任を取るよ」
　貴族出身の高級士官の中には、口先だけでも責任を取ると言う者は皆無に近い。功績は自分のもの、責任をとるのはすべて部下…そんな彼らのメンタリティを知るクルツバッハの視野の中では、ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールは絶滅危惧種の貴重な一個体に近い。何しろ、この人物なら本気で責任をとって自決するなり、敵に降伏して部下の生命を全うさせたりするに違いないのだから。
　こういう上官ならずっと仕えていても良いかも知れない。
　クルツバッハは、元々は正規士官出身ではない。下士官からの叩き上げで、それでも正規軍では遂に士官への門をこじ開けることができず、ブラウンシュバイク公爵の私兵に志願することで漸く中佐の地位を得るに至ったのだ。私兵部隊には似たような境遇の連中が多かったせいもあり、正規の帝国軍に較べればよほど居心地は良かったが、それでも有能で物わかりのいい上官に恵まれることは、奇跡でも起こらぬ限り期待できないほど稀少な経験だった。
「ですが、磁力砲だけでは二回は無理です…まさか、本気でいらっしゃる…？」
「本気でもないのに、真面目にあんなことを準備させるとでも？」
「しかし、子供だましですし、もともとの発想が…」
「知ってるか、ロベルト。昔話だがね、人類が地球とか言う惑星（ほし）で戦争していた時代のことだ。海に潜る軍艦…潜水艦と呼んだそうだがね。この潜水艦を狩り立てる手段を考え出すために、ある国の軍は生物学者の意見まで借りたそうだ」
「…」
「一方だ。戦争は専門家にしかできないと決めつけた挙げ句に、自国の商船団を最後の一隻まで潜水艦に沈め尽くされた国もあったそうだ。どっちが戦争に勝ったと思う？」
「それは…前者でありましょう、商船団を沈め尽くされて戦争に勝てるわけがありません」
「そうだとも。ところで、後者の国の戦争指導者が、何故、潜水艦から商船団を守る手を打たなかったかと、戦勝国からインタビューされたそうなんだ。なんて答えたか、分かるか？」
「…まさか敵がそんなに商船団を攻撃してくるとは思わなかったし、自分は潜水艦のことはよく分からなかった…ですね」

有名な話だった。答えてから、クルツバッハはヴィンフリートの暗喩の行き着く先を察した。
「分かりました。確かに馬鹿馬鹿しいほどにくだらない発想ではありますが、それゆえに効果があるかも知れません。もう少し、数を増やして、志願者も改めて募りましょう。発想はともかく、実施には堅実を以て当たりたくありますので」
当の発想者を目前にして、クルツバッハは平然と言い放つ。自分の着想をして『馬鹿馬鹿しいほどにくだらない』と評されても、ヴィンフリートは顔色一つ変えなかった。馬鹿馬鹿しいほどにのくだらなさを一番知っているのが、彼自身に他ならなかったし、今の自分たちの窮地が、そんな手段に頼らざるを得なくなるほどの絶体絶命なものであることを、やはりヴィンフリートは最もよく心得ていたのであるから。
『敵の攻撃は、ここ一両日中に予想される。各員身辺を整理するとともに、十分の休養を取り、敵襲に対して万全を期せ。我らは死に赴くにあらず、生へ向かって死力を尽くすものなり』
命令を発令した夜、ヴィンフリートは恋人への、出すあてのない手紙を認めている。
『必ず生還し、貴女の顔をもう一度見たいと念じておりましたが今度こそ、生還を期しがたいかも知れません。永遠に愛しき御身に、大神のご加護がありますことを』

☆☆☆

戦艦『ペレスウェート』麾下の同盟軍第八艦隊第三分艦隊がヴァンフリート七‐四宙域に殺到してきたのは一〇月二八日。ヴィンフリートの予想よりも一日遅かった。
『ヴァンフリート七‐四宙域に敵基地らしきもの見ゆ』との報告は、ただちに超光速通信を介して首都へ送られた。
遅くとも二五日、あるいは二六日には総攻撃の許可が下ることを予想していた第三分艦隊だったが、実際には二七日になっても何の指示も送られては来なかったのである。分艦隊を指揮するアドロフ少将は命令を待たずしての総攻撃を唱えたが、参謀長以下に自制を求められ、二八日までの待機を肯った。
が、二八日になっても、ハイネセンもアップルトン司令部も沈黙を守り続けた。ここに至ってアドロフ少将も、参謀長のルイシコフ中佐もこれ以上の待機を時間の浪費と断ぜざるを得なくなったのである。
信じがたい遅延が生じたのは、アップルトン司令部がすでにハイネセンを発ち、ヴァンフリート星系へ向かっていたという事情による。一〇月二〇日に発信された、敵基地発見の報告がハイネセンに達したのはその三日後の二三日。本来、ただちにアップルトン中将以下に伝達されるべき報告だったが、実際に旗艦『クリシュナ』に一報が入ったのは何と二七日になってからだった。
「ハイネセンで受信できた以上、『クリシュナ』も受信していると見なすのが至当である。すでに作戦行動中の艦隊に対して、あれこれと口出しするのは、作戦指導のスタイルとして余り格好がいいものではない」
それがハイネセンの統合作戦本部内での意見であり、グリーンヒル大将が気付くまでは完全に放置されたままだった。グリーンヒル大将は、次期軍事作戦の舞台としてヴァンフリート星系に注目しており、その情報収集中に、このとんでもない情報の滞留に気付いたのである。完全な偶然と言ってよく、この偶然がなければアップルトン司令部は、あるいは最後までヴァンフリート七‐四基地発見の事実を知らずに終わったかも知れない。

グリーンヒル大将から連絡を受けたロボス元帥は激怒した。
「行動中の艦隊に対して遙か後方からのつべこべと口出しするのは、確かに百害あって一利なしと言えるが、最新の情報を、前線部隊による傍受を期待して転送しないなど、軍中央にあってはならない怠慢だ。ただちに、あらゆる経路を介してアップルトンに報せよ‼」
奇妙なことなのだが、ロボスを初めとする軍首脳のこれほどの激怒を買ったにしては、報告を転送しなかったこと、それ自体に対する責任追及が行われた形跡はない。また、誰がそのような判断を下したのか、その点についても、同盟軍のあらゆる資料は完全な沈黙を守りつづけることになるのである。
さて、二七日夜に報告を受領したものの、アップルトン司令部は即応して指示を出そうとはしなかった。
司令部の意見が統一を見なかったのである。

「ただちに総攻撃、第三分艦隊だけでなく第五分艦隊も動員し、敵基地を完全包囲して攻撃すべきです」
艦隊参謀長のビョルケル准将は正攻法による攻略を主張し、キャベンディッシュ少佐も賛成したが、情報参謀のアーバークロンビー少佐が難色を示した。
「間もなく恒星ヴァンフリートが活動を再開します。前回よりもさらに規模の大きい表面爆発が予想されており、ヴァンフリート七の、それも第四衛星付近の外惑星環のような錯綜した地勢の中に大艦隊を展開させるのは非常に危険です。第三分艦隊だけなら今日明日中に展開できるでしょうが、第五分艦隊をも動員するとなると合流までに二日から三日、完全包囲までは四日はみるべきでしょう。そうすると総攻撃開始は一一月に何日か入ってしまいます」
「いつだ、次の恒星表面爆発の時期は？」
「六日の予想です」
アーバークロンビー少佐の回答がアップルトン中将の渋面を誘った。
「すると総攻撃をかけたとして、時間的な余裕は数日しかないというわけか」
「そうです。ですから、基地を遠巻きに包囲しておき、磁気嵐明けに総攻撃をかけるというのではいかがでしょうか。その時期には『クリシュナ』以下の艦隊主力もヴァンフリートに帰還を果たせていますでしょうし」
「磁気嵐に乗じて帝国軍の連中が脱出してしまったらどうなるのだ」
ビョルケルの語気が荒くなった。
「そんな無様なことになったら、我が艦隊の責任を追及されるのは目に見えているぞ」
「だからといって、磁気嵐の中を無理に大兵力を行動させれば、味方撃ちや事故で無用の損失を被りかねません。敵と戦うまでもなく損害を出したのでは、それこそ無能だと批判されるのは避けられなくなります」
「だが、前回、帝国軍の連中は磁気嵐の中をヴァンフリート八の衛星軌道に入ってきたし、逃げ出した何隻かは我が艦隊の砲撃を避けきった。帝国軍はヴァンフリートの磁気嵐の中でも行動の自由を確保している。何としてでも開城させてしまわぬ限り、敵の大半を取り逃がす恐れは大きいのだ。我が第八艦隊の名誉にかけて、そのような無様さは受け入れかねる‼」
何とも賑やかなことだ…甲論乙駁する幕僚たちの議論をよそに、何故かヤンの周囲だけは眠気を誘う春風が吹いている。

――拙いな、これは…
一言くらい意見を言わないと、また『非常勤参謀』などと悪口を言われるだろうか。まあ、悪口を言われるくらいならいいが、何も言わないでいると眠ってしまいそうだ。そう言えば、キャゼルヌ先輩がご馳走してくれた、あのシチューは美味かったな。おっと前言撤回、先輩じゃなくて、キャゼルヌ夫人か。美人で、きびきびしていて手際が良くて、料理が上手で、しかも亭主の操縦も完璧だ。あれが軍人の夫人の理想というものなのかな…ああ、いけない、何を考えてるんだ。えっと…
「ヤン中佐」
刈りそろえたブラウンの顎髭をなで回しながら、アップルトン中将が視線を向けていた。幕僚達の議論は果てしなく続き、中将自身もいずれの意見に与するべきか、判断に窮したようだった。
が、呼ばれたヤンの方も沈み込みかけていた夢の世界から呼び覚まされ、事態を察していない。
「あ、はい」
「君なら…君の意見を言ってみたまえ」
「は…はあ」
そうは言われても、たった今、半睡眠から目覚めたばかりで議論の筋も追えていないのだ。いかにヤンといえども、情報不足では頭の働かせようもない。しばらく、きょろきょろと周囲に視線を走らせ、複数の非好意的な眼差しに出迎えられるに及んで、潔く白旗を掲げることに決めた。
「申し訳ありません、閣下。よく聞いておりませんでしたので…」
「それはご立派なことだな、ヤン中佐」
ビョルケルの声が悪意をはらんだのには、ヤンのあずかり知らない理由があった。
前回の戦勝でビョルケル准将は少将への昇進を信じていた。しかし、昇進は見送りになり、受勲したにしても功四級章でしかなかったのである。
完勝を目指してフルマンティ分艦隊に追撃を命じ、ラインハルトに手痛い反撃を浴びた挙げ句に、フルマンティ少将以下二万近い将兵を喪う結果となった。完勝の画竜点睛を欠いた失策として、それが彼への論功行賞に反映されたのだ。
少なくともビョルケルはそう信じていたし、あながち虚説とも言えない節があったのも事実である。
ビョルケルをして、ヤンに嫉視を向けさせたのは、年明けとともにヤンが中央へ、おそらくは艦隊総司令部へ転任し、併せて大佐に昇進するという噂だった。無論、噂ではなく事実そのものだったし、さらにビョルケルの怒りに油を注いだのが、この噂ならぬ事実を彼に告げた人物だった。
「国防委員会としては、真に功績ある人物こそが賞されるべきであり、他者の功を剽窃するような軍人を高く評することはできないのですよ、准将」
年齢の頃はまだ少壮と言って良い、若手の国防委員だった。洗練された物腰と容姿、水際だった弁舌で、国防委員の中でも出世頭と言われ、未来の国防委員長、さらには最高評議会議長の座も確実視される人物であることを、ビョルケルも熟知していた。その相手から、『国防委員会としてはやはり〝エル・ファシルの英雄〟を無視はできないのですよ』などと正面切って伝えられれば、ヤンを見る目が冷静でいられようはずもない。
「国防委員会としては、今回の戦勝にヤン中佐の功が預かって力があったと評価せざるを得ず、ゆえに彼をこのまま第八艦隊付きにしておくわけにもいかないというのが大半の意見なのです。近い内に、次期作戦の立案部門への招聘を軍に勧告する予定です」
まるでヤンの功績を奪おうとしたのがお前だというのは分かっ

ているぞ、と言わんばかりの言葉は、いちいちビョルケルの胸に深く突き刺さった。その若手委員が何を意図して、そのような話をするのか、まったく気が回らなかったとしても当然のことだった。

いずれにしても、ビョルケルにはヤンを毛嫌いする『正当な』理由ができたわけである。これを言い換えると、今後、ヤンの意見だけはアップルトン中将に採用させてはならないということになる。

それこそが、まさに件（くだん）の若手国防委員の意図であろうなどとは、ビョルケルの完全な視野の外だった。その意図が、『これ以上、エル・ファシルの英雄に功績を立ててもらったのでは、軍部の発言権が強くなりすぎる。自由に手腕が振るえないように、あるいは早々に戦死してくれるように手を打っておくにしくはない…』であるなどと。

「眠っていても、何もかもお見通しというわけだな、中佐」

「いえ、そう言うわけでは…」

ヤンの方はビョルケルが彼に悪意を抱く理由が分からない。分からないが、准将が彼に悪意を抱いているという事実だけは認識できる。戦場で上官に悪意をもたれると、生存の確率は著しく下がるということも。

だが、だからといってへりくだって上官のご機嫌を取り結ぼうという発想がないのもヤンのヤンたる所以だった。何しろ、そうやって自分が『上官に殺される』可能性を下げたとしても、今度は逆に敵によって『上官ごと皆殺しにされる』可能性が跳ね上がってしまうのだから。

「ええと、基地をただちに攻撃するのはやはりいささか拙策だと思います。ヴァンフリート七だと我々の行動も大きく制約されますし、ヴァンフリートの恒星表面爆発も近いですから」

「賛成だ。私も同じ意見だ」

アーバークロンビー少佐が殊更に大きく頷いたのは、あるいはビョルケル准将への当てつけだったのかも知れない。アーバークロンビーを見るビョルケルの目が見る見る険しくなった。

「だが、帝国軍がヴァンフリートの磁気嵐の中での行動力を確保しているのは確実だ。貴官の策は消極というだけなく、敵に脱出の機会まで与えるという意味で利敵行為に類するものだ」

「脱出できないように小型の機雷で封鎖したらどうでしょうか」

ヤンの提案はビョルケルの虚を衝いた。

「ヴァンフリート七の外惑星環は厚さが数百キロもありますし、漂っているのは直径数メートルから数百メートルの岩や氷が大半です。その中に核融合機雷を一〇〇万個ほどばらまけば、電子的な探知手段を使えない状態では識別はほとんど不可能です。無理に逃げ出せば船ごと全滅ですし、機雷で封鎖されたと知れば脱出できないでしょう」

「…」

「いかがでしょうか」

完全に意表を衝かれたらしく、大量の酢でも呑まされたような表情で沈黙したビョルケルと、こちらは呆気にとられた表情のアップルトン。そして『なるほど、なるほど』と何度も繰り返しながら頷き続けるアーバークロンビー少佐やキャベンディッシュ少佐に、ヤンは順々に視線を回していって、答えを待った。

「――…しかし、しかし…それでは磁気嵐明けに我が方も行動が不自由になる」

「外惑星環の外側に待機し、探知網、あるいは駆逐艦でいいと思いますが、網を密に張って待ち伏せしていればいいのです。あとは戦艦で威嚇砲撃して、降伏勧告でことは済むと思いますが」

「良かろう」

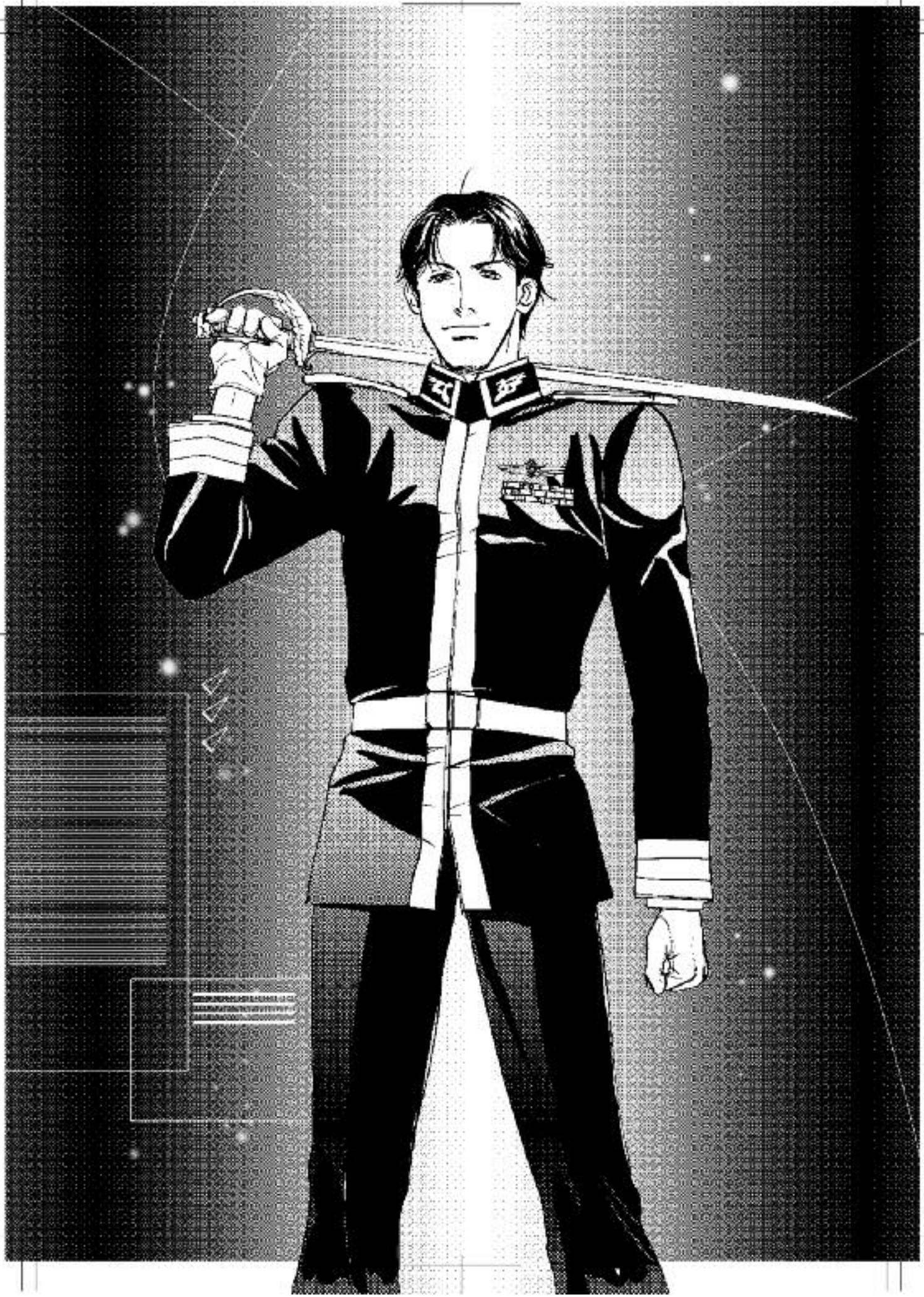
「お待ち下さい、司令官閣下‼」
「准将、私にはヤン中佐の策が最善の策だと思えるのだが、異論があるのかね」
「き、机上の空論です。うまく行くはずがありません‼」
「では、君の作戦を提案し給え‼」
さすがにアップルトンの声音が険しさを増した。
「ヤン中佐の作戦が机上の空論というなら、その机上の空論よりも完成度の高い対案を示すのが、作戦会議における反論の原則だろう。他者の意見を貶し、否定するだけで何らかの仕事をしたつもりになるのは、作戦者としてあるまじき行為ではないかね、准将」
「そ…それは…」
「では、ヤン中佐の策を採用する。異論はないな？」
「し…しかし」
『クリシュナ』の艦橋からの緊急連絡が飛び込んできたのは、アップルトン中将がまさに断を下そうとしたその瞬間だった。
『閣下、第三分艦隊からの緊急電です』
「読め」
『は、我突入す。目標、ヴァンフリート七・外惑星環、敵基地想定位置。指示なく時を過ごし、敵に準備の猶予を与えるは宋襄の仁たり…と』
「突入したか！」
立ち上がったのはビョルケル准将だった。
「さすがはアドロフ少将だ。見敵必殺とは彼のような指揮官を指して言うのだな…さすがだ」
「待て、指示なく時を過ごし…とはどういうことだ。アドロフはいつ基地を発見したのだ？」
『情報がありません。折り返し、確認致しますか？』
「うむ…」
考え込み、アップルトンは諦めたように首を振った。
「その情報を得ても、何も得るところはない」
「では、総攻撃をお認めになるわけですな‼」
喜々としてとしか評しようのない表情の参謀長に、明らかにアップルトンは嫌忌の視線を向けたようだった。
「ホィットニー(第五分艦隊司令官)にアドロフの後詰めに入るよう指示致します。宜しいですね」
「…いいだろう。指示し給え。ただし、くれぐれもホィットニーには釘を刺しておき給え。あくまでアドロフ少将の後詰め位置を守り、前線と本隊の通信を密にするよう情報の中継に徹せよ、とな。艦橋に戻るぞ。我々も戦場に急がねばならん」
了解であります…叫ぶように応じ、ビョルケル准将が一同の先頭に立った。ちらと振り返り、ヤンに向けた目の中が勝ち誇ったようにチラチラと光って見えたのは、ヤンの錯覚ではなさそうだった。
黒いベレーを取り、収まりの悪い髪をヤンはぐるぐるとかき回した。
「やれやれ…厄介なことになってきた」
それがどれほど正確に未来を予見した言葉だったか、この時のヤンにはまだ察しようもなかったが。
ヴァンフリートを巡る同盟と帝国の第二回戦、互いの存在を知らぬまま、ヤンとラインハルトのセカンド・ラウンドがこうして始まった。

表面に無数の色彩の帯を纏い付けた巨大な瑪瑙の球体のような天体目がけて、おびただしい数の軌跡が噴き伸びる。閃光が煌め

き、数万もの光の帯となって中空を一気に切り裂いた。
ヴィクター・アドロフ同盟軍少将麾下の第八艦隊第三分艦隊の兵力は一五〇〇隻、保有する火砲の総数は優に二万を超え、これらがほぼ同時に火蓋を切ったとき、宇宙を支配する暗黒は光に席を譲り渡したかに見えるほどだった。
リーフェンシュタール准将指揮するヴァンフリート七‐四基地の内、仮設されただけの第一防禦ラインは、過大なまでに集中されたエネルギーの奔流を防ぎ止めることはできず、一瞬の抵抗を示しただけで潰え去った。第二線のエネルギー中和磁場のラインもまた、薄紙が灼熱した鉄の棒に突き破られるように半瞬の抵抗も示せずに崩れ去り、同盟軍の放った火力の壁は、ほとんど減殺されることなく基地の最終防衛ラインに押し寄せた。
「強大なエネルギー、来ます。今っ‼」
電子戦士官の叫びと、どちらが先立ったか判じがたいが、彼の声がまだ余韻を消し切らぬ内に基地全体がびりびりと脈動した。直径八〇キロ、小振りな衛星であるヴァンフリート七‐四を盾にする形で建造された基地を、虹色の閃光が球形に取り囲み、解放された膨大なエネルギーが物理的な振動となって基地を揺すぶり上げたのだ。
「第一波通過。第二波、第三波来ます。ミサイル群、全方向から来ます」
「中和磁場はどうだ。持ちそうか？」
「現在の負荷、一〇五パーセントです。何とか…ただ、これ以上、敵の数が増えると怪しくなってきます」
「もう既に十分怪しいな」
負荷率一〇五パーセント。安全係数には余裕を見た設計だが、それにしたところで一五〇パーセントまで行けば確実に過負荷に陥る。言葉で遊んでも無駄なので言い換えれば、その時点でエネルギー中和磁場は崩壊し、同盟軍艦隊の砲火が生の形で基地の構築物を掃射することになる。どんなに分厚い装甲を施そうが、重粒子ビーム、あるいは光学ビームの孕むエネルギー量、あるいは極度の加速を伴った磁力砲弾の運動と質量のエネルギーに耐えられる人工構造物は存在しない。中和磁場が突破されれば、その時点でダス・エンテ（ジ・エンド）である。
が、ヴィンフリートにはまだ成算がある。この基地の配置を決めたのは彼自身ではない。だが、周囲に障碍物となる宇宙塵や氷の類を無数に掻き集めたのは彼自身であるし、またただそれらを掻き集めて配置したというだけではないのだ。
「今の内だ、作動させろ」
「了解」
ヴィンフリートの命に従って、複数の命令がコンソール群の間を走っていく。
待つほどもなく、その分厚さで知られるヴァンフリート七の外惑星環が奇妙な動きを示し始めた。無秩序に漂っているかに見えた無数の岩塊や氷塊が、まるで意志あるもののように動きだし、基地と同盟軍艦隊の間を埋め始めたのだ。
「帝国軍の奴ら、何をするつもりだ？」
旗艦『ペレスウェート』艦上のアドロフ少将は、無論、この異様な動きに気付いていた。
「あれらの塵を集めて我が方の砲撃に対して盾とするつもりでしょう」
ルイシコフ参謀長の表情が危惧に曇る。分艦隊の全火力を叩きつければ、急造の基地ごとき、一撃で抜けると信じていたのだが、どうやら甘すぎたようだ。第五分艦隊の来着、あるいは本隊の到着を待って、より優勢な火力をもってかかるべきだったかも知れない。

「いや、それはない」
アドロフは参謀長の意見に同意を示さなかった。
「多分、人工重力の発生器を使って動かしているんだろうが、集められるのにも限りがあるし、第一、こちらの連続砲撃に間に合うように動かせるほどのスピードも出まい。砲撃を続行する」
「分かりました。砲撃の効果を上げるために、今少し接近してはいかがでしょうか」
「いいだろう。間合いに気をつけるのだ。うかつに外惑星環の中に踏み込めば、数が多いからと言って有利にはならん。あくまでスタンド・オフ攻撃に留意しろ」
同盟軍艦隊が砲撃を再開する。外惑星環の最外縁部まで距離を詰めたことで、発射から着弾までが早く、かつ打撃も大きくなっているようだった。岩塊や氷塊の動きは速くなってはいるものの、砲撃によって穿ち抜かれた痕が埋められるまでの間合いが次第に延び始め、時に基地の構造物が明瞭な輪郭を以て同盟軍艦隊の探知網に捉えられる瞬間まで出てきた。
レーザー水爆ミサイルの照準精度が上がり、時に基地の至近で華々しい純白の火球が閃く。実際にはそんなことはないのだが、基地が爆発に煽られたように上下左右に揺れ動いて見えるほどだ。
「いいぞ、続けて撃て。帝国軍の奴ら、手も足もでないぞ。このまま、一気に薙ぎ払ってしまえ!!」
再び万余を数える火線が突っ走り、解放された膨大なエネルギーが目に見えぬ渦となってヴァンフリート七の外惑星環をかき乱す。希まれに、外惑星環を突破したエネルギーの奔流が惑星表面に突き刺さり、誘発された核融合爆発の焔が光の帯となってヴァンフリート七の表層を縦横に切り裂く。帯状に吹き上がった禍々しい焔の壁をまといつけながら、ヴァンフリート七は理不尽極まる人為の暴力に抗議するかのように身をよじらせ、軋ませて咆吼するかのように見えた。
「まだか、まだ、敵の中和磁場は突破できないか?」
「まだ、確認できません。砲撃を継続しますか?」
「無論だ」
言い差し、アドロフは僅かの時間、躊躇に言葉を途切れさせた。
「中佐。偵察部隊を編成しろ」
「敵基地の偵察ですか」
「そうだ。いずれ、奴らは反撃の手段を持たない。これだけ叩けば、よしんば対空砲座を周囲に張り巡らせていたとしても、すべてなぎ払えたはずだ。外部センサーにしても、閉鎖しておかなければすべて焼き切れている。至近距離から偵察させ、弱点を探させる。場合により、強襲揚陸艦を突っ込ませてもよかろう」
「了解です」
更に三〇分間の斉射の後、一時的に砲撃を中断せよ…『ペレスウェート』からの命令が同盟軍分艦隊全艦に達したのは、その数分後のことだった。
「さすがにきついな、制式艦隊の連続斉射は…」
一方、ヴァンフリート七-四基地。
凄まじい連続砲撃によるエネルギーの乱流と、全方向から襲いかかってくるレーザー水爆ミサイルの大群を前にさしものヴィンフリートの顔面からも血の気が薄かった。ビーム砲撃には中和磁場で耐え、ミサイルには基地の近接対空火力と囮(デコイ)で対抗する。ビーム砲撃は面も向けられぬほどの激しさで叩きのめされるような圧力を感じるが、これは基地の中和磁場装置との出力勝負であるから、基地司令官としてはある意味、打つ手はない。戦艦艦長

なら操艦で何とかすると言うこともあるが、残念ながら基地は動けない。
厄介なのはレーザー水爆ミサイルの方だった。人工知能を装備し、予測不可能な回避運動を取りながらも的確に基地の中枢を狙ってくるミサイルは、撃ち漏らせば一発で致命傷を与えられかねない危険性がある。救いがあるとすれば、余りに密度の高いビーム砲撃のために、ミサイルが選択できるコースが限定され、結果的には迎撃を容易にしていることだった。
とは言え、このまま一方的に撃ちまくられている間に、同盟軍艦隊に至近距離…外惑星環の中にまで踏み込まれると危険性は飛躍的に増す。自分なら、宙雷艇（トルペット・ブート）か砲艦を複数方向から侵入させて、隙を見て基地の懐に飛び込ませ、一気に致命の一撃を与える…標準レベルの前線の指揮官なら、時間の差異こそあれ、いずれその手段に気付く。問題はいつ気付くか…そして、彼らが気付いたことを自分が察し得るかどうか、だ。もし彼らが既にその策を採っているか、さもなくとも自分が敵の動きを見逃して、至近に刺客を迎え入れてしまっていれば、その時は…
———コルネリアに会うこともできないな。さて、まだプロポーズもしていないのに、それだけは心残りだ。
いささか戦場にはそぐわない感想だったかも知れないが、本音だった。会ったときにコルネリアが見せる手放しの笑顔。あの笑顔を見るためだけにでも、生きて戦場から還らなければならないし、そんな誰かを、この基地にいる誰もがもっているはずなのだから。
コルネリアに再会するためにこそ、知嚢を絞り尽くしてでも生き延びる…戦い死ぬことに最高の価値観を置く生粋の軍人（せんそうばか）どもには『女々しい』と罵られようし、ろくに戦場に出ても来ない大貴族、大貴族と連んで戦争景気に沸き立っている一部の奴らには『要領の悪い生き方』だと嘲笑を買おう。ヴィンフリートにとって叛徒…同盟…との戦いの最前線に自らの生命を賭けることは、自らの存在に意義を見いだすための唯一の方法だったし、コルネリア・ゲルトルーデこそ、そういった自分に価値を見いだしてくれるただ一人の存在であると信じていた。自らのために戦場へ赴き、彼女のために生きて戻る…見ようによっては悲愴極まる、さらに見方を変えれば滑稽の極致かも知れない生き方を、自分が確かに楽しんでいる。ヴィンフリートはそう信じていた。
その時———
「閣下———!!」
クルツバッハが注意を促す。
「砲撃密度…下がります」
電子戦士官からの報告がそれに続いた。
「チャンスかな？」
「かも知れませんな。違ったとしても、奴らが砲撃を再開したら、チャンスはない」
「了解だ。では、やるとするか…磁力砲（レール・キャノン）、斉射準備、いいか？」
「準備よろし」
「宜候（ようそろ）」
「いつでも撃てます。撃たせてください」
ヴィンフリートの叫びに、複数の叫びが応じた。
「砲撃稼働率、どうだ？」
「八八パーセント、修復中五パーセント。待ちますか？」
「いや、待たない」



指揮シートのベルトを外し、クルツバッハの目顔での制止を振り切ったヴィンフリートは、身軽に予備のコンソールの上に飛び上がる。いつの間に抜いたのか、右手には海賊の頭目さながらに抜き身のサーベルが握られていた。ただし、刃は落としているので斬りつけても切れない模擬刀だったが。

「では行くぞ、野郎ども、発射準備だ‼」

右手のサーベルを大きく振り上げ、半瞬だけ止めたそれをヴィンフリートは思いきり振り下ろした。

「撃(はなて)ぇいっ‼」

同盟軍の電子戦士官達がレーダーのスクリーン上に見いだしたものは、スクリーンの全象限に浮かび上がった輝点の群れだった。輝点は、針の先ほどの大きさから、感覚による理解を拒否する速度で膨れあがり、一瞬にして大型のベアリング・ボールを思わせる大きさに拡大してスクリーン全面を真っ白に埋め尽くしたのだ。

その意味が漸く具体的な事象となって理解の映像を結んだ瞬間、電子戦士官たちは全身を氷塊に包まれる恐怖に凍り付いた。

「レ…レール・キャノンだ…磁力砲弾…無数、急速に接近中。回避、回避…回避できないっ‼」

悲鳴を轟音が覆い尽くした。

信じられない数の磁力砲弾。この時、ヴァンフリート七‐四基地が発射した磁力砲弾の数を、ある記録は一〇万発以上としているが、俄には信じがたい。基地が装備していた磁力砲の数は多くとも五〇〇門を超えず、仮に一〇万発を発射したとすれば一門当たり二〇〇発を連続発射したことになる。カタログ上の発射速度は、その程度の射撃を可能にするかに見えるが、実際には発射装置に配置できる砲弾の数や加速装置の冷却の問題があり、実用的にはその半数、それもその速度で連射すれば砲そのものが二度と使い物にならないほどに損耗してしまうのを覚悟の上でのことである。

だが、半数の五万発が発射されたとしても恐るべき数字だった。同盟軍艦隊は一五〇〇隻。一隻当たり三〇発以上の巨大な砲弾が襲いかかったことになる。広闊な宇宙空間での会戦ならともかく、この時の同盟軍艦隊は砲撃の効果を上げるために艦列を詰め、密集隊形をとっていた。前後上下左右の至近距離に僚艦を控えた同盟軍艦隊にとって、超高速で飛来する無数の砲弾を無傷で回避することなど夢物語に過ぎなかった。

第三分艦隊の右翼部隊は瞬時に連鎖する火球に押し包まれ、より巨大な焔の渦を形作った。ある戦艦は同時に一四発の砲弾に貫かれ、ある巡航艦は艦首から艦尾までまんべんなく八発の磁力砲弾の洗礼を浴びた。奇跡に恵まれて磁力砲弾を回避しきった艦も、最後まで幸運に恵まれきることは不可能だった。砲弾を避けられても、焔に包まれ、あるいは痛烈な打撃で操艦の自由を失った僚艦すべてを回避し抜くことは絶対に不可能だった。

瞬時に連鎖する爆発が、二重三重、時には五つも六つもの光の環を重なり合わせ、輻奏する火球の中となって舞い散っていく。

僅少のタイムラグを置いて、アドロフ艦隊の中央部隊、および左翼部隊にも、右翼の友軍を襲ったのと同じ破局が襲いかかった。

「な…なんだ、なんだこれは…‼」

「こ…これは…これは…艦隊が…艦隊が…全滅したっ‼」

アドロフ少将が辛うじて破滅を免れ、戦場を離脱できたのは、彼らが旗艦を艦隊の最後方に配し、磁力砲弾の大群を回避できるだけの間合いと、僚艦からの距離を確保していたからにほかならない。

だが、メインスクリーンが映し出す戦場の様は、彼らをして言葉を奪うに十分だった。
ほんの数分前まで、完勝の確信も固く、猛り狂う斉射を浴びせていた同盟軍艦隊は、そのほとんどが焔の顎（あぎと）の中にくわえ込まれ、膨れあがる光の渦の中に呑み込まれてしまっていたのである。
一〇月二九日午前一時一一分、同盟軍第八艦隊第三分艦隊司令官アドロフ少将は敗北を認め、戦場から離脱する。いや、正確には恐怖に駆られるままに命からがら戦場を脱出した、というのがより正確な表現だろう。この戦いで、第三分艦隊は四〇〇隻以上の艦艇を完全喪失、損傷艦艇まで合わせれば、組織的戦闘力は完全に破壊されたと言ってもよいほどの損害を被ったのである。
アップルトン中将の命で戦場へ急行していたホイットニー少将の第五分艦隊は、途上敗残の友軍艦隊に遭遇し、その多くを収容したが、ヴァンフリート七‐四基地への攻撃を再開するだけの決断力はなかった。ホイットニー少将は半日あまりをヴァンフリート七周辺に留まり、敗走する友軍の収容に努めた後、同宙域を脱出した。
「第三分艦隊司令官は健在なるも、同分艦隊は壊滅の模様。ヴァンフリート七‐四に構築せられる敵基地は、我が艦隊の来攻を迎撃すべく、恐るべき規模の防御施設を有するがごとし」
ホイットニー少将からアップルトン中将へ宛てられた連絡は、さながら悲鳴を思わせるそれだった。

☆☆☆

『敵基地への総攻撃失敗。第三分艦隊は壊滅的打撃を被り、ヴァンフリート七‐四宙域から敗退』
通信文を一瞥するなり、アップルトン中将は大きく一つ唸ってから沈黙に陥り、ビョルケル参謀長は食い入らんばかりに通信プレートを凝視していた。
敵がどのような手段を採ってきたのか、もう少し詳しい情報を送るようにホイットニー少将に返信するよう具申しようとして、ヤンは発言を求めかけた。
「ただちにホイットニー少将に命令し、敵基地への攻撃を再興させましょう。同時に、第八艦隊の全兵力を上げて総攻撃を」
ビョルケル准将の発言に、アップルトン中将は顔をしかめた。
「ホイットニーが、アドロフ同様に壊滅的な損害を受けたらどうするのだ。我々が到着するまでヴァンフリート七宙域が空になるぞ」
「今でもヴァンフリート七宙域は空に近いのです。このままではむざむざ敵を取り逃がしてしまいます。それにアドロフ少将の艦隊も、完全に失われた艦艇は三割に達していないし、アドロフ少将も健在です。残存部隊を再編し、ホイットニー少将の指揮下に入れれば兵力的な問題は解消するはずです」
思いもかけない大敗北に狼狽える余りに冷静な判断力を失っているらしい…機先を制せられて発言の機会を失してしまったヤンは、肩を竦める思いだった。
――じゃあ、どうすべきかな…？
やたらに熱ばかり高くて大して意味のない言葉の応酬はビョルケル准将たちに任せて、ヤンは状況を整理してみようとした。
――もう少し詳しい情報が欲しいところだな。これじゃ、何が起こったのか分からない。
ホイットニー少将からの報告は、第八艦隊司令部にとって青天の霹靂以外の何ものでもなかった。四〇〇隻余りの完全喪失を含め、第三分艦隊の損害は優に戦力の四割を超える。事実上の全滅だった。

ヤンに知らされているのはそれだけであり、肝心の情報が抜けている。たかの知れた前進基地であるはずのヴァンフリート七‐四基地がどのようにして第三分艦隊の攻撃を退けたのか。よほど狼狽しているのか、ホイットニー少将は報告の中で『アドロフ分艦隊、壊滅』を連呼しているだけなのだ。

だから、ちゃんとした情報をよこせ、と言いたかったのだが、アップルトン中将以下の艦隊司令部の視界を占めているのは、前線部隊の悲鳴が引き起こす幻影であるらしかった。ヴァンフリート七‐四の帝国軍基地が、実は難攻不落の要塞なのではないか、という。一五〇〇隻の戦闘艦隊が、ただ一度の戦闘で壊滅的打撃を被ったのである。第八艦隊司令部の想像も、あながち根拠のない幻想とも言い難い。

だが――と、ヤンは思う。少なくともヴァンフリートは同盟領の一つに数えられる星系であり、イゼルローン要塞からでも同盟領内数日の航行を要求されるだけの宙点に位置している。そんなポイントに、いわゆる難攻不落などという形容詞を冠するに足りるだけの基地を、それも秘密裏に建設可能だろうか。

ふと気付いて、ヤンは飲みかけの紙コップを取り上げてみた。紙コップを傾けると、底の方に四分の一ばかり残った液体は、細やかな褐色の小波を紙コップの縁に達するくらいの高さまで這い上らせ、その一方で、上になった側では紙コップの底が半分近く露出する。

「何をやっておるのだ、ヤン中佐‼」

遊んでいる、とでも見られたのか、ビョルケル准将が露骨極まる不機嫌な口調でくるんだ叱声を投げつけてきた。

「我が艦隊は、これより最大戦速で戦場へ向かう。準備にかかり給え」

「はあ…しかし、その前に、ホイットニー少将に命令を出されてはいかがですか？」

前回と異なってビョルケルがやたらに高圧的な理由の見当もつかなかったが、ヤンとしては与えられた発言の機会…ビョルケル准将としては発言させるつもりはなかったかも知れないが…を見逃すつもりはなかった。

「その必要はない。すでにホイットニー少将には敵基地への再攻撃を発令した。我々もホイットニー分艦隊に呼応する形でヴァンフリート七‐四へ向かう」

「ええと、申し上げたいのは、敵の採った戦術…つまり、敵が第三分艦隊を撃破したやり方をもう少し具体的に調査し、報告…」

「議論の時間は終わったのだ、中佐」

ビョルケルはヤンに意見を言わせるつもりは全くないようだった。

「今は行動が求められている！」

「ですが…」

「抗命するか‼」

――こりゃ、ダメだな。

一瞬、ヤンはアップルトン中将に視線を走らせたが、中将もまた、すでに意識は戦場へ飛んでいるようだった。ここで強いて意見具申をしようとしても、ビョルケル参謀長の剣幕ではその瞬間に憲兵（MP）を呼んでヤンを逮捕させかねない。別に軍法会議を恐れるつもりもないが、身柄を拘束されたのでは万が一の時に自分自身を救うことすらできなくなるのは困る。

いずれにしても一介の参謀中佐ではできることとできないことがある。ここはできる範囲で、予想される最悪の事態を回避できるように手を打っておくべきだった。

「了解しました。では、部署に戻ります」

そう考えて、ヤンは妥協することにした。

ヤンの、上手くもない敬礼にビョルケル参謀長は満足げに答礼を返し、顎をしゃくった。
「参ったな…」
聞こえぬように小さく呟き、ヤンもまた艦橋へ向かう。
敵基地はその攻防両面の余力を、短期間に一気に費消し尽くすことで、第八艦隊の攻勢を一時的にでも挫折させようとしているのだ。そのための余力を与えたのは、三ヶ月前、ヤンが張り巡らせた罠から見事にすり抜けていった数隻の巡航艦部隊に違いない。
問題は、その余力とやらがどの程度持続するか、だった。第三分艦隊を壊滅させた今回の一撃ですべてなのか、それともう一撃、あるいは二撃分程度の力を残しているのかどうか。もし、まだ余力があるとするなら、ホイットニー分艦隊による攻撃再開は拙速というべきだった。
と言うか、ビョルケル准将の作戦はすでに論理的な矛盾を来している…そう思わざるを得ないヤンだった。ヴァンフリート七‐四宙域の敵基地にイゼルローン要塞に匹敵する鉄壁の宇宙要塞の幻影を見る一方で、第三分艦隊と大して変わらない兵力しか持たないホイットニー少将に、艦隊主力の到着も待たずに総攻撃を命じる。敵の意外な手強さに恐慌に陥っているのに、用兵者としては攻撃一点張りの教条から離れられないのだ。
三ヶ月前のフルマンティ少将の不手際、今回のアドロフ分艦隊の大損害と、第八艦隊司令部としては上級司令部の不興を買うに十分な失策を重ねている。この上、目の前の敵を取り逃がすなどという失態を重ねれば、アップルトン中将は無論のこと、参謀長としてもその席が危うくなろうというものだ…とまでは、さすがにヤンは思い至らない。ただ、ビョルケル准将以下が妙に浮き足立っているのは彼の目から見ても確かだった。何しろ、あと一週間もしない内に、恒星ヴァンフリートが再び恒星表面爆発を起こす。ヴァンフリート星系は、濃霧のかかった山間部さながらに視界の利かない戦場に変わるのだ。一つ間違えば、一個や二個の分艦隊の損失でことはすまなくなる。それだけは避けたいところだった。
艦橋の自席に戻り、一時間近く作戦用のコンソールを見つめたまま沈思に陥った後、ヤンが至ったのは、ヴァンフリート七‐四基地のリーフェンシュタール准将と同じ結論だった。
つまり、次の恒星表面爆発の時期に合わせて、帝国軍は基地の撤収を行う。だからこそ、基地の帝国軍は後顧の憂いなく手持ちの全兵器をフル回転させているのだ…と。
では、帝国軍の脱出作戦はいつ行われるのか…
ヤンは背筋を伸ばし、ゆっくりと視線を巡らして艦隊司令部の幕僚たちの姿を確認する。戦場を前にして、『クリシュナ』の艦橋は活気に溢れていた。ビョルケル准将を初めとする艦隊幕僚たちも、ある者は夢中になってコンソールに向かい、ある者は作戦会議室でのミーティング中らしく席に姿がなかった。ビョルケル准将も、次々に入ってくる連絡や作戦計画の処理に忙殺され、ヤンの行動に目を光らせている余裕はなさそうだった。
「やれやれ…」
もう一度小さく呟き、収まりの悪い髪をかき回しながら、ヤンは作戦検討用のコンソールを起動した。

自由への戦い

旗艦『クリシュナ』の発した指令が第五分艦隊旗艦『ラクシュミー』に達したのが一一月一日。
五日後には恒星ヴァンフリートの表面爆発が予測される時点での総攻撃再興という指示は、ホイットニー少将以下の分艦隊司令部を困惑させたが、命令とあれば行動に出る以外の選択肢はない。
『第三分艦隊の残存兵力を整理し、指揮下に編入の上、攻勢へ参加せしめよ。敵基地の能力は当初予測よりも相当以上に強化されていると見られる。最大兵力による一斉攻撃に留意せよ』
「司令部は分かってものを言っているのか？」
命令書を前に、ホイットニー少将は神経質そうに頬を震わせた。
「何が第三分艦隊の残存兵力を整理し、指揮下に編入しろだ。そんなことをこんな短期間にやってのけられるとでも本気で考えているのか、司令部は⁉」
ホイットニー少将の言葉は、彼らの置かれた状況を正確に示すものだった。兵力の四割以上を喪った第三分艦隊は、まず指揮系統が滅茶苦茶になっている。かつ、壊滅的打撃を被った部隊の常として、士気が底を打つほどに墜ちてしまっている。こういった部隊を再編し、一度は大敗北した戦場へ連れて行くことなど、そんなに簡単にできることではないのだ。
さらに、第三分艦隊を指揮していたアドロフ少将以下が健在なことも話をややこしくしていた。『クリシュナ』からの指示は、第三分艦隊の残存兵力を第五分艦隊の指揮下に入れよと言う。しかし、アドロフ少将は、同盟軍の序列ではホイットニー少将よりも先任で、本来なら上級の指揮官なのである。
アドロフ少将に『敗軍の将は兵を語らずというからな』と指揮権をホイットニー少将へ引き渡す度量があればこそ、いみじくもヤンが看破したように、この時期の同盟軍の高級指揮官の思考は、戦闘の勝利よりも自らの栄達と同僚への嫉視を優先させる方向へ傾斜しがちだった。そして、アドロフもホイットニーも、極少数の例外ではなかったのである。
「先の戦いでの雪辱を果たす機会は当艦隊にまず与えられるべきであり、先任序列から言っても小官が再戦の指揮を執るのが至当である」
『ペレスウェート』(アドロフ少将旗艦)からの強硬な意見具申がまず『クリシュナ』に飛び、対するに『ラクシュミー』からも反論が跳ね返った。
「司令部は命令、撤回、混乱の謂を玩味されたし」
混乱が混乱を招き、アップルトン中将の裁定で、第三分艦隊は艦隊の再編のためにヴァンフリート星系から後退、ヴァンフリート七‐四基地への攻囲は第五分艦隊のみで行うと定まったのはその二日後、一一月三日になってからだった。

同じく一一月三日。
「全艦艇、所定の位置に入りました…」
ジークフリード・キルヒアイス大尉からの報告を、ラインハルトはヴァンフリート八の外惑星環に身を潜めた『ノルデンⅦ』の艦橋で聞いた。
「リーフェンシュタール准将から通信を受領しました。宛先はイゼルローン要塞司令部。敵第八艦隊とおぼしき制式艦隊の包囲攻撃を受けている、とのことです」

通信文を一読し、ラインハルトは会心の笑顔になる。
「やるじゃないか、リーフェンシュタール准将」
「ええ」
「一回目が先月二八日…叛徒どもの損害がこの半分だとしても…そろそろ二回目か」
一回目は総攻撃とは言え、一〇〇〇隻規模。おそらくは分艦隊による攻撃だろう。一部の兵力を出して敗れた以上、兵力の逐次投入を避ける意味からも次は艦隊主力が出てくると読むのがセオリーだった。
「用意はどうだ？」
ラインハルトの問いにキルヒアイスは軽く顎を引いて肯定を示した。
「射角と発射加速度の調整に入っています。あと三時間と言っています」
「上出来だ。準備完了と同時に作戦を始める。手空きの者は今の内に休むように伝えてくれ」
敬礼し、キルヒアイスは踵を返した。
艦内通路を行くキルヒアイスに、すれ違う兵たちが姿勢を改めて敬礼する。いずれも半年余り前に彼らが着任したときとは較べものにならぬほど身体の動きがよく、表情も明るい。ラインハルトの麾下で戦い勝ち、生き延び続けた自信のしからしむるところだった。
「…どうです？」
キルヒアイスが声をかけたのは、『ノルデンⅦ』の主砲管制室。
「何とか目処は立った。三時間は…かからないと思う。他の艦も概ね状況は同じだと聞いているよ」
『ノルデンⅦ』砲術長のシェーラー大尉が急造のコンソールから顔を上げた。傍らで同じく主砲砲術士のマイヤー曹長が、床にむき出しに配線されたファイバー・ケーブルにモニタをつなぎ、接続を確認している。
「しかし、幾ら最接近しているとは言っても、届くのは三日くらいあとになるが…攻撃として意味があるのかな」
「あるに決まってるでしょうが、大尉」
不意にマイヤーが顔を上げる。禿頭に顎髭を伸ばした、軍服よりも海賊の髑髏（トーテンスコップ）マーク（マルク）の似合いそうな巨漢だが、悪人面に浮かべた笑いはラインハルトへの絶対の信頼を示していた。
「なければ、ミューゼル艦長がこんなことをさせるわけがありゃあせんです」
「すっかりミューゼル大佐のファンだな、曹長？」
「俺たち兵隊（ヘータイ）には上官ってのは二種類しかないんです」
「良い上官か、悪い上官か？」
「違いまさぁね」
ヘータイを生き延びさせてくれる上官と、ヘータイをやたらに殺す上官です…直属の上官を前にマイヤーは平然として言い切る。
「ミューゼル艦長は俺たちを生き延びさせてくれましたからね。何度も。この間みたいに絶対に危（やべ）ぇ戦場からだって、連れて帰ってくれました。だから、これは贔屓にしないわけにはいかねぇってそういうことです」
「そういう貴様も下士官だろうが。贔屓されるような上官なのか？」
「そうありたいって努力してるところです…とでも言っときましょう」
呵々と表現したいような笑い声を立て、マイヤーは作業に戻った。
「二時間以内に艦橋に戻っています。準備完了し次第、連絡をお

願いします、大尉」
「了解…あ、キルヒアイス大尉、ちょっと宜しいか？」
　何事…？ と首をかしげるキルヒアイスに、シェーラーは声を潜めた。
「こんなことを言うべきかどうか、分からんのだが…」
「ミューゼル大佐のこと…ですか？」
「ああ――――」
　シェーラーはちょっと考え込んだ。
「マイヤーが言う通りだ。何か、こう…ミューゼル大佐には、これまで会ったどんな上官とも違う何かを感じるんだが…」
　口にする言葉がなかなか見つからない。そんな感じに、ゆっくりとシェーラーは言った。
「はっきり言って…そうだ、恐いんだよ」
「恐い？ ミューゼル大佐が、ですか？」
「そうだ」
「失礼ですが、ミューゼル大佐はこれまで暴君であったことはありませんし、これからもないでしょう。それに無能でもないことは、大尉もよくご存じだと思っていましたが」
　ことと次第によっては許さない――――キルヒアイスのそんな気分を表情に見て取ったのかも知れない。シェーラーは苦笑し、否定する。『そう言う意味で恐いのではない』
「――――では？」
「ミューゼル大佐には有能無能なんていう言葉を飛び越えて、我々をどこかへ、そうだな全然知らない土地、というか世界か…そんなところへ連れて行ってしまうような、それでもって我々はそれに惹かれてついていかずにはいられなくなるような…まあ、言ってみれば、そんな感じだ」
　キルヒアイスは胸の間がすっと冷たくなるのを感じた。丁度、服の合わせ目から真冬の風が入り込んできたかのような、あるいは研ぎ澄まされた白刃が防具をかいくぐって胸元へ差し付けられた時のような。
　シェーラーは問いたいのだ。ラインハルト・フォン・ミューゼルとは何者なのだ。我々をどこへ連れて行こうとしているのだ。それはどんな世界なのだ…と。
　それはゴールデンバウム王朝…特定の個人の血筋だけが権力を独占し、他者を一方的に虐げ得ることを制度化した社会…が消滅した世界。そしてまた、一五〇年以上も続く、自由惑星同盟との戦いもまた終焉を迎え、意味のない戦いに一生を駆り出され続けることのない世界。自由な回答が許されるなら、キルヒアイスはそう答えていたに違いない。
　だが、その回答を今、ここで口にする自由こそが存在しないのだ。
「…何をお聞きになりたいのですか、シェーラー大尉。ミューゼル大佐について言えば、小官の幼なじみです」
　感じの良い微笑…キルヒアイスを描写するときの決まり文句…は表情を消すのにも効果的だった。
「おかげでこうして戦場へ連れてこられてしまいましたが？」
「つまらないことを聞いたようだな」
　静かな、微塵の同様をも示さない青い眸から、シェーラーは視線を外した。
「忘れてくれるとありがたい。私はミューゼル大佐を信じている」
「射出開始（アブシーセン）!!」
『ノルデンⅦ』艦橋を、ラインハルトの叫びが震わせ、同時に

腹に響くような唸りと共に『ノルデンⅦ』の艦体がびりびりと震える。
「壮観ですね」
感想を漏らしたのは副長のロイシュナー中佐だった。
確かに壮観だった。
毎秒一個ずつ、直径約一〇メートル、質量五〇〇トンに達する巨大な氷塊が、外惑星環を縫うようにして設けられた重力加速装置の環を次々にくぐり抜けて急加速し、一気に宇宙へと射出されていく。短い間隔を隔てて飛翔する氷塊群は、惑星ヴァンフリート八からの反射光に一瞬目を刺すような煌めきを帯び、そして惑星間空間の闇の中に消えていくのだ。
設置されたマス・ドライバは全部で三〇基。環を構成する氷塊を直径約一〇メートルの球形に整形し、ヴァンフリート八の公転方向に向かって一基当たり毎秒一個のペースで射出する。一個の質量は五〇〇トン余り、磁力砲弾（レール・キャノン）には及ばぬまでも、その運動と質量のエネルギーは無視し得るものではない。岩塊であれば一〇〇〇トンを上回り、さらに鉄質の岩塊ならこの数倍に達する。その分、破壊威力も増すことになるが、作業を急ぐ目的でラインハルトは氷塊だけを使うように指示していた…
ヴァンフリート七とヴァンフリート八、およびラインハルト達が潜んでいるポイントの位置関係から、有効な射撃時間は約一時間。発射される氷塊群は一〇万個を超えた。無論、ヴァンフリート七‐四基地を直撃せぬように、および後半二〇分の分は最終到達宙域とその速度がわずかに変わるように射角の調整には慎重を要したのだが。射出された氷塊の群れは、宇宙空間にゆるやかな放物線軌道を描きながら、約二日から四日間でヴァンフリート七の外惑星環、概ねヴァンフリート七‐四とその周辺宙域に達するはずだった。
「全艦、メインエンジン始動用意…」
その一方で、各艦では急ピッチで発進準備が進められてもいた。
マス・ドライバの射撃時間一時間は、自らの位置を暴露するまでのぎりぎりの時間として弾き出された数字でもあった。広大な宇宙空間では塵ほどのサイズもないとは言え、一個五〇〇トンの氷塊一〇万個は五〇〇〇万トンの質量が、比較的狭い空間に固まって移動することを意味する。大型戦艦数隻分に相当する、巨大な質量の高速移動が、この宙域に駐留する同盟軍艦艇の注意を引かずに済む限界の時間を、ラインハルトたちは約一時間と見ていた。
所定数の氷塊を射出し終えれば、マスドライバを構成する重力加速器は爆発ボルトで自壊させ、ヴァンフリート八に沈める。そして、『ノルデンⅦ』に率いられた重巡航艦五隻を中心とする一〇隻あまりはその自転方向に沿って、外惑星環の中を縫っていくのだ。最大でも数十メートル、最小は数十センチに過ぎないとは言え、高速で移動しなければならない宇宙艦にとって衝突は脅威だった。しかも、外惑星環から大きく飛び出すことは許されず、また、前回ヴァンフリート八の表面に仕掛けられていた罠を警戒しなければならない以上、環の内側に出るのは自殺行為に近い。
誰言うともなく、ヴァンフリート八外惑星環での、この艦隊機動が綱渡り（タンツ・アウフ・デア・ザイル）と呼ばれるようになったのは当然すぎるほど当然のことだった。
「あと一〇斉射で予定数射出完了します」
『ノルデンⅦ』艦橋、キルヒアイスがロイシュナー中佐に報告する。
「…四…三…二…一、射出完了です」
ロイシュナー中佐が微かに頷く。同時に姿勢制御エンジンの唸りが『ノルデンⅦ』の艦体を震わせ、搭乗員達の身体をシートに

押しつけた。
　すぐに慣性中和装置が加速度を吸収したが、ロイシュナー中佐にとってはもはやそれどころではなかった。近接レーダーのスクリーンがほとんど真っ白になるほど、『ノルデンⅦ』は環を構成する小天体に包囲されている。小さなものは完全自動化された近接射撃システムで砕いていけるが、希とは言えない頻度で現れる、直径数十メートル以上のサイズを持つ岩塊は回避せねばならず、さらには比較的近い位置で、同じように綱の上で踊っている僚艦にも万全の注意が必要だった。
　大部分の回避機動は近接レーダーと連動した艦の中枢コンピュータが行うが、即応力に優るコンピュータといえども、互いに相反する条件が競合した場合の判断能力は人間に遠く及ばない。たとえば、回避先に別の障碍物が現れ、艦体の一部を犠牲にする機動が要求されたときなどがそれにあたる。艦長は瞬時に判断を行い、右手に握り込んだ制御スティックを介して艦に自身の意志を伝えねばならないのだ。コンマ一秒の内に数キロを移動する軌道速度の中の判断である。半瞬の、そのまた数十分の一の逡巡もゆるされるものではない。
　ロイシュナーだけではない。『ノルデンⅦ』に従う僚艦、『オーベルライヘンバッハⅨ』ではヨハン・クレメンツが、『メルンベルクⅧ』ではジンツァーが全身を神経に変えて艦橋に立ちつくし、『グライフェスヴァルトⅥ』のバルトハウザー、『ハイテルバッハⅡ』艦長のオイゲン、『シュトラスンクⅣ』を指揮するマルクグラーフもまた、巨大な重巡航艦を駆っての綱の上のダンス（タンツ・アウフ・デア・ザイル）に、宇宙艦乗（ふなのり）りとしてのすべての技量を注いでいた。この機動を二時間あまりにわたって続け、ヴァンフリート八外惑星環を半周する。
　当初、ヴァンフリート八外惑星環に入った帝国軍艦隊は『ノルデンⅦ』以下の五五隻。その内、四〇隻あまりは輸送してきた物資のコンテナを放出すると、一刻を惜しんでヴァンフリート宙域を離脱し、今、ラインハルトに従うのは僅か一〇隻。この僅か一〇隻がヴァンフリート七‐四基地への救出部隊として主要動力を停止し、時を待つ。それがラインハルトの作戦だった。
　ラインハルトはすべてをロイシュナー中佐に委ね、指揮シート上で軽く目蓋を閉ざしている。眠っているのではない。万一の時はただちに行動に移れるように全身を撓めながら、それでいて身体そのものはリラックスさせているのがキルヒアイスには一目で見て取れた。喩えは悪いが、美しい猫科の猛獣がリラックスしつつ、獲物から一瞬も視線を外さない、そんな姿にすら見えた。
「先任指揮官（ゼーニオール・コマンドイル）!!」
　それが、この作戦でのラインハルトの呼び名だった。
　ミューレン大尉の声に、ラインハルトは目を見開いた。
「時間です」
「受信できたか？」
「…未だです…いや、お待ち下さい」
　一呼吸を置き、ミューレン大尉はヘッドセットを押さえた。
「傍受しました。喚き声（シュライ）です。発信箇所…ヴァンフリート八遠日点より一〇〇〇光秒（約三億キロメートル）」
「約束を守ってくれたか。それはありがたいな」
　宙域を先に撤収させるに当たって、ラインハルトは撤収部隊の先任指揮官に一つの命令を与えていた。曰く、通常航行でヴァンフリート八から一〇〇〇光秒の距離を取り、それから最も解読されにくい暗号…極度に圧縮された暗号情報で数十分の会話に相当する情報をコンマ五秒で送信できるという意味で、喚き声（シュライ）と呼ばれている…を発信すること…である。

敵地のど真ん中。パルス・ワープ航法を駆使してさえ、イゼルローン要塞への距離は一週間近い。その宙域で、たとえ解読は不可能に近いにしても傍受されやすい超光速通信波（F・T・L）を発信する。解読できなくとも発信と、その発信宙点は容易に探知され、敵の追撃を招く…並以上に剛胆な指揮官でも、守りきるのは不可能な指示を、撤収部隊の指揮官は敢えて守ってくれたようだった。

「追撃される恐れはありませんか？」

何度も尋ねて恐縮だが…前置きを置いてから、ミューレンは問う。本来ならロイシュナー中佐が尋ねるべき事柄だが、そのロイシュナーは外惑星環のただ中での綱渡（ザイルタンツ）りの真っ最中である。

「恐れはある」

ラインハルトの回答は直截だった。

「敵は我が方の動きを血眼で探っている。いかなる内容であれ、発信があればまず追従する。戦場での原則だ」

「では…」

「彼らにはすべてを説明してある。私は嘘を吐いていないし、彼らはすべてを理解した上で、なお通信波を発信する選択肢を採ったのだ、大尉。ここは戦場だ。一人の犠牲も出さずに、何事かを完璧に成し遂げることはできない。ただ、私にできるすべてのことは、その犠牲を最小限度に抑える為に全力を尽くすことだ」

何度も説明させるな…とはラインハルトは言わなかった。彼の読みが当たれば、撤収部隊は同盟軍の追撃を免れ、無事にイゼルローン要塞へ帰着できる。しかし、ラインハルトは神ではない。読みがはずれる可能性は十分以上にあった。はずれた場合、撤収部隊は数千隻にも及ぶ同盟軍第八艦隊主力部隊に追撃され、半瞬の抵抗の後の全滅を回避しがたい運命として受け入れることになる。

ラインハルトが他の凡百の指揮官と異なるところがあるとすれば、そうしたリスクまでを事細かに説明し、了解を求めた点だろう。撤収部隊が通信波の発信を拒んだ場合、ラインハルトの部隊が直面する困難さは倍加し、ヴァンフリート七‐四基地の無血撤退はより困難となる。それを知ってなお、ラインハルトは撤収部隊に選択権を与えたのだ。

ミューレンは納得したようだった。

「うまく…いきますね、大佐」

「そうありたいな」

笑って受け、ラインハルトは一瞬だけ全天周スクリーンに視線を走らせてから、再び睫毛の長い目蓋を閉ざした。艦橋要員の全員が驚嘆の視線を見交わし、額から首筋にびっしりと浮かんだ冷たい脂汗を拭う。半球形に艦橋の上部を覆った全天周スクリーンには、僅か数キロから、時には数百メートルの距離で『ノルデンⅦ』と駆けちがっていく無数の小天体が映し出されていた。その中で平然と目を閉ざし、指揮シートにくつろぐ…少なくとも周囲からはそうとしか見えない…ラインハルトの姿は、彼らにとって作戦の成功を、論理によらず納得させるものに違いなかったのだ。

同じ頃…

「それは命令違反です」

「命令はわたしが下す。わたしが下すのが命令だ、考え違いをするな」

ヴァンフリート八遠日点より八〇〇光秒の宙点。

戦艦『ヴィエーナ』上で険悪な視線を絡み合わせているのは、帝国軍の陽動部隊を指揮するマントイフェル少将と、『督戦官』のフレーゲル男爵だった。

フレーゲル男爵の帝国軍での地位は大佐。それも、男爵であり一方のマントイフェル少将の戦場での経歴は既に三〇年を優に超えている。
ブラウンシュバイク公の甥という血筋に与えられた名誉職に近い。
本来、マントイフェル少将にとっては、フレーゲル男爵の『指揮』などを受け入れる謂われはなかった。実際、少将の先任作戦参謀であるシューラー中佐などは露骨なまでの反感も露わに、『男爵閣下に対し奉り、小官の補佐など不敬の極みと心得ております』と一切の補佐を断っているほどだ。
フレーゲルとマントイフェルの対立は、ヴァンフリート星系最外縁にタッチダウンした直後に生じた。
ラインハルトの作戦に従い、高速で第四惑星軌道へ向かう航路を採ろうとするマントイフェルに対し、フレーゲルはヴァンフリート八への接近と陽動のための発信を要求したのだ。
「それではまるで作戦部隊がヴァンフリート八にいることを、わざと叛徒に知らせよと言うようなものではないか⁉」
『ヴィエーナ』の高級士官用執務室を我が物顔に占有し、執務デスクの前にふんぞり返っているフレーゲルに、マントイフェル少将は困惑と怒りを綯い交ぜにした表情を歪ませていた。もともと、この執務室自体がマントイフェルがフレーゲルに明け渡した部屋なのだ。
軍人人生のほとんどを最前線、すなわちイゼルローン駐留艦隊の一員として送ってきたマントイフェルである。僚友を殊更に危地に追い込もうとするかのようなフレーゲルの『命令』をはいそうですか、と受け入れられるものではなかった。
「マントイフェル少将、私はここに一介の大佐として立っているのではないのです。そのことを、いつになったら了解してもらえるのでしょうかね」
「たとえ『督戦官』として参加されておろうと、戦理に背くような命令は肯んじかねる」
「私を誰だと思っているのだ、マントイフェル少将。私が一言、卿のことを伯父上や陛下に申し上げれば、卿はその不遜な態度を一生後悔して過ごす羽目になるのだぞ」
マントイフェルよりも先に、ならんで佇立していたシューラー中佐が奥歯をキリと鳴らしたようだった。
思わず、一歩を進み出ようとするシューラーの腕を、マントイフェルが素早く抑えた。
「閣下！」
押し殺した、しかし、明確に殺意を露わにした小声は、辛うじてマントイフェルの耳にだけ届いた。
「この艦隊は閣下のものであります」
「よせ、中佐。無駄だ」
マントイフェルは、執務室につながる控え室を指して、軽く顎をしゃくる。シューラーの頬の痙攣が激しくなった。フレーゲルが『護衛』と称して連れてきた数名の装甲擲弾兵崩れがそこにたむろしているはずだった。いわゆる『不名誉な除隊』によって正規軍を逐われた、シューラーなどから見れば『愚連隊』としか呼びようのない、『ヴィエーナ』搭乗員全員から不快と嫌悪の視線を集めている連中だった。
だが、彼らは同時にフレーゲルの目であり、耳であり、口でもある。フレーゲル一人ならともかく、彼らすべてを同時に葬るのは困難であり、彼らを葬ったことを隠しおおすのはさらに困難を極める。
「…それで、なぜ陽動行動をヴァンフリート八宙域で行うのが戦理に叶うのか、せめて説明頂けないか、男爵」
「私は皇帝陛下より、督戦に赴けと命じられてここにいるんです

よ、少将。しかも、私の伯父上は、皇帝陛下の女婿であり、帝国貴族最大の重鎮ブラウンシュバイク公爵閣下です。その私が命じているのですよ、陽動行動はヴァンフリート八で行え、と」
マントイフェルが万力のような力を込めてその腕を押さえていなければ、シューラーはものも言わずにフレーゲルの顎を殴り飛ばしていただろう。
そういうことか…とマントイフェルは大きく息をつく。フレーゲルが口にしているのは戦理などというものではなく、血筋に伴う権力を笠に着た単なる横車に過ぎない。だが、フレーゲル自身がいみじくも口にした通り、彼の背後に立つブラウンシュバイク公爵なりフリードリヒ四世なりは、横車に抵抗できないだけの重みを与えている。
しかし———ミューゼル大佐の部隊が大損害を受け、作戦が失敗したとして、ヴァンフリート八宙域で無用の陽動行動を行ったとして非難を受けることになるのはマントイフェルであり、フレーゲルではない。フレーゲルの地位はあくまで『督戦官』。帝国軍の編制上、『督戦官』などという公的な地位は存在しないのだから。
三〇年あまり、軍と宮廷に無数に張り巡らされた有形無形の陥穽を何とかくぐり抜けて将官の地位を手にし、あと数年、無事に戦い抜ければ退役時昇進で退役中将として老後を送れることになる…はずだったが、どうやら自分の軍歴の最後に待っているのが軍法会議の被告席らしい。では、せめて有為な若者…先任参謀として赴任してきたばかりのシューラー少佐はことの圏外に置いておくべきだろう。
それが、この時マントイフェルの内心を占めた諦念だった。
「宜しい、ご指示を承ろう」
「兵は拙速を尊ぶと言いますからね。戦場でぐずぐずしているのは、それだけで犯罪であることをお忘れなく」
数時間後、彼らが綱の上（タンツ・アウフ・デア・ザイル）のダンスを踊り切り、ヴァンフリート八外惑星環の所定の位置に到達する直前だった。
「撤収部隊とは別の発信を傍受。距離はヴァンフリート八遠日点より約九〇〇光秒と推定されます」
ラインハルトは悪童の微笑を浮かべてキルヒアイスを見た。
「奴だな」
「ええ、そうですね」
仕掛けた悪戯がみごとに成功した時みたいだ…とキルヒアイスは苦笑して頷く。
フレーゲルなら、陽動に名を借りて自分たちの所在を敵に暴露するような行動に出るだろう。そう推測したのはラインハルトだったし、キルヒアイスも異議を唱える気にはなれなかった。撤収部隊による発信を命じたのも、フレーゲル男爵の行動を予測した上でのことだった。フレーゲルが予測の行動に出れば、敵の目は兵力の多い陽動部隊に集中する。兵力の少ない撤収部隊はほぼ間違いなく見逃される。
「それで、こちらはどうでしょうか？」
航宙図の中、ヴァンフリート七‐四宙域をキルヒアイスは指し示した。
「すでに敵の新手の分艦隊が包囲を始めているようですが…同じように動いてくれるでしょうか」
「動くかも知れないし、動かないかも知れない」
そんなことは気にする必要はない。それがラインハルトの回答だった。もちろん、キルヒアイスとしては議論するつもりはなく、

ラインハルトの意図をロイシュナー達に再確認させるのが主な目的だったのだが。
「陽動に乗せられなくとも、彼らは動かざるを得なくなる。そのための手も打ってある。あとは待つだけだ」
磁気嵐の最盛期はヴァンフリート八の外惑星環に隠れてやり過ごす。行動開始は嵐がおさまりかけた一一月八日になってから。それがラインハルトの命令であり、キルヒアイスが気を遣うまでもなく、既に『ノルデンⅦ』搭乗員全員が待ち受けるところだった。

☆☆☆

ラインハルトの、賭けと言っていい読みは見事に的の中央を射抜いていた。
撤収部隊の発信は、仰ぐ旗を異にする複数の艦隊によってほとんど同時に傍受されていたのである。
その内の一つは、当然のことながら同盟軍第八艦隊だった。
「ヴァンフリート八の遠日点から約一〇〇〇光秒の宙点ですか…？」
『クリシュナ』の参謀長執務室に呼び出されたヤンはさすがに首を捻った。
「貴官でも敵の意図は分からんかね。帝国軍が何のつもりで無電封止を破ったのか…」
「はあ…」
実のところ、ヤンには分かっていた。敢えて敵地で傍受されて当たり前な発信を強行するのだ。指揮官が余ほどのぼんくらか、さもなければ傍受されることを前提に発信したか。可能性としてはその二つくらいしか考えられない。
敵の指揮官がぼんくらなら、話は簡単だ。単純に追撃すればよい。問題なのは、後者だ。後者だとすれば、傍受されることを前提とした敵の意図があるはずだ。読み誤れば、足元を掬われる。
いや、ヤンにとって最大の疑問はそんなことではなかった。
彼は第八艦隊参謀長の執務室に呼び出されている。ヤンに、本来極秘情報であるはずの、この情報を伝え、判断を仰いでいるのは、今回の作戦の最初からヤンを毛嫌いすることに決めたかに見えたビョルケル准将その人なのだ。敵の意図よりも、ビョルケル参謀長の思惑の方が、ヤンにとってははるかに不分明だった。
ビョルケル自身が敵の考えを読めなくなり、密かにヤンの智恵を借りようとしているのかも知れなかったし、あるいは完全な虚偽の情報を伝えてヤンに誤った作戦を立てさせようとしている…とも考えられないではなかった。もっとも、この時のヤンはそこまで穿ったものの考え方をしたわけではなく、ただ、相手の考えていることが分からずに、ぼーっとした顔つきのまま、執務デスクの前に無言で佇んでいた、というだけのことである。
「何も意見がないのかね!?」
果たしてビョルケルのこめかみに太い怒筋がうねり始めた。
聞いてどうなさるのです…ヤンがもっとかわいげのない性格なら、真っ正面からそう反問したかも知れない。聞いて、馬鹿になさるおつもりですか…とでも。
しかし、もともと栄達への指向が皆無に近く、いわゆる政治的な思考とも無縁に近いヤンである。それに、ビョルケルが戦術上の判断を誤り、『クリシュナ』が撃沈されれば、ヤンがどんな手を打っていても全く無駄というものだ。重さ数百トンのコンクリート塊が落下してくる中で事務机の下への避難を訓練したり、非常食を用意しても意味がないのと同義である。
「陽動でしょう」
何のけれんもなく、ヤンが机の上に放り出した結論を、ビョ

ルケルはあからさまな疑惑の目で睨め付けた。
「陽動だと？」
「ええ」
　敵の意図はヴァンフリート七の敵基地の撤収…それもできる限り少ない損害での…と思われる。おりしも恒星ヴァンフリートの恒星表面爆発と、それに伴う磁気嵐の時期が至近に迫っている。
「…つまり、敵基地への総攻撃を企図する我が軍の動きに紛れて、帝国軍は救出部隊の主力をすでにヴァンフリート星系に入れている可能性があります。その上で、侵入した部隊の一部を後退させ、その途上でそれらしい通信波を発信させる。つまり、磁気嵐の最盛期から終末期、あるいは磁気嵐が収まってから数日の期間、我が軍の主力部隊をヴァンフリート星系から釣り出すのが目的ではないかと推察されます」
「しかし、それは貴官一人の考えだろう？　どんな証拠があるというのだね」
　ビョルケルの反論がヤンのため息を誘った。一体、彼はヤンにどのような回答を期待していたというのだろうか。すでにビョルケル自身が何か回答を用意していて、それとヤンの答えが一致しないから満足しないとでも言うのだろうか。であれば、何も執務室にまで呼び出す必要はないだろう。艦橋で一言、『ヤン中佐、貴官はどう思うか』と訊けばいいのである。
「そんな危険な任務を、先に撤退するような指揮官が肯うとはとうてい思えない。これは帝国軍のミスだ。無電封鎖の命令を破って、うっかり発信した愚か者が帝国軍の増援部隊にいるのだ」
　可能性は否定できないな、とヤンも思う。しかし、敵のミスを前提に作戦を考えるという態度がすでに誤っていないだろうか…と言うより、敵のミスを信じているなら、どうしてわざわざヤンを呼び出して、意見を訊く必要がある？
「閣下、発信を行ったのが帝国軍の増援部隊なら、いささか遅くはないでしょうか。現時点でヴァンフリート八から一〇〇〇光秒というのであれば、ヴァンフリート七に達する前に磁気嵐がはじまってしまいます」
「前回も彼らは磁気嵐のただ中に星系へ侵入してきた」
　ビョルケルの口調は頑なだった。
「…」
「今回も同じだ。従って、我々はヴァンフリート八へ急行し、前回同様の罠をしかけて帝国軍の侵攻を、万全の態勢で迎撃する‼」
　両肩を押さえつけられるような徒労感に、ヤンは大きくつきかけたため息を辛うじて押しとどめた。
　つまり、結局のところ、参謀長殿はヤンを言い負かしたかっただけらしい。艦橋で、アップルトン中将を交えて議論すれば、あるいは中将がヤンの意見を採用しかねない。それを避けるために、事前に自分の執務室でヤンを一方的に論破し…少なくともビョルケル本人はそのつもりになって…、司令官の前でヤンが異論を立てるのを封じる。
　ヤンに疲労を覚えさせたのは、幼稚園児か、精々小学生じみたビョルケルのメンタリティだったが、大きく息をして疲労感を吐きだしたとき、別の可能性に思い当たって胸元にもやもやとした吐き気めいた感覚を覚えた。
　頭の固い、物わかりの悪い上官ではあっても、少なくとも前回の作戦ではビョルケルはヤンを殊更に敵視することはなかった。今回、俄にヤンに嫉視の視線を向け…ているかどうかすら、ヤンはあまり意識していなかったが…、一々、彼の意見を封じようとする。そこに何らかの意図は働いていないだろうか…？
　執務デスクに組み込みのコンソールが緊急連絡の電子音を鳴り響かせたのはその時だった。

「何事だ!?」
ヤンをやりこめた…と信じた満足感に横やりでも入れられた思いだったのだろう、不機嫌さをそのまま声に変えたような口調で応じるビョルケルに、これはデスクの前に佇んでいるヤンにすら聞こえるような大声が応答した。
『敵であります。敵の大部隊…少なくとも三〇〇〇を超える制式艦隊をヴァンフリート八外縁宙域で捕捉しましたっ!!』
「な――――」
『宙点はヴァンフリート八遠日点から八八〇光秒。ヴァンフリート八に向けて巡航速度で接近しつつあると思われます』
「そ…そうか」
躍り上がるようにビョルケルが座席を蹴った。
「どうだ、ヤン中佐。これでも発信源が陽動部隊だと主張するのかね」
「はあ…そうですね」
得意満面なビョルケルの表情が癪に障る、とでも言うべき場面なのかも知れないが、ヤンはつい、それで味方が勝てるのならそれで良いではないかと思ってしまう。実際、誰が手柄を立てるにしても、要は負けなければよいのだ。勝てなくとも、負けさえしなければ、強制的に軍から排除されて、せっかく掛け金を積み立てた年金ももらえなくなるという悲劇だけは回避できる。
軍という組織を認めることの薄いヤンだったが、その点だけは『親方・自由惑星同盟』ともいうべき軍隊の役所的な側面をありがたいと思う。何しろ、勝ち続けなければ『無能』の烙印を押されて『組織の再編成(リストラ)』という名目の人員整理の対象となってしまうのが、大抵の経済組織での常識なのだから。
「念のためにヴァンフリート七‐四宙域に一部隊だけ、哨戒部隊を残しておいてはいかがでしょうか」
ただし、『負けなければよい』のだから『負けないように手を打っておく』のもヤンのヤンたる所以でもある。
「良いだろう。一〇〇隻ばかり残しておけ。残す部隊を選ぶのは貴官に任せるから、宜しくやってくれ、中佐」
ヤンの提案を、ビョルケルが深く考えなかったのは明らかだったが、今の段階ではそれで十分だった。
『敵は制式艦隊分艦隊級の兵力を以てヴァンフリート八へ接近しつつあり。ヴァンフリートの恒星表面爆発に伴う磁気嵐に乗じて、ヴァンフリート七‐四宙域へ進出し、敵基地を救援せんとする意図とみとむ。我が艦隊は、恒星表面爆発の影響が及ぶ前に、艦隊主力をもってヴァンフリート八公転軌道外縁部においてこれを迎撃し、これを撃破、ヴァンフリート星系より撃攘(げきじょう)せんとす』
アップルトン中将の名による命令が第五分艦隊に達したのが一月四日遅くである。
『第五分艦隊は一個戦隊級の兵力を敵基地監視目的でヴァンフリート七‐四宙域に残置の上、可及的速やかに艦隊主力へ合同すべし。なお、敵は戦場宙域の地勢を利し、探知の限界に乗じて我が軍の指揮情報系統の攪乱を意図する恐れあり。第五分艦隊は、陽動に留意し、一部兵力を以て敵基地の監視に専任させると共に、小型宇宙機雷群で敵基地周辺宙域を封鎖すべし』
この命令は、しかし、第五分艦隊に混乱を引き起こした。
すでに第五分艦隊はヴァンフリート七‐四基地への包囲攻撃を再開すべく、その兵力展開を開始していた。不用意に基地に接近したアドロフ少将の不注意に鑑み、数十隻もの駆逐艦に二隻ずつのペアを組ませ、ヴァンフリート七外惑星環の中へ進入させても

いたのである。
　作戦行動を開始した部隊を引き戻し、全く方向の異なる別の作戦行動に向かわせるには大変な手間と時間を要する。一〇〇〇隻強の艦艇からなる第五分艦隊だが、一一月四日時点でその艦艇群が展開していた空域は一二〇兆立方キロメートルに達していた。これはオーディンやハイネセンなどの標準的な有人惑星が優に一〇〇個以上もはいるほどのサイズであり、しかも秒単位で拡大しつつある。これらの艦艇に連絡を取り、行動を中止させ、所定の宙域へ向かわせる…軍において『命令、変更、混乱』なる表現で、朝令暮改が戒められる所以だった。
　ホイットニー少将にしてみれば第八艦隊司令部からの命令は、まさに『命令、変更、混乱』を招くものでしかなかった。すでにヴァンフリートの恒星表面爆発は二日後の一一月六日に迫っており、それまでに麾下の部隊を再編成してヴァンフリート八へ向かうことなど、ほとんど不可能事としか言いようがなかった。
「一体、司令部は何を考えているのだ!?」
　さすがに吐き捨てたホイットニー少将だったが、軍が軍である以上、上級司令部の命令を無視することもまたできることではなかった。考えつく限りの、神を冒涜する悪罵を吐き散らしながら、ホイットニー分艦隊は新たな指示に従うべく、行動を開始したのが一一月五日早朝。正確には四日深夜とも言うべき五日午前二時。
　第五分艦隊は、巨大な半球形の陣形でヴァンフリート七‐四宙域に展開している。上も下もない宇宙空間ではあるが、一応天頂方向を上とすれば、その左翼方向…間もなく軌道交差を起こすべく、ヴァンフリート七を追う形となっているヴァンフリート八の方向にそれは探知された。
『高速で移動する、正体不明の飛翔体だと…? 大規模な流星群ではないのか』
　最初、報告を受けたホイットニー少将は思わずそう反問し、それから自分の言葉の無意味さを悟ってうなり声を上げた。
　恒星から一〇億キロ以上も離れた外惑星宙域を、人為の建造物に匹敵する速度で飛翔する流星群等というものがあり得るわけがないではないか。
「宇宙船か?」
「宇宙船にしては、反応が鈍いです。電波の反射率が悪い、つまりステルス素材を多用した偵察艦艇の類か、あるいは宇宙船よりはるかに小さい物体なのかも知れません」
　参謀長のシグニチャー中佐の指摘に、ホイットニー少将は大きく唸った。帝国軍の偵察艦艇か、さもなければ彼らが何らかの意図を持って射出した物体…早い話が磁力砲弾(レール・キャノン)の大集団。
　ホイットニーは艦隊司令部からの命令の末尾、おまけのように付け加えられていた部分を思い出した。曰く『敵は戦場宙域の地勢を利し、探知の限界に乗じて我が軍の指揮情報系統の攪乱を意図する恐れあり』。
「――そう言えば、前回、フルマンティがひっかけられたトリックのネタ、あれも磁力砲弾だったな」
「磁力砲弾の超々遠距離射撃と仮定して、射出ポイントを割り出してみましょう」
「やってみてくれ…それと中佐、奴らの行動をちょっと整理してみようじゃないか」
　まずヴァンフリート八遠日点から一〇〇〇光秒の距離で不明瞭な発信。続いて八八〇光秒で、今度は明らかに内容を持った長文の発信がキャッチされた。それから半日としない内に、今度はヴァンフリート七と八の中間宙域で『高速の移動物体』が発見される。
「何か、意図を感じないか、中佐?」
「そう…ですね。一度ならともかく、二度も発信があるというの

がわざとらしいと言えば、わざとらしいですね。しかし、司令部は敵の主力が侵入ってきていると判断していますが。我々より司令部の方が多くの情報を握っている以上、司令部の判断に異を唱えるのは困難です」
「だが、出し抜かれて責任を問われるのは我々だ。こういう仮説はどうだ。彼らの主力は既にヴァンフリート八にいる。外でうろついているのは陽動部隊だ」
「では、この飛翔体はどう説明されます？」
計算、終わったか…問うシグニチャーに、航法士官はあと五分下さいと応答した。
「トリックだ。君も可能性を指摘したな。ステルス性の高い偵察艦艇の可能性もある、と。つまり、帝国軍はヴァンフリート八の外惑星環に忍び込み、そこから大量の磁力砲弾を発射した。丁度宇宙船の恒星系内速度くらいの最終速度を得るような初速と射角を与えて、だ」
「それを探知した我々は、持ち場を離れてのこのことヴァンフリート八へ釣り出されていく。タイミング的に言えば、磁気嵐が始まる直前…我々がヴァンフリート八に到達したころには、磁気嵐が始まっていて、ヴァンフリート七へは戻れない」
「そうだ」
莞爾とした微笑が、どちらかと言えば貧相なホイットニー少将の表情を輝かせたように見えた。彼はは誇ってよかった。この時、彼はラインハルトの描いた戦略的な構図をほぼ正確に言い当てていたのだ。
「射出点、出ました」
軌道計算を終えたらしく、航法士官が振り返った。
「映像に変えました。そちらへお回しします」
指揮コンソール上に立体映像が立ち上がる。ヴァンフリート八と七の公転軌道が銀色の巨大な弧で描かれ、惑星の現在位位置が青い球体となって宙に浮かぶ。『飛翔体』の軌道が描き加えられ、ヴァンフリート八の公転軌道と交差したところで赤くフラッシュした。
「ヴァンフリート八の二日前の位置にほぼ重なります」
「外惑星環か？」
「そのようです」
「位置を特定できるか？」
立体映像がズームアップした。直径一〇万キロを超えるガス状惑星と、それを取り巻いて惑星直径の数倍の広さを持つ広大な外惑星環。外惑星環の一角、恒星ヴァンフリートとヴァンフリート八を挟んだ反対側に赤くフラッシュするエリアが現れた。
「ヴァンフリート八‐二が近くにあります。小規模な艦隊を隠すには、まあ悪くないポイントです」
「どうされますか？ 小官としては、このまま本宙域で待ち伏せすべきと考えますが？ ヴァンフリート八に敵が隠れるとしても、大した数を置くわけにもいきません。前回同様、一〇〇隻規模、あるいはもっと少ないかも知れません。こちらは一〇〇〇います。磁気嵐のまっただ中でも、敵の行動線はほぼ予測可能です」
「巡航艦と駆逐艦で三〇〇隻ほど別働隊を組織してくれ」
「…？」
「念には念を入れるのだ、中佐」
得意然としてホイットニーは言い放つ。
「我が主力は本宙域で敵を待つ。別働隊はヴァンフリート八へ赴き、万一に備えて敵の退路を断つ」
「それでは兵力の無用な分散になりませんか？」
「君も言っただろう、敵が一〇〇隻規模だと」
一〇〇に向けるに三〇〇。そしてヴァンフリート七宙域には七

〇〇が待ち受ける。帝国軍にとっては前門の虎、後門の狼そのものの構図だった。陽動に乗った第八艦隊の主力は肝心の戦場から引き離されてしまうが、帝国軍はまさかホイットニーの艦隊が動かずに待ちかまえていようとは思いもしないだろう。
「命令では機雷で敵基地を封鎖せよとなっています」
シグニチャーが司令官に注意を促した。
「だめ押しだ。やっておこう。偵察部隊が帰還したら、敷設を開始させろ。磁気嵐の始まる前までに撒けるだけ撒くのだ」
胸郭の内側を盤石の自信が満たしていくのを感じ、指揮シートの上でホイットニーは胸を反らした。フルマンティを戦死させ、アドロフを手玉に取り、そして第八艦隊主力すら欺きかけるほど、今度の敵は手強かった。しかし、それもここまでだ。自分がこの宙域に腰を据えている限り、帝国軍は手も足も出ない。空っぽだと思ってやって来たその鼻先に我が艦隊が現れた時、帝国軍がどれほど仰天し、狼狽するか、早くこの目で見たいものだ。
「———そうだな。待ち伏せと言うからには、あっさり探知されたのでは面白くない」
全艦隊、予めヴァンフリート七外惑星環の最外縁部に入り、敵の出現に待機せよ。敵出現後、ただちに外惑星環宙域から離脱できるよう、深く入りすぎぬように注意せよ。
命令一下、待機を命じられた七〇〇隻あまりが、厚さ数百キロに達するヴァンフリート七外惑星環に入り込み、それぞれが岩塊や氷塊を盾に待機位置に入ったのが五日八時過ぎのことだった。
盤石に思われたホイットニーの自信は、早くも僅か二時間後に最初の亀裂を穿たれることになった。
「何か、変な動きをしているな…ってことはそろそろ来てくれたかな？」
ヴァンフリート七‐四基地。リーフェンシュタール准将の問いに、“シュピーゲル”クルツバッハが応じる。『然り』。
「ちょっともったいないが、やるか？」
「今しか、できんでしょう。チャンスは二度ない」
「では、やろう」
直後、短い喚き声が基地から八方へ飛んだ。
「なんだ？」
同盟軍駆逐艦『リングゴールド〇一一』艦長のドルーズ少佐は目を剥いた。敵基地の偵察を命じられ、ヴァンフリート七外惑星環深くに入り込んだ数十隻の内の一隻だった。偵察を中止し、一四時までに帰還せよとの命令が届いたのがほんの一時間ほど前である。ペアを組んだ僚艦『ダッシェル〇九九』とともに艦首を巡らしたのがその三〇分後。その彼らの進路を阻むように、明らかに帝国軍に所属する艦艇が目の前に現れたのだ。
「なんだ、あれは…やつら、何のつもりだ？」
ドルーズのうなり声に軽侮と嘲笑の色が濃くなった。
「あれば…艦ではなく艇ですね」
先任士官もドルーズに同調する。
その通りだった。
どう見ても輸送船に付属する荷物運搬用の小型艇。運荷艇とか、はなはだしくは『はしけ』と呼ばれている、小型艇が『リングゴールド〇一一』の行く手を塞いでいるのだ。
「体当たりでも狙われると厄介です。距離がある内に主砲で吹き飛ばしましょう」
「そうだな。時間もない。よく狙えよ。小細工される前に仕留め

てしまえ。『ダッシェル』を呼べ。敵の小艇と遭遇。主砲斉射にて排除す、とな」
『リングゴールド〇一一』が僅かに艦の向きを変え、艦首主砲を全開する。射撃用レーダーが運荷艇を捉え、砲術長のコンソールがカウントダウンを始めた直後、運荷艇が奇怪な動きを始めた。
船体中央に抱え込んだ輸送用コンテナをいきなり切り離したのだ。
自爆か…と一瞬、色めき立った『リングゴールド〇一一』のブリッジだったが、切り離されたコンテナがほとんど位置を変えぬままに漂ったままだった。あからさまな嘲りのどよめきが上がった。一方、運荷艇は姿勢制御用ロケットをふかして距離を取ろうとしているようだったが、推進剤が足らないのか、まるで這うような遅さだったのだ。
「逃げようたって無駄、無駄、無駄」
奇妙な節回しで呟いた砲術長が主砲斉射を命じかけた瞬間、コンテナが爆発した――と見えたのは錯覚だった。
ほとんど同時に『リングゴールド〇一一』は巨人のハンマーに横撃されたかのような激震に見舞われた。
「い、いった…い――」
何が…と言い差し、ドルーズは最後まで言い切ることはできなかった。
慣性中和機構の能力をはるかに上回る衝撃でドルーズは指揮シートを放り出され、ブリッジの天井に叩きつけられた。ドルーズだけではない。安全ベルトをしていなかったブリッジ要員全員がドルーズと同じ運命を辿り、その大半が首の骨を砕かれて即死した。即死を免れた者も、僅かに数十秒を長らえたに過ぎなかった。
動力炉とレーザー水爆ミサイル弾頭の一斉誘爆で発生した数千度の火焔が、生ける者も死せる者も見境なしに巻き込みながら、凄まじい爆風を伴って艦内を席巻する。駆逐艦の艦体を粉々に打ち砕き、透き通った純白の火球に変えるまでに数秒は要さなかった。
『リングゴールド〇一一』と行動を共にしていた『ダッシェル〇九九』は側面から磁力砲弾に貫かれ、僚艦と同じ運命を辿った。
『リングゴールド〇一一』と『ダッシェル〇九九』だけではなかった。基地周辺宙域で数十の火球がほとんど同時に生まれ、そのすべてが同盟軍駆逐艦の轟沈を示すものだった。

「偵察部隊、全艦、通信途絶。外惑星環中、敵基地とおぼしき宙域を中心に核融合爆発と思われるもの、四五箇所…四六箇所を確認。爆発の規模、タイミングから見て、我が艦隊の偵察部隊と思われます…」
「な…こ、こんな馬鹿な、全滅、全滅だと…偵察部隊が同時に全滅させられたというのか?」
完勝の自負に強かに冷水を浴びせられ、ホイットニーは絶句する。
「馬鹿な…どうやって、そんなことができるというのだ。戦闘艦艇など一隻もいないはずではなかったのか?」
「――小型の宙雷艇かも知れません…」
シグニチャー中佐も、顔色を蒼白に変じていた。
「艦隊を外惑星環から出すべきです。この宙域で宙雷艇の奇襲を受ければ…」
「う…」
広闊な宇宙空間での会戦なら、戦艦が宙雷艇や駆逐艦に後れを取ることはほとんどない。だが、八方に大小の宇宙塵が漂い、操

艦の自由を制約される外惑星環の中で奇襲を受けたならば…
つい数時間前まで帝国軍への奇襲成功を確信していたホイットニーにとって、悪夢のような思いだった。
「わかった。ただちに艦隊を外惑星環から出す。急げ。そろそろヴァンフリートが騒ぎ出している…くそ、帝国軍め、悪魔め、小賢しい手品師どもめ‼」
その小賢しい手品師にしてやられているのは誰かね…と応じたのは、リーフェンシュタールである。もっともホイットニーの声が聞こえるはずもなく、リーフェンシュタールの声がホイットニーのもとへ達することもあり得なかったが。
運荷艇の輸送コンテナに砲身を切りつめた磁力砲を載せ、安全限界を無視した爆発的な大電流を与えることで砲身の短さを補う。巡航艦クラスでも一撃で沈めるだけの破壊力を持つ。射程が短いので使用できる戦場は限られ、かつ、反動と大電流発生のための爆発とでコンテナは磁力砲の砲身と共に跡形もなく吹き飛ぶため、まともな兵器とはとても言えない。
「昔、こういう馬鹿げた兵器で捨て身の勝ちを拾ったヒーローの話を読んだことがあるんだ」
「本当に馬鹿げてますな。ここまで追いつめられていなければ、使う気にはなれませんでした」
“シュピーゲル”は応じるのも馬鹿馬鹿しいと言いたげな口調だった。
「これでそろそろ手品の種は仕舞いだがね」
リーフェンシュタールは肩を竦める。そろそろ舞台を替わってくれないと、磁気嵐明けで幕引きということになる。それも悪くないが、できれば帝都（オーディン）には捕虜交換の結果としてではなく、凱旋という形で帰還したいものだ。何しろ、人を待たせているんだから。
上官の勝手な感想に、“シュピーゲル”クルツバッハは完全な無視で応じた。もっとも、華々しい名誉の戦死などという戯言を口にしない上官を、この強かな兵隊上がりも高く評価してはいたのだが。
交替の役者は飛来する氷塊群だった。
宙雷艇からの強襲攻撃を恐れて外惑星環から離れた第五分艦隊は、急速に接近してくる無数の物体をその至近に捉えて恐慌に陥った。
「こ…これは…！」
レーダーの全象限を埋め尽くして急速にその姿を拡大してくるのは、数十万個もの氷塊だった。
「氷です。直径一メートルから数メートルまでの…無数の氷塊が、本宙域目がけて押し寄せてきます‼」
「氷塊…」
唖然としたホイットニーだったが、次の瞬間、彼の脳裏で理解が像を結んだ。
「くそ、最初からこのタイミングを狙って…」
陽動のための偽装。探知網への反応が弱いのは、艦艇にくらべてはるかに小さい磁力砲弾のゆえと思っていたが、ホイットニーは自分が二重に誤っていたことを悟った。氷なのだから、レーダーに対する反射率が低いのは当たり前である。そして、これは陽動ではない。攻撃だ。おそらく、もっと大きな氷塊に時限爆弾を埋め込んでマスドライバで飛ばし、着弾直前に爆発させる。丁度、氷塊がで直径一メートル程度の破片に分解する程度にだ。氷とはいえ、破片一個の質量は数トン、秒速数十キロに達する。
「全艦、防空体制、戦艦群は主砲掃射、迎撃、急げっ‼」

前面に並んだ巨艦群が一斉に主砲を咆吼させ、無数の光の槍で氷塊群を掃射する。直撃を受けた氷の破片が一瞬に蒸発、あるいは僅かに含まれた岩塊や金属塊が吹き上げる五彩の煌めきがひっきりなしに明滅し、周囲の闇を押し広げた。
それでも、第五分艦隊の打ち上げる猛烈な砲火をなお半分近いの破片がすり抜けた。
「近接対空射撃、照準開始…」
戦艦群が敢えて回頭し、近接対空射撃用のレーザー機銃群の装備された舷側を敢えてさらけ出す。重巡航艦がこれに倣い、駆逐艦もまた戦艦の影から出て主砲射撃を開始する。
その時…
「後背より…敵基地からのレーザー水爆宙雷です。数四〇〇…いえ、五〇〇…来ます」
各艦の砲術長が歯ぎしりする。帝国軍基地の存在を忘れていたわけではなかったが、攻撃は予測していなかった。
「くそ…くそ、こんな、こんな…!!」
旗艦『ラクシュミー』ブリッジで、ホイットニーは第一関節近くまで埋まるほど肘掛け握りしめた両手をわなわなと震わせていた。だから言ったではないか。第五分艦隊だけでの基地攻撃は無謀だ、と。艦隊主力を挙げて当たるべき敵だと。
ホイットニーの横顔を、スクリーンの煌めきが白々と漂白する。氷の弾丸と基地からの宙雷攻撃が遂に第五分艦隊の艦列に達し、最初の犠牲者が吹き上げた焔が視界スクリーンの半ばを彩ったのだ。もはや作戦も何もなく、同盟軍艦艇は自らの生命を救うための戦いをひたすら続けざるを得なかった。
氷と焔による挟撃がようやく終幕を迎えたのは五日の午後、すでに時計の針は標準時で一五時を指していた。この間に第五分艦隊の受けた損害は、喪失艦艇一一七隻、損傷艦艇八八隻を数える。損傷率二割強。喪失艦艇の内、六〇隻あまりは運荷艇改造の短距離磁力砲艦の奇襲によるものとは言え、軍人としてのホイットニー少将の矜持を地に叩きつけ、泥の中に踏みにじって余りあった。
怒りの余り、分艦隊の全兵力をひっさげてヴァンフリート八へ向かおうとしたホイットニーだったが、シグニチャー中佐以下の必死の制止が辛うじて彼の暴走を食い止めた。すでに恒星ヴァンフリートの活動は始まっており、第五分艦隊がヴァンフリート八へ達する前にこの宙域は磁気嵐に覆われてしまう。
「そうなってしまえば、一〇〇隻足らずの敵艦隊を捕捉することなどできるものではありません。いずれにしても奴らはここへ来ます。それを待てばよいのです。無闇に動き、敵につけ込まれては、みすみすフルマンティ少将の轍を踏むはめに陥るだけのことです」
理路整然とシグニチャー中佐に説かれるとさすがのホイットニーも、大量に頭に上った血を、無理にでも下げないわけにはいかなかったのだ。
一一月六日…戦場は再び恒星ヴァンフリートの吹き上げた膨大な荷電粒子の渦に覆い尽くされ、異様な沈黙の中にこの細やかな戦いのクライマックスを迎えることになる。

脱出

『ヤン・ウェンリー伝』の著者であり、ヤンにとって最も近しい近親者の一人となる少年は、まだこの時、数ヶ月後に迫った師父との出会いへの予感もなく、孤児の収容施設で日々を送っていた。

「あの時、私は何もしなかったし、何もできなかった」

後年、元帥の地位に昇ってから、ヤン・ウェンリーは一度だけ、この時のヴァンフリート宙域での戦いを振り返ってそう言ったことがある――『ヤン・ウェンリー伝』の中で、ヴァンフリート七‐四基地を巡る戦いに触れられているのはただ一行、それだけである。

特に、戦いの終幕近くにおいてヤンの言葉はほぼ正確な事実の描写だった。

一一月六日の時点において、ヤンを乗せた同盟軍第八艦隊旗艦『クリシュナ』は、ヴァンフリート八から約六六〇光秒の宙域にあり、当該宙域を航行中であるはずの『帝国軍の主力』を求めて空しい努力を繰り返していた。

正確に言えば、『空しい』というのは当たっていない。第八艦隊は確かに一度、帝国軍の制式艦隊の一部と遭遇したのである。

「敵約三〇〇〇、ヴァンフリート八方面へ向かうもののごとし!!」

先遣偵察隊の報告が『クリシュナ』に飛び込んだのが四日。第八艦隊主力がヴァンフリート星系にタッチダウンした直後の知らせだった。そのまま全速で向かえば、五日にはヴァンフリート七でホイットニー艦隊と合流できたはずだったが、アップルトン中将は敵主力への攻撃を選んだ。

「敵も、こちらが第八艦隊をヴァンフリート星系に置いていることを知っている。戦いを望むなら三〇〇〇では不足だ。あれは前衛部隊であり、本隊は別にいる。彼らを追尾していけば、敵の主力の位置を突き止められるだろうし、うまく発見できれば、磁気嵐に乗じて奇襲も可能だ」

それが幕僚団の主張であり、アップルトン中将もそれを容れたのである。

が、実際問題として敵の主力はなかなか発見できなかった。

逆に、敵の『前衛部隊』に感づかれてしまったのだ。接触を確実にするために偵察部隊を増派したのだが、この増派部隊が触接を開始するやいなや、帝国軍艦隊は俄に艦首を転じた。転じただけでなく最大戦速で星系を離脱するコースを遁走し始めたのである。

アップルトン中将だけでなく、ヤンを含めた第八艦隊の首脳全員が、これには驚いた。帝国軍の動きに整合性を見いだせなくなったからだ。逃げるにしても、帝国軍の主力部隊へ第八艦隊を誘導しようと言うのであれば、もう少し逃げ方がある。

「これではまるで悪戯の最中を見つかって、後先考えずに逃げ出す子供みたいではないか」

アーバークロンビー少佐の意見は直感に基づくものでしかなかったが、事実のすぐ脇を突き刺すものだった。

「これでは敵の主力はまだ星系にタッチダウンしていないと結論づけるしかありません」

「そんなはずはない」

ビョルケルが茹で上がった。

「仮にこの部隊が陽動部隊だったとしても、こんな動きをする陽動部隊があるものか。陽動なら陽動らしく、いかにもこちらが主隊だとみせかける動きをするはずだ。彼らは我らが星系内にいる

と予想しており、意外な遭遇に狼狽えているのだ。狼狽が収まれば、態勢を整えるためにも、主力との合流をまず図るはずだ」
そうかな…とはヤンである。今回、味方もそうだが、帝国軍の動きも論理的な説明がつかないものが多いが…第八艦隊主力がヴァンフリートの星系内に駐留していると帝国軍が予想していた、というのはいい。まさか前回の戦いが終わってすぐ、艦隊の司令部が叙勲のために首都星（ハイネセン）へ呼び返されているなど、帝国軍の予想の埒外のできごとだろう。
だが、帝国軍は本当に制式艦隊をヴァンフリートに送り込んできているのか。送り込んできているとしたら、それによって彼らが解決しようとしている戦略的課題は何なのか…そう考えて、ヤンは頭を振る。
――中途半端すぎるな。
帝国軍が本気でヴァンフリートへ進出しようとしているなら、その兵力が一個艦隊と言うことはあり得ない。
であれば、やはりこの三〇〇〇隻は陽動部隊であり、帝国軍の真の狙いはヴァンフリート七の基地の撤収ということになる。だが、この陽動部隊以外に、どうやらもう一個の陽動部隊がいると考えないと説明がつかないのは、最初のごく短い、ただ一回切り傍受された暗号通信だ。帝国軍は複数の陽動部隊を動かしているというのか、何のために…？
フレーゲル男爵の暗躍とラインハルトとの確執、ラインハルト部隊とは独立して派遣された陽動部隊の存在など、ヤンとても神ではない以上、視野が及ばないのは当然だった。だが、それでも現在、第八艦隊が追っている三〇〇〇隻ばかりの帝国軍艦艇は、どの角度から考えてみても陽動部隊であるとの結論しか出てこない。
ヤンは発言を求めたが、ほとんど無視され、希にアップルトン中将の目に止まって発言の機会を与えられても、ビョルケル准将以下の幕僚団に遮られ、時に強引に意見を否定されて、ついにその考えが艦隊の行動方針として受け入れてもらえることはなかった。その結果として、第八艦隊は幻の帝国軍主力を追って彷徨を続け、帝国有数の大貴族を戦死させる栄誉を自ら手放したのである。第八艦隊の指揮権を持たぬ以上、ヤンもまた『何もしなかったし、何もできなかった』結果に終わったのは当然のことだった。
勿論、当の帝国軍部隊を『督戦』していたはずのフレーゲル男爵もその英雄的行動を公に自慢できるほどのことはなかった。思いもかけぬ近距離に一万隻を超える同盟軍艦隊の大部隊が出現したとの報告を受けた時のフレーゲルは狼狽の局に達した。
「今少し、現宙域に留まらねば、陽動としての任を果たしたことにならぬではないか」
フレーゲルはほとんど半狂乱だった。最初はそれでも体裁を整えた『命令』だったが、マントイフェルに拒絶されると、直ちに居丈高な怒声に変わった。それでもこの剛直で頑固な軍人が従わぬと見ると、部下の装甲擲弾兵を『ヴィエーナ』のブリッジに乱入させての強要に及んだ。
自らの生命を惜しむものではないが、こんな大貴族のどら息子に指揮を委ねた結果として部下たちを待ち受けているだろう事態を思えば、他に選択肢はなかった。マントイフェルは、その軍人としての人生の中で最も忸怩たる思いを抱きつつ、撤収命令を下達せざるをえなかったのだ。曰く、『全艦、速やかに本宙域を撤収。撤収先はイゼルローン要塞』
ラインハルトの動きは完全にホイットニーの予想を裏切った。

一一月六日に始まった、この年最大規模の磁気嵐は、ヴァンフリート星系全域での電子戦装備をほとんど使用不能に陥れて丸四〇時間以上荒れ狂い続けた。
ホイットニーは分艦隊の残存兵力のすべてをヴァンフリート七‐四宙域に展開し、可能な限りの探知網を広げてラインハルト部隊の侵入を待ち受けた。指揮官のホイットニー少将の本音を言えば、すぐにでもヴァンフリート八へ赴き、同盟軍に何度も苦汁を舐めさせた帝国軍指揮官の直属部隊を狩り立てたかったのであるが、磁気嵐がおさまるまでは実行不可能だった。煮えくりかえるような思いを必死に押さえながら、ホイットニーは待ち続けたのである。
だが、磁気嵐がピークを過ぎ、探知網が回復し始めた七日午後になっても帝国軍の動きは捉えられなかった。
「なぜだ、なぜ、帝国軍は動かん。やつらは何を待っているのだ!?」
ホイットニーの質問に、シグニチャー以下の幕僚は顔を見合わせるばかりで回答を持ち合わせなかった。彼らにも帝国軍の意図は全く不分明だった。あれほどの規模の陽動と、おそらくは数十基のマスドライバを使っただろう氷塊群による攻撃。あれが、ホイットニー艦隊を帝国軍の基地から引き離す策でなくて、何だったというのだろうか。
ホイットニー艦隊の探知網が微かな通信波を傍受したのは一一月七日午後八時一五分。〇・一秒以下の恐ろしく短い通信であり、磁気嵐の余波でほとんど解読不可能なほどに信号が歪んでいたが、帝国軍の使う喚き声（シュライ）としての特徴を僅かに残していることが確認され、第五分艦隊を色めき立たせた。
それが帝国軍の動きを告げる…陽動にしても意図せざる漏洩にしても…ものであると同時に、発信源がヴァンフリート七に近い惑星間宙域。それもヴァンフリート八から七へ接近する軌道上での発信と考えられたからである。
ホイットニーは直ちにすべての探知網をその宙域に向けさせると共に、磁気嵐の収まりきらない中、無理を押して三〇〇隻の別働隊を向かわせる。
「移動中の飛翔体らしきものを発見。ヴァンフリート七へ向かいつつあり…」
別働隊から連絡が入ったのが午後一〇時二三分。
ホイットニーは決断した。
「本宙域から出動する」
「しかし…これも陽動かも知れません」
「君にはすべてが陽動に見えるのだな」
抑え切れぬ苛立ちを叩きつけるように、ホイットニーはシグニチャー中佐を怒鳴りつけた。
「連中がこれまで何をしてきた。全部陽動だ。これも陽動かも知れん。だが、こんな陽動をやって、連中は何をしようというのだ」
「――しかし…」
「敵基地の連中には逃げられるかも知れん。だが、それが何だというのだ。これだけコケにされ、損害を重ねさせられた以上、敵兵を脱出させぬというだけでは我が艦隊の面目は救われん。何としてでも敵の主力部隊を捉えて撃破しない限り、我が艦隊は敵の陽動に最後まで踊らされ続けた愚か者ということになってしまう。断固、出撃し、陽動部隊だろうが何だろうが、帝国軍の艦隊と一戦を交える、これあるのみだ!!」
ホイットニーは知らなかった。ラインハルトの狙いが、まさに陽動に次ぐ陽動で同盟軍を翻弄し、冷静な戦術判断を失わせることにあったことなど。ホイットニーの言葉は、彼がすでに戦場での勝利のための条件…敵の戦略目的を挫折させ、自らの戦略課題を解決すること…を忘却の淵、あるいは記憶のダストシュートの

中に放り込んでしまっていることを示して余りあった。
分艦隊司令官への反論は、しかし、上がらなかった。幕僚達も帝国軍の動きに惑わされ続けた結果、その意図を見失っていた。確たる論拠をもてぬ以上、上官の判断を唯一のものとする…予期につけ悪しきにつけ、それが軍隊だった。
こうして同盟軍第五分艦隊はヴァンフリート七‐四基地の包囲を解き、ヴァンフリート八との惑星間宙域へ向かって出撃する。既に日は代わり、一一月八日午前四時三三分のことである。

ラインハルトが麾下の部隊と共にヴァンフリート八の外惑星環を離れたのは、七日一六時三五分。磁気嵐が最盛期を過ぎ、辛うじて近距離の航法レーダーが使用可能になったばかりだった。ヴァンフリート八まではほとんど事前の計算に基づく計器飛行となるが、磁気嵐が完全に止んでしまってからでは遅すぎる。ラインハルト麾下には重巡航艦五隻の他は駆逐艦二隻と高速輸送艦三隻しかいないが、同盟軍は第五分艦隊一〇〇〇隻だけではなく、第八艦隊主力一万隻が至近の宙域にいる。
「大丈夫だ。際どいが、必ず成功する」
自信に満ちて言い切ったラインハルトの言葉に疑いを差し挟む者はもはや存在しない。議論の段階はすでに終わっている。今は行動あるのみ…それが、ラインハルトに従う者全員がそう考えていた。
最大戦速で惑星間宙域を突っ切ること一〇時間。この間が同盟軍の探知に曝される、最も危険な時だった。
『『フォルカー』、こちら『オットー』』
ヨハン・クレメンツの『オーベルライヘンバッハIX』から連絡が入ったのは、一〇隻が航路半ばにさしかかった時だった。
『例の行動に移りたい。許可を願う』

作戦の最終段階、ヨハン・クレメンツが提案し、ラインハルトは合理性を認めるものの、実施者にとっての危険が高すぎるとして保留していた今一段の陽動行動があった。ヨハン・クレメンツは、自らを実施者に擬して実施の許可を要請してきたのだ。
「卿の親友だったはずだ。再会を祝したいのではないのか？」
『親友を無事に救い出すためだ。少しでも可能性を高められるなら、やる価値はあると考える。私が出迎えに行くより、彼は喜んでくれるはずだ』
相変わらずヨハン・クレメンツの応答には感情の起伏はない。
つかの間、ラインハルトは考え、そして頷いた。
「許可しよう。武勲を、『オットー』」
『感謝する。卿に武勲を』
熟練した腕に操られ、『オーベルライヘンバッハIX』が艦列を離れるのを視界スクリーンに確認しながら、ラインハルトはキルヒアイスの視線に気付いた。
「彼なら大丈夫だ。無意味に死を選ぶような男ではない」
「いえ…心配しているのではないのですが…」
「――？　だったら何だ。お前らしくないな、キルヒアイス。気にかかることがあるなら言っておいてくれ」
「ええ…いえ、何でもありません。お気になさらないで下さい、ラインハルトさま」
言ってくれ、と言われて言えることではないな、とキルヒアイスは思う。果たしてラインハルトさまは気付いておられるのか。
ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーは、今はラインハルトに従っているが、その狼の目の底には常に敵意と殺意が隠れている。彼の姿が見える間はまだよい。姿さえ見えれば警戒のしようもあるし、ラインハルトに指一本触れさせるものではない。しかし、視界から姿を消し、完全に単独行動となったヨハ

ン・クレメンツが果たしてラインハルトの忠実な部下としての行動を続けようとするか否か、キルヒアイスには自信がなかったのだ。
だが、だからといってヨハン・クレメンツの行動を縛るのもまた無意味だった。ここはヴァンフリート星系、同盟の版図深く踏み込んだ完全な敵地なのである。敵地のただ中で味方を疑う愚を、キルヒアイスは誰よりもよく心得ていた。

『敵触接を受く』
『オーベルライヘンバッハⅨ』から極端に短い通信が入ったのは七日の午後一一時過ぎ。ヴァンフリート八まであと三時間の宙点(ポイント)だった。
「敵は動きますか？」
不安を抑えかねたようにロイシュナーが問う。
「動く」
ラインハルトは一瞬も躊躇わなかった。
「敵はしびれを切らしている。必ず動く…全艦へ連絡。航路このまま、予定通りヴァンフリート七外惑星環へ入る。輸送艦指揮官へ連絡、船外作業機の調整を急げ」
「了解であります」
息詰まる三時間。
逆探知を避けるために、前方を操作する航法レーダーも極く短距離にしか使えない。
ヴァンフリート七外惑星環まであと一時間という宙域で、そのレーダーに反応が現れ、『ノルデンⅦ』ブリッジの空気は凍り付くような緊張に満たされた。数分後、それが外惑星環からはぐれた氷塊であることが判明し、ラインハルトとキルヒアイスを除く艦橋要員全員が安堵の吐息を漏らした。
「外惑星環宙域に入ります」
ミューレン航海長の声に緊張が高くなった。七‐四宙域まで外惑星環に沿って半周、約四時間を最大戦速で突っ走る。綱渡(ザイルタンツ)りほどのことはないが、極めて危険度の高い航行には違いない。まして――同盟軍が基地周辺を完全に空にしたという保証は何もないのだ。
ラインハルト艦隊がヴァンフリート七‐四基地宙域に達したのは一一月八日午前六時過ぎ。先行した巡航艦『メルンベルクⅧ』からのレーザー通信が入ったとき、『ノルデンⅦ』ブリッジは歓声に包まれた。
『我、ヴァンフリート七‐四宙域に達す。付近に叛徒の艦隊を見ず。繰り返す、我、付近に叛徒の艦隊を見ず』
「レーザー通信を基地へ向けよ。リーフェンシュタール准将を呼び出し、脱出の準備を進めさせろ。雑嚢一個、それ以外の荷物は持たせるな。時間は最大で四時間だ。それ以上は待てない。遅れたら置いていく、と…」
「閣下‼」
不意に遮られ、ラインハルトはわずかに顔をしかめたが、ミューレン大尉には続きを促した。
「これをご覧下さい！」
ミューレンもすでにラインハルトの気性は十分に心得ている。言葉での説明を省き、いきなりビュー・スクリーンに映像を転映した。
「これは――――…!?」
岩塊に偽装する余裕はなかったに違いないが、存在を予期せずに接近していれば手ひどい報いを受けたに違いない。

『メルンベルクⅧ』の高感度カメラが捉えたものは、小型だが強力な破壊力を持つ無数の小型宇宙機雷が埋め尽くす基地周辺宙域だった。間隔は数十メートル。しかし、外惑星環の中、宇宙艦を操って入り込める間隔ではない。
「やってくれる」
「基地と繋りました…指揮官が出ます」
『遅かったじゃないか』
ビュー・スクリーンの一角にバストショットで浮かび上がったリーフェンシュタール准将は、一瞬の怪訝そうな表情からすぐに笑顔になった。ラインハルトをかつてクリスマスのパーティで見かけた幼年学校の生徒と認めたようだった。もっともラインハルトを見誤る人間は滅多に存在しないが…とはキルヒアイスの密かな思いだったが。
『久しいな、ミューゼル…大佐か。来てくれると信じていた』
「恐縮です、准将」
敬礼し、ラインハルトは短く告げる。
「時間がありません。最大で四～五時間しか、この宙域には停泊できないのです。大至急、全将兵を集め、撤収の準備を整えて頂きたい」
『分かった。すぐに命じる』
一瞬リーフェンシュタール准将の姿がスクリーンから消え、総員退去準備…と怒鳴る声が小さく聞こえた。すぐにリーフェンシュタールの姿はスクリーンに戻ってきた。
「準備命令はすでに出していたらしいですね」
「そうだな、さすがだ」
キルヒアイスとのやりとりはさすがにスクリーンの向こう側には届かなかっただろう。ラインハルトに視線を戻したリーフェンシュタール准将の表情は硬く、厳しかった。
『で、どうやるんだ？』
「機雷ですね。ご安心頂きたい、準備はしてきました」
『どうやって？ 私の見るところ、少なくとも一〇万個はばらまいて行きやがったぞ。残念ながらミサイルも磁力砲弾も撃ち尽くした。ビーム砲で薙ぎ払おうにも、敵と撃ち合ったせいで三割も稼働していないんだ。こちらで見る限り、一片五〇メートルの格子状に配置されているし、どうやら重力波感応らしい。駆逐艦…いや、運荷艇でも下手をしたら反応するぞ。すり抜けるのは無理だ』
「全員に宇宙服を着用させてください。宇宙遊泳をさせるつもりはありません。運荷艇用のコンテナはありますか？ あるなら、ありたけ準備し、宇宙服着用の上、その中に乗り込ませてください」
『コンテナ…だと？』
リーフェンシュタールは、どうするつもりだ、とは続けなかった。覇気に満ちたラインハルトの表情を信じたということもあるだろうし、また議論している時間などほとんどない現実を正確に認識しているに違いなかった。
再びリーフェンシュタールの姿がスクリーンから消えると同時に、ラインハルトはレーザー通信で高速輸送艦を呼び出した。
「船外作業機を全機出し、曳航用フックを持たせて基地へ向かわせろ。機雷が敷設されている。一片五〇メートルの格子状配置だ。その間をすり抜けて、基地将兵を載せたコンテナを曳航させるのだ。時間がない。急げ」
叫ぶような声で応答が返ってくる。
ラインハルトはシートに背を投げ、睨み据えるように熾烈な眼光を虚空に向けた。
「敵にもできる奴がいるらしいな…機雷封鎖とは」
「ええ。ここまでやったということは…航路指示を修正しますが、宜しいですね」

「準備していると見るべきだな。頼む…ロイシュナー中佐」
「は――――」
「敵は完全にここをがら空きにしたわけではなさそうだ。警戒を怠るな。センシングポットをありたけ射出して、少しでもおかしな動きがあれば報告させろ」
「了解です」
　強力な超小型核融合炉で駆動される外部骨格と推進器を装備した船外作業機が、三隻の高速輸送艦から次々に送り出され、宇宙機雷原をすり抜けて基地へ向かう。その数、約五〇〇。最大加速で基地到達まで約二時間。運荷艇コンテナ一個に、二機の船外作業機が曳航用フックで機体を固定して、再び外惑星環の外へ向かう。一つのコンテナ当たり二〇名ほど乗り込んでいた将兵たちを、四隻の巡航艦と二隻の駆逐艦が次々に舷門へ収容していく。
　生命がかかっているだけに作業は滞りなく、かつ速かった。それでも、予定の最大五時間を守りきることはできず、最後の一人であるリーフェンシュタール准将を『ノルデンⅦ』に迎え入れた時には、すでに作業開始以来七時間弱が経過していた。
「基地司令官を収容、全員を収容確認しました」
「キルヒアイス？」
「航路指示は通達済みです」
「よし、では全艦、ただちに発進せよ」
　キルヒアイス経由で伝えられた航路指示は各艦の航法士官を驚かせた。ヴァンフリート七と八の中間宙域。彼らがやって来た航路をそのまま逆にたどるような航路だったのである。
　気でも違ったのか、と言う声はしかし、どの艦からも上がらなかった。
「戦場で生き延びたいなら、文句を言わずに戦争の天才に従うこと、これあるのみ」
　『ハイテルバッハⅡ』艦長オイゲン大佐はそう言い放ち、ジンツァー大佐は『ミューゼル大佐は最悪の戦場から生きて帰った。今回の戦場は最悪ではないが、最悪に近い。ゆえにミューゼル大佐に従うのは自明の理である』と応じた。九隻の艦艇とその搭乗員すべてが、最短の時間でラインハルトの指示に従ったのである。
　そしてラインハルトの予測は再び的中した。
　自分が同盟軍指揮官ならどう罠を張るか…作戦開始前、ラインハルトがキルヒアイス相手に何度も繰り返し確認したのがそのポイントであり、ヴァンフリート七‐四基地の機雷封鎖は予測の中に入っていた。
　さすがにラインハルトが、『まさか、ここまでやってのける奴はいないだろう』と呟きつつ、なお作戦シミュレーションのシナリオに入れたのが、ヴァンフリート七外惑星環の各所に数隻ずつ、送り狼ともいうべき部隊を伏せておくことだった。これらの部隊は、ラインハルト艦隊が通過するのを待って追尾を開始し、最終的に数十隻から一〇〇隻におよぶ艦隊となってラインハルトを追い立てる。追い立てる先は、陽動でつり出された同盟軍艦隊の主力が彷徨している宙域だった。
　万一にも敵に自分と同様、先は見えるが上の受けが悪いために艦隊の行動方針に主導権を握れない、優秀な作戦参謀がいたらどうなるか。その設問に対してラインハルトが出した答えがそれだったのだが、ヴァンフリート七の衛星軌道離脱直前、最後尾の駆逐艦が、追尾してくる二〇隻あまりの艦艇群を補足した時、キルヒアイスは背を這う冷たい戦慄を実感した。
　キルヒアイスは無論、ラインハルトも知らなかったが、ヤンが作戦参謀の権限において万一の際の緊急策（コンティンジェンシ・プラン）として用意しておいた指示だった。ホイットニー少将もシグニチャー中佐も、アップルトン司令部からの指令の一部として機械的に実行した

だけのことだったのだが。
「ラインハルトさま…これは」
「やはりな…まぐれと言いたいが、前回の罠といい、見くびれる相手じゃないな。とにかく予定通りやる。それしかない」
ラインハルト艦隊は速度を上げる。が、追尾する同盟軍の艦艇もそれに合わせて加速する。だけでなく、ラインハルトの読み通りヴァンフリート七外惑星環のそこここから増援の部隊が加わり、惑星間宙域に出たときには合わせて五〇隻強の同盟軍艦艇が複数の方向からラインハルトを追いつめにかかっていた。
艦艇の性能はほぼ同等。しかし、星系内の地勢に通じた同盟軍艦艇はわずかずつではあってもラインハルト部隊との距離を詰めてくる。一方向からだけならともかく、複数方向からの追撃であり、急角度に針路を変えて敵を振り切ることも難しい。
しかし———
「Aポイントまであと三〇分、Bポイントまで五〇分です」
『ノルデンⅦ』ブリッジではミューレン大尉がカウントダウンを始めていた。
「後方へのレーダー攪乱を強化します」
「速度、どうか？」
「コンマ〇二減速の要あり。指示します」
「距離、詰まります。戦艦主砲射程まであと〇・〇八光秒…」
シェーラー砲術長の声に緊張が高まり、叫ぶような調子に変じた。
「敵、発砲したっ‼」
「回避を———」
「不要‼」
上がりかけた悲鳴を、鞭を思わせるラインハルトの叱声が圧した。
「当たりはしない。速度とコースを維持せよ」
「エネルギー前哨波探知。来る…今っ‼」
至近を通過したエネルギーの波が『ノルデンⅦ』の中和磁場を虹色に発光させ、衝撃が艦体を震わせ、軋ませる。内臓がのど元へ突き上がってくる恐怖と衝撃が、搭乗員の額に汗を噴き出させ、悲鳴が咽喉の奥でかみ殺されて呻き声に変わった。
「いい腕だ。しかし、当たらなければどうと言うことはない」
平然と論評し、ラインハルトはレーザー通信の送信スイッチを入れた。
「艦隊の全員に告ぐ。こちらはミューゼル大佐だ。卿らの指揮官として、必ずこの戦場からも勝って帰ることを諸君に約束する。狼狽えず、各自の職務を尽くせ。そうすれば、必ずこの戦いに勝てる」
「第二撃、来ます‼」
『ノルデンⅦ』が再び虹色の閃光に包まれた。衝撃が『ノルデンⅦ』を貫き、急激なGの変化が全員をよろめかせた。
「損傷報告」
ロイシュナー中佐の叫びに応じるのは『損傷なし』、『異常なし』の声。ほっと息をつき、ロイシュナーは額の汗を拭う。
「ミューレン大尉、距離は…⁉」
「Aポイントまであと五分、カウント開始します」
「閣下」
電子戦士官が、平静を保とうとする努力も露わにラインハルトに声をかける。大佐であるラインハルトを閣下と呼ぶのは明らかに誤りだが、もはや誰もラインハルトをそう呼ぶことに違和感を感じなくなっていたのだ。
「新手か？」
対照的にラインハルトの声は平常のそれから一ミリも動揺し

ていなかった。
「大軍です。約八〇〇隻…」
ラインハルトとキルヒアイスが顔を見合わせて微笑い合うのを目の当たりに、電子戦士官は奇跡を目にした者の表情になる。
「最もやっかいな相手は敵の分艦隊主力だが、これで所在が明らかになった以上、怖れるには足らない」
敵の制式艦隊主力部隊は既に所在が暴露されている。間に合うように戦場には到着できないことも確認済みである以上、こちらも怖れる必要はなかった。
その間にもミューレン大尉のカウントダウンは続き、すでにゼロに近い。
艦首から、制動噴射の白い炎が長く噴き伸び、僅かなマイナスGがつんのめるような感覚を抱かせる。追尾してくる同盟軍からの発砲が、続けざまに中和磁場を閃かせたが、弾着距離の報告と損傷確認以外の声は一切消えていた。
敵を至近の後背に受けての急減速。誰もがその大胆さに呆れ、敵との距離の詰まる恐怖と緊張に耐えていた。私語を交わす余裕は、ない。
「一〇秒前…」
ミューレン大尉の単調なカウントが続く。
「…三、二、一、今っ」
舷側から爆発的な白炎が奔出し、九隻の帝国軍艦艇が蹴飛ばされたように横滑りする。
驚いた同盟軍の将兵が唖然として見守る中、今度は艦首と艦尾の舷側制御から光の帯を引きながら、ラインハルト艦隊の各艦は急速な機動に移った。文字通りに九方向へ『弾け飛んだ』としか形容のしようがないほどの急速な転針。
度肝を抜かれた同盟軍艦艇は一瞬、射撃照準の修正を忘れた。
一瞬後、慌ただしく射撃諸元修正の命令が走ったが、悲鳴がそれに続いた。
「全艦、任意方向へ回避、急げ!!」
ラインハルト艦隊が跳ね飛んだ空域を切り裂くように、無数の氷塊が同盟軍艦隊へ向かって飛来してきたのだ。四日前、ラインハルトがヴァンフリート八外惑星環から射出させた氷塊約三万個。このタイミングでこの宙域に到達させるために、わざと初速を抑えて射出した分だった。
ラインハルトが展開させていた強力なレーダー攪乱波を、同盟軍は射撃照準妨害のためと受け取っていたが、同時に彼らの視界からこの氷塊群を隠す目的を兼ねたものだったのである。
ラインハルトの辛辣さは、同盟軍が氷塊を認識すると同時に、氷塊に仕掛けさせておいた指向性の爆弾を爆破させたことだった。五〇〇トンの氷塊が一個当たり数十個、全部で一〇〇万個以上に分裂。それぞれが数トンの質量を持った膨大な破片が、さながら散弾のように同盟軍の艦列に向かって漏斗状に広がったのだ。
同盟軍は大混乱に陥った。
破片の飛来速度は、艦艇にくらべて遥かに遅い。しかし、すでに戦艦射程に入り、さらに最大戦速で敵を追っている。九隻のラインハルト艦隊に対して、彼らは八〇〇隻強。密集とは言わぬまでも、完全な任意方向への離脱はとうてい不可能だった。
爆発が生じた。
巡航艦『クィンシー二』が回避し損ねた氷の弾丸をもろに舷側に浴びたのだ。秒速数十キロの相対速度で命中した破片は、搭乗員にとっては死に神の咆吼にも等しい異音を発しながら艦体深くにめり込み、八基ある動力核融合炉を粉砕した。誘爆は免れたものの、『クィンシー二』の動力は一瞬で停止した。
慣性航行に陥り、非常用動力へ切り替えた『クィンシー二』の

搭乗員は、蘇った視界スクリーン全面を占めて僚艦『トゥインシティ五』の艦尾が広がるのを目の当たりにして悲鳴を上げた。
「回避！」
　艦長の叫びも空しく、『クィンシー二』の艦首が『トゥインシティ五』の艦尾舷側に激突した。次の瞬間、奇怪な『く』の字を描いた二隻の巡航艦は連鎖する純白の火球に包み込まれた。『トゥインシティ五』の艦尾発射管に装填されていたレーザー水爆ミサイルの誘爆だった。
　同盟軍のすべての艦艇が『クィンシー二』や『トゥインシティ五』のような不運に見舞われたわけではなかったが、氷の散弾で掃射されて艦列は滅茶苦茶に乱れ、指揮系統は大混乱を来した。
　ホイットニー少将は顔面を朱に染めて怒り狂ったが、艦列を立て直し、追撃のための指揮系統を回復できたのが五〇分後というのではどうしようもなかった。
「まだワープには入っていないはずだ。追え、絶対に逃がすな‼」
　ホイットニーの怒号にシグニチャー中佐は蒼白な顔で応じざるを得なかった。
「ダメです。すでに一〇分前にワープに入った模様。先行の巡航艦が重力波をキャッチしました」
「な…んだと、そんな、こんな大質量の近くでワープだと？　そうか、逃げられぬと見て、帝国軍の奴らは自殺行為に走ったのだな」
　大質量付近でのワープイン、あるいはワープアウト（タッチダウン）が不可能、強行しても正常に通常空間へ戻ってくることはできない。彼らがどうなったかは、死後の世界を語るに似て誰にも知り得ないことだった。現実に戻ってきた宇宙船はただの一隻もない。敵に追いつめられた軍艦が、惑星や恒星の至近宙域で現実の死よりも不確定の死を選択することは希とは言え、滅多にないことではなかった。
「いえ…」
　シグニチャー中佐は顔を泣き出しそうに歪めた。
「違います。彼らは無事に正常なワープに入っています」
「な———」
　澱み点です…それが、シグニチャー中佐が絞り出した返答だった。ヴァンフリート八と七の引力が拮抗するこの宙域には、相互の質量の影響が打ち消されて一時的なワープポイントが出現する。前回の作戦時、それを察したラインハルトはとっておきの脱出手段としてこの澱み点を用意しておいたのだ。
「奴ら、最初からそのつもりで氷塊を…」
　全身から力が抜け、ホイットニーは指揮シートに折り崩れた。
「くそ、おのれ…くそ…」
　もはや言葉にならなかった。

　しかし———
　ラインハルトの逃走劇の最終段階はホイットニーやシグニチャーが想像するほど気楽なものではなかった。
「振り切ったな…」
　ラインハルトが、従卒から受け取った熱いタオルで僅かに浮かんだ汗を額から拭い落としたときだった。
「前方、敵巡航艦、距離、至近‼」
　シェーラー大尉の叫びが、『ノルデンⅦ』ブリッジの空気を一瞬に氷点下にたたき落とした。
　まさに至近だった。最大倍率の視界スクリーンの中、同盟軍巡航艦のスマートな艦首に装備され、開け放たれた中性子主砲の砲口がはっきりと見えるほどだった。
「応射！」

「ダメだ、照準、間に合わない」
「舷側噴射弁全開、焼けついても構わん、噴かせっ、早く」
「前面中和磁場出力…ダメです。機関出力、ワープ機関へ集中切り替え済み…切り戻せ――ない。間に合わない」
悲鳴と怒号が飛び交う中、ラインハルトは唇を噛みしめて敵の巡航艦をにらみ据えている。ひどく長く感じられたが、その間は一〇秒とはなかっただろう。一〇〇〇隻近い同盟軍である。一隻くらいは彼らの動きを予測し、回り込んで待ち伏せを考える艦長がいてもおかしくない…
不意に笑いがこみ上げ、ラインハルトは浮かせかけた身体をシートへ戻した。艦のことはロイシュナー中佐以下に任せたのだ。自分にできることは何もないのに、ここで狼狽え騒いで何になるというのか。

瞬間――

閃光と衝撃、そして眼底を焼き尽くすかと思われるような白光がスクリーン全面を覆った。自動的に入光量を絞ったスクリーンが一瞬暗転し、元に戻ったとき、数秒前までスクリーン一杯を占めていた同盟軍巡航艦は脈打ち、拡散する火球に取って代わられていた。
その火球と『ノルデンⅦ』の間に立ち塞がるように一隻の帝国軍巡航艦が、こちらも損傷を負ったらしく艦の中央付近から爆発光の尾を噴き上げていた。
「『オットー』か⁉」
ラインハルトはその艦が『オーベルライヘンバッハⅨ』であることに気付いた。
「こちら『フォルカー』、『オットー』応答せよ。損傷状況を知らせよ」
何度かの呼びかけの後、視界スクリーンの一角が切り替わった。
『こちら『オットー』、何度も喚かなくても聞こえている』
「負傷したのか⁉」
『敵よりも早く撃てなかったので、『オットー』で『フォルカー』の盾になるしかなかった。大丈夫だ。艦の中央部に…直撃三射。二射は突き抜けたが、一射は…ブリッジの防禦装甲を半壊させた』
顔面の右半分を朱に染めたヨハン・クレメンツの微笑は凄惨だった。
『火災は五分以内に鎮火できる…ワープは可能。戦死者はなし。あとは副長に任せるが、よろしいか。幸運だ。負傷者は…一名。重傷だ。即時の入院と手術が必要だと軍医が言っている』
「ならばさっさと交替して、治療へ向かえ、この馬鹿やろう」
驚いたのはラインハルトだった。
リーフェンシュタール准将がいつの間にかラインハルトの傍らに立ち、指が白く見えるほどに握りしめた両の拳を震わせていたのだ。
「その負傷者一名がお前だというくらい、お見通しだ。死なない内にさっさと交替しないか⁉」
『恐縮だ、准将閣下。指揮の交替許可を、先任指揮官』
「許可する…大佐」
呼びかけ、ラインハルトは後悔した。
待ち構えていたらしい。軍医と衛生兵が数名、飛びかかるようにしてヨハン・クレメンツを指揮シートから抱え下ろし、自走ベッドへ運んでいく。おびただしい出血が、胸部から下半身にかけて軍服の色を変えている。一刻を争う重傷なのは自明だった。
だが、ヨハン・クレメンツは、軍医の制止を振り切り、自走ベッドの上で上半身を起こした。ラインハルトの言葉を待っているよ

うだった。
　ラインハルトは言葉を探したが、相応しい言葉を見いだすことはできなかった。
「感謝する」
　微笑い、ヨハン・クレメンツは敬礼する。直後、意識が切れたらしかった。崩れるように上半身がベッドの上に倒れ付し、それで通信が切れた。
「大した奴だ」
「恐れ入る」
　応じたリーフェンシュタールは眉を曇らせたままだった。
「あの程度で死ぬ男ではないし、死んでもらってはいろいろと困る」
　兄を死なせた男のプロポーズを受けてくれるような娘（ゲルタ）ではないし…と呟きかけ、リーフェンシュタールは慌てて表情を改めた。
「改めて久闊を叙したいな、ミューゼル大佐、それにキルヒアイス大尉」
「こちらこそ」
　ラインハルトは、滅多にないことだが自ら右手を差し出す。その手を握りしめ、リーフェンシュタールは大きく頷いた。
「いつか再会したいと思っていました。当部隊では准将閣下が最先任ということになります。イゼルローンまで艦隊の指揮を執られますか？」
「とんでもない」
　大きく手を振り、リーフェンシュタールは謝絶の意を示した。
「この部隊の指揮官は卿だ、ミューゼル大佐。わたしは単なる積み荷に過ぎない。時間が取れたら、積み荷に話しかけてくれるとありがたい。ヨハン・クレメンツのことが心配でな。つい出張って余計なところにしゃしゃり出てきてしまった。卿も、わたしと雑談に費やしている時間はないはずだな」
「了解しました。キルヒアイス、准将をご案内してくれ」
「一人で分かるが…そうだな、キルヒアイス大尉、道々話を聞かせてくれ。三年も帝都を空けていた。帝都の様子も少しは知りたい」
「お供します、准将」
　キルヒアイスを伴ったリーフェンシュタールがブリッジから退出する。その後ろ姿を確認し、ラインハルトはロイシュナー中佐を呼んだ。
「時間がないな。準備完了と同時に、イゼルローン要塞へ向けてパルスワープ開始。卿が艦隊の指揮を執れ」
　一〇分後、一〇隻のラインハルト艦隊は五〇〇〇名あまりのヴァンフリート七‐四基地将兵全員とともにイゼルローン要塞へのパルスワープを開始した。
　最初のワープ明け直後、ラインハルトは、ブリッジに戻ってきたキルヒアイスと右掌を拍ち合わせた。
　成功を祝い合うのに、二人にとってはそれで十分だった。

　フルマンティ分艦隊の司令部壊滅に続き、第三分艦隊の四割を超える損害を被った。さらに第五分艦隊も二割強の損耗率を記録するなど、一方的に翻弄された挙げ句に帝国軍を無傷で脱出させたことで、第八艦隊司令部は統合作戦本部からの厳しい問責に曝されることになった。特に、最も有効と見られたヤン・ウェンリー中佐からの上申を繰り返し却下し、結果として全体的な敗北を招いたとして、ビョルケル准将の作戦指導が非難の対象となったのである。
　ビョルケル准将は軍事審問会（軍法会議の予備審査）に召喚を

受けたが、しかし、第八艦隊司令部への責任追及はそこまでだった。
帝国軍、大挙してヴァンフリート宙域へ進出の意図あり…フェザーン経由でもたらされた情報が、『彼らも反省しているのだ。これ以上、つついても恥を広げるだけではないのか』とする一部の国防委員からの意見に力を添えさせた。結局、ビョルケル准将へも直接的な責任が問われることなく、文書に残らない譴責という形だけで、審問会は幕を閉じた。

翌年の大規模かつ混乱を極めたヴァンフリート宙域会戦に先立つこと四ヶ月。この辺境の星系を巡る細やかな闘いが、そして数年後、銀河を巡る壮絶な戦いを主宰することになる二人の、互いを知らぬままの初めての邂逅がこうして終わりを告げた。

エピローグ

帝国暦四八五年一月一五日。
コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーは、帝都の帝国軍付属病院からのメールに見入っていた。
叛徒領ヴァンフリート星系からリーフェンシュタール准将以下五〇〇〇名強を救出する作戦はただ一人の死者も出すことなく完璧に成功した。昨年一二月初めには、彼女も帝都に凱旋したヴィンフリートとお帰りの抱擁を交わすことができたのだ。一別以来、ほぼ三年ぶりのことだった。
一方、作戦を完全に成功させたラインハルト・フォン・ミューゼル大佐には、皇帝フリードリヒ四世からの御嘉賞の言葉があり、さきに彼の解決した幼年学校での殺人事件解決の功績も併せて、准将への昇進が決定された。
「三〇〇〇の味方と万余の敵を自在に操ったと聞く。憲兵としてだけではなく、将官に相応しい資質を自ら示したとは言えぬか」
フリードリヒ四世の言葉を前に、シュタインホフ統帥本部長もミュッケンベルガー艦隊司令長官も返す言葉がなかったと言う。
そして、ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールも少将へ昇り、正式に子爵としての地位を与えられるべく、典礼省からの打診を受けている…これはコルネリア・ゲルトルーデ…ゲルタが直にヴィンフリートから聞いた話だった。
しかし、PDA（ケータイ）の画面に表示されたメールを見つめるゲルタの端正な顔立ちはひどく暗かった。ヴァンフリート星系で受けた負傷で入院中の兄ヨハン・クレメンツからのもの。ただし、彼女の

表情に重い翳(かげ)をさしかけているのはメールの文面ではない。
作戦終盤での敢為を評され、ヨハン・クレメンツにもまた准将への昇進と、軍務省付き武官としての地位が提示されていた。典礼省の、あの役人は歯の浮くような言葉を連ねて、ヨハン・クレメンツがシュミットバウアー男爵継嗣を許されたことを知らせてきた。明らかにゲルタの容色に食指を動かしているらしかったから、用件だけ聞いてさっさと通話は切ってしまったが。
ヨハン・クレメンツからのメールは兄らしく、短かった。
『明日一六日、ミューゼル准将が見舞いに来られる。正装にてお迎えしたい。第三種軍装を揃えて病院へ持ってきて欲しい』
第三種軍装…要するに艦内での正規軍装であるが、正装の場合は軍装品に銃器が含まれる。戦闘服なのだから当然だが、光線銃(レイ・ガン)なら充電したエネルギー・パック、レール・ガンなら全弾装填済みが決まりだった。
「ミューゼルという若者は必ず世の中を変えると思う」
年末、恒例のクリスマス・パーティで会ったとき、ヴィンフリートは熱っぽくそう語って聞かせたのだ。
「黄金の森にもいつか陽は翳る。緑の木々が盛りを迎える日は遠くない…わたしはそう思う。ただ、栄達ではなく、世の中が変わっていくのを、変えられる側ではなくて変える側に立って見ていたい…そう思う」
ゲルタの手を握りしめてヴィンフリートは囁くように問うたのだ。一緒に来て欲しい…と。
ラインハルト・フォン・ミューゼルはすでにあなたに何かを確認したのか、あるいはその思いを兄ヨハン・クレメンツにも話したのか…思わず頬に血が上ってくるのを懸命に抑えてゲルタは反問した。ミューゼル大佐が、帝室に対して具体的に何らかの意図を示すような何かを。
ヴィンフリートはゲルタの問いの前半を否定し、後半の半ばを肯定した。
「まだ、何も聞いていない。でも、彼が元帥の地位で満足する…というより、元帥、あるいは尚書を最終の到達点に置いているとは思えない。わたしは彼の意志を悪として裁く気はない…ヨハン・クレメンツには…」
ラインハルト・フォン・ミューゼルという若者が世の中を変えるなどと話せば、あいつのことだ。帝室に仇なすやつとか言って、いきなりミューゼルに銃を突きつけかねない。いずれ少しずつ世が動いていけば、馬鹿な奴じゃない。どうすれば、帝室に最も貢献できるのか、考え直すだろう。ただ、その前に下らない宮廷闘争に巻き込まれたりしては元も子もない。
「ミューゼルがいずれ宮廷で一派をなすのは確実だし、必ず他を圧する存在になるだろう」
「兄さまは…何と？」
「あなたと母上のことを宜しく頼む、と言っていた。傷が意外に重いらしい。ひょっとして前線には戻れないかも知れない、と医者に言われたと言っていた。それで沈んでいたのかも知れないな…」
そうだろうか———ゲルタは胸の奥に鉛が沈んでいくような不安と苛立ちに、もう一度唇を噛みしめる。『帝室の為にこそあれ』が兄の座右の銘だった。前線に立てない身体になればなったで、身体の半分をサイボーグ化してでも皇帝を守る文字通りの帝室の藩屏たろうとする、それがヨハン・クレメンツという人間であるはずだ。
銃を抜こうか…それともエネルギー・パックを空にしておいたら…あるいは空の弾倉を入れたレール・ガン。

思い迷った。
しかし、そのどれもできなかった。
兄が、ラインハルト・フォン・ミューゼルが現帝室と相容れない存在だと判断しているなら、たとえ丸腰であろうとも彼の排除を試みるだろう。そして、勿論、ラインハルトが無抵抗で兄の手にかかるはずはなく、いや、むしろ戦病の身である兄が逆にラインハルトか、彼の側近に返り討たれる可能性の方が高いのではないか。
いや、あるいは――――
兄はラインハルト・フォン・ミューゼルの意志を知り、それを本心では支持しつつ、なおシュミットバウアー男爵として帝室のために身を挺する道を選択しようとしているのではないか。
…思いつつ、ゲルタは十分に手入れしたレイ・ガンを軍装品の中に入れずにはいられなかった。最期の時、空のエネルギー・パック、あるいは弾倉を装填した銃を手にしていたのでは、あまりにも無様ではないか。
軍装を収めたケースを閉じ、ゲルタの目は死の淵を覗き込む昏さに変わっていた。
もし、兄がそれを意図していようといまいと、ラインハルト・フォン・ミューゼルの手にかかって斃れた時、自分はどうすべきなのだろう。兄の死を過去のものとして、ヴィンフリートの手をとるべきなのか…本心から言えば、ヨハン・クレメンツにはヴィンフリートと行を共にする道を選んで欲しかった。兄と手を携えたヴィンフリートの傍らに、彼女はありたかった…。
だが、ヴィンフリートですら、ヨハン・クレメンツがただちには帝室を否定する動きに同調するとは思っていない。ヴィンフリートは、世の中が変わりきるまで、なるたけヨハン・クレメンツを軍務の最前線から遠ざけようと考えているに違いない。だが、帝室を否定する動きを、兄が座して傍観しているはずもないのだ。
結論は出なかった。
僅かに――――自分もまたシュミットバウアー男爵の一族であり、そうであることが自分に何かをさせるだろう。それがどのようなことであれ、シュミットバウアー男爵の一族であるという自分の身の上こそが、最後の結論を出してくれるだろう。
それが、ゲルタの辿り着いた、結論とも言えぬ結論だった。

一六日、午前一〇時ちょうどにキルヒアイスを伴ったラインハルトは帝国軍付属病院に到着した。先の作戦で唯一の重傷者となったヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー准将を見舞うためである。
「聞いたか、キルヒアイス」
「ヴァンフリート星系への遠征の話ですか」
艦艇三万二七〇〇隻が帝国軍艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥の麾下、四〇六万に達する将兵と共に出撃するというのだ。
准将となり、二〇〇隻あまりの艦艇を指揮下に入れることが決定されていたラインハルトにも出撃の命が下されている。出撃は約一ヶ月後の二月半ば。
「ああ…」
「ヴァンフリート七‐四基地からの撤収を余儀なくされたことと、一昨年の第五次イゼルローン要塞攻撃への報復攻撃だと聞いています」
「お前も見ただろう、ヴァンフリートを。あんなところを奪って、一体何の役に立つと言うんだ」
「ラインハルトさま…」
キルヒアイスの視線に、ラインハルトも口をつぐむ。去年の

ヴァンフリート遠征は、前半はともかく後半には意味があった。五〇〇〇余りの将兵とリーフェンシュタール准将を無傷で救い出し、近い将来の有力な味方を確保した。ラインハルト自身は初めて複数の艦艇を指揮し、将官に相応しい将器を証明した。また、同盟軍の力量を図り、彼らにもそれなりの人材がいるらしいことも現実の感覚として認識することができたのだ。

だが、三万余もの艦艇、四〇〇万の将兵を動かして、あの不毛の星系で何をするのか。あの星系で同盟軍を撃破して、それで帝国軍の直面しているどのような政戦略上の課題を解決できるというのか。

所詮、やつらは戦争ごっこをしているに過ぎない。政略だの戦略だのともっともらしいお為ごかしを唱えながら、とにかく一人でも味方より敵兵を多く殺せば勝ち、などという小学生でも恥ずかしくなるような基準で戦争を弄んでいる。過去一五〇年間そうだったし、この後一〇〇年のそのままで、この無意味な永久運動を続けようと言うのなら、帝国も同盟を称する叛徒とやらいう連中もおっつかっつの愚か者という以外、評する言葉もない。

ラインハルトにしては珍しく胸の中に渦巻く憤懣と鬱憤で周囲への注意が疎かになっていたようだった。

ドアが開き、見習いの軍医らしい若者が『こちらです』という言葉をかけるのに、ラインハルトは初めて我に返った。

「ミューゼル准将閣下」

大きくはないが、凛とした声が迎えた。

第三種軍装に身を整え、病床に上半身を起こしたヨハン・クレメンツは敬礼で、彼の背を支えるように寄り添う若い娘は軽い会釈で彼ら二人を迎えていた。

「気を遣わせてしまったな。正装で迎えるのでは身体に障るのではないか」

「回復期に入っています。この程度ではどうと言うことはありません」

ヨハン・クレメンツの口調は相変わらず表情がない。事実を事実として述べている。味も素っ気もない平板な口調だった。

「妹のコルネリア・ゲルトルーデ。ミューゼル准将には初対面だったかと思いますが」

「いや…一度、会っている」

エルフを思わせる端正な細面が意外なことを聞いた驚きを浮かべた。ちょっと不審そうに二人の背後に視線を走らせるが、閉じられたドアが彼女の視界を遮ったはずだった。

「三年前…いや四年前にリーフェンシュタール伯爵家のクリスマス・パーティに招待された。フロイライン・シュミットバウアーにはその時に拝顔の栄に浴した。それと…」

悪戯っぽく微笑い、ラインハルトは付け加える。フロイラインがフレーゲル男爵を投げ飛ばした武勇のシーンも拝見した、と。

珍しいこともあるものだ…キルヒアイスは僅かに首をかしげた。ラインハルトさまが冗談を、それも若い女性に向かって言われるなど…ただし、彼が首をかしげたのはラインハルトの言動に対してではなかった。さっき、コルネリア嬢は確かに自分たちの後から誰かが来ると確信している表情だった。だが、今日はラインハルトさまと自分だけで見舞うと連絡してあったはず。彼女は一体…誰を？

赤毛の頭の中で静かに警戒信号が黄色く明滅した。キルヒアイスは上着のポケットに手をやり、武器の所在を確認した。敵が来るとすれば、後ろから？ まさかと思うが、コルネリア嬢はそれと知らないままに刺客を手引きさせられているなどと言うことがあるのだろうか…

「フレーゲル男爵閣下なら先日ももう一度、格闘技のお相手をし

て頂きました」
　見る見る真っ赤になりながら、ゲルタは冗談に応じる。
「あの方は受け身がお下手ですから、手加減するのが大変です」
「なるほど、よい喧嘩友達というのは得難いものだ。男爵閣下を大事にされるがいい」
「はい、心します」
　今頃、くしゃみが止まらないのではないかな、フレーゲル男爵は。まあ、別に同情する必要もないが――キルヒアイスにしてはフレーゲル男爵への思いは手厳しい。『督戦官』を自称して前線を惑わした…ヴァンフリートからの生還後、フレーゲル男爵に対して艦隊将兵の中にはそんな噂が飛び交っていたらしい。
　今度奴を艦隊で見かけたら、絶対にエアロックに閉じこめて減圧してやる、とまで激昂していた下士官や、事故ってのはよく起こるもんです。特に空威張りの好きなお貴族様が前線をお視察になるときにはねぇ…と微笑っていた下級兵士もキルヒアイスの知るところである。別れを惜しんだ『ノルデンⅦ』の下士官たちはキルヒアイスをイゼルローン要塞での『打ち上げパーティ』に招待してくれた。
　ただし、公式には『男爵の地位をも顧みず、自ら最前線の赴き、敵陽動の重責を全うす』として皇帝から言葉を頂いた上、『戦場の勇者』として宮中の女性の話題を独占しているとかいないとか。もっとも本人はラインハルトにいいように利用され、振り回されただけだということにすら気付いていないのかも知れない。
　五〇〇年近いゴールデンバオム王朝の治世が生んだ、一つの典型がフレーゲル男爵かも知れない。キルヒアイスはそう思う。自らのよって立つ基盤が、単にそれを継承したという理由だけで与えられ、他者が努力によって同等のものを勝ち取ろうとするとき、それを不遜、不敬として糾弾し、批判し、あまつさえその失脚を謀る。我自らの力量ではなく、他者の失敗を責めることによってのみ、我を主張する。そして、自身の行為の陋劣さに気付くことは遂にない。
　いつか、どちらかが斃れる…斃れるのがフレーゲルの方であることをキルヒアイスは確信していたが…まで、ラインハルトさまとフレーゲル男爵が相容れることは決してないだろう。当然、自分もまたフレーゲル男爵のような大貴族と互いを理解し合える日は来ない。ごく少数の、たとえばヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールのように。
　無口なヨハン・クレメンツだが、ゲルタの存在が思いの外、会話を長続きさせたようだった。
「そろそろ時間だ。近いうちの演習出撃を控えている。時間が幾らあっても足りない」
　そう言って立ち上がったときのラインハルトは本心から名残惜しそうだった。ただし、ヴァンフリートでの戦いでヨハン・クレメンツの手腕を見直したラインハルトとしては、何とかこの孤狼を思わせる士官を近い未来のミューゼル陣営に取り込みたかったに違いない。
　キルヒアイスはもう一度、ゲルタの珍しいほどの美貌に目を走らせた。気のせいかも知れなかった。彼らの来訪以来、彼女の細面を覆っていた緊張がほぐれ、安堵の彩りが浮かんでいる。そして、何度目か分からないが、エメラルド・グリーンの綺麗な目が何かを求めるように彼ら二人の背後、ドアの当たりをさまよっている。一体、何を探している、あるいは待っているのだろうか。
「戦隊を指揮されるのだな」
「ミューゼル戦闘グループ（カンプフ・グルッペ）だ」
「…回復すれば、麾下に加えてもらえようか？」

「卿も准将だ。ミューゼル戦闘グループ（カンプフ・グルッペ）に加わるのは無理だろうな。同格の准将二人が一戦闘グループを指揮するわけにも行かないが…」
ヨハン・クレメンツとゲルタが同時に眩そうに目を細めたのは、目に見える光ゆえではなかっただろう。ラインハルトが思わずも発した覇気、彼を彼たらしめている王者の気とも言うべきものが黄金色（こがねいろ）に瞬いてラインハルトの長身を包んだかに見えたのだ。
「いずれわたしがより高処に就き、その時、なお卿がそれを望んだなら、喜んで卿を迎えよう、ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー」
「――皇帝陛下のために？」
囁くような問いかけを、キルヒアイスは一瞬聞き落とした。
ラインハルトの頭頂で黄金の光が揺れた。
「わたしのためにだ――」
声にならない悲鳴。
しかし、キルヒアイスは明瞭にそれを耳にして振り返り、はっきりとそれを見た。
魔法のように、ヨハン・クレメンツの手の中にレイ・ガンが現れ、ぴたりとラインハルトの胸元に擬されていた。安全装置が解除済みで、銃口が熱対流で揺らめいて見えた。
「ラインハルト・フォン・ミューゼル、卿を帝室に叛意を抱く逆臣として誅殺する」
激情の怒声でも、糾弾の叫喚でもない。事実を事実として告げる声。ヨハン・クレメンツの、普段と全く変わりのない声だった。
その言葉への理解が生じると同時に、ラインハルトは間髪を入れずに動いた。網膜に残像を残す速さで、長身が大きく脇へ飛ぶ。
それを追って銃口もまた、光の帯を引いて動いた。
光が二条。
ラインハルトを挟んで交錯した一方は、ドアの上、天井に近い壁に破孔を穿ち、もう一条はラインハルトの脇を抜けるようにして…
ヨハン・クレメンツの手からレイ・ガンが落ち、ベッドで跳ねてフロアに転がった。
乾いた金属音が室内の氷結を解いた。
棒立ちになっていたゲルタが、崩れ落ちる兄の身体を支える。が、支えきれずにその身体はベッドの上に崩れ落ちた。左胸の中央、類い希なキルヒアイスの銃の技量を示して、射線は心臓の中央を射抜いていたのだ。
即死だった。
「…来るべきではなかった…か」
身を投げ出していたフロアから立ち上がり、ラインハルトの口調が深沈たるものになる。シュミットバウアー大佐はゴールデンバウム王朝の最も忠実な臣下であり、ラインハルトの野心を見抜いている可能性がある…見舞いを思いとどまってはどうか、そう忠告したのはキルヒアイスだった。
いつもならキルヒアイスの忠告を素直に容れるラインハルトが、見舞いにこだわったのは、味方になり得る者を少しでも早く増やしたいとの思いからだった。
「まさか…と思ったんだが」
「兄は…ヨハン・クレメンツは…あなたを危険な人物だと考えて…でも、楽しそうだった。あんなに楽しそうに話している兄を初めて…初めて見ました…でも、やっぱり…シュミットバウアー男爵だから、兄は男爵を嗣いだんです」
エメラルド・グリーンの眸が奇妙に乾いた光を帯びてラインハ

ルトを見つめていた。スリムな身体が木の葉のように震えていたが、頬を濡らすものはその目から溢れてはいなかった。
「済まぬ、とは言わない。だが、シュミットバウアー男爵家には傷がつかないよう、計らおう」
戦傷が悪化しての戦病死。ヨハン・クレメンツには不本意極まるだろうが、皇帝の寵姫の弟、皇帝のお声掛かりで准将にまで昇った一七歳の若き英雄を、理由もなく暗殺しようとしたとあってはただでは済まない。事実が知れれば、男爵家は断絶、ゲルタやその母はよくて流刑惑星、最悪は処刑台への道を歩まされる。
だが、ゲルタはラインハルトの言葉を聞いていないようだった。すっと立ち上がり、半歩、ラインハルトとの間合いを詰める。目が細められ、ガラス細工めいて虚ろに見えた。
「そうなんです。兄はシュミットバウアー男爵を嗣ぎました。大帝陛下の、あのお言葉と共に…帝室のため、身を挺せよ、という」
転瞬、ゲルタの手許から銀光が閃いた。
ラインハルトが致命の一撃を避けきったのは僥倖だった。女性としては長身のゲルタも、一八〇センチを超えるラインハルトから見れば頭半分近く小柄だった。彼女がラインハルトと同じリーチを持っていれば、その右手に握られたハイ・ポリマー製のハンド・ナイフは、ただの一撃でラインハルトの頸動脈を抉っていただろう。
ラインハルトはベッドを躍り越えるようにしてゲルタの二撃と三撃を避けた。異音が響き、ラインハルトの軍服の背が裂ける。
「キルヒアイス‼」
「ラインハルトさま、お逃げ下さい‼」
叫びざまキルヒアイスは銃を構える。
「———…‼」
狙点を定めたとき、一瞬の数分の一、キルヒアイスの指先が鈍った。彼らより五歳年上の…キルヒアイスの心の聖域に住まうあの女(ひと)が先に見いだされていなければ、あの女(ひと)の代わりに後宮に収められていたかも知れない女性。その女性が狙点の真っ正面にいる———…
躊躇いは致命的だった。
羽毛の身軽さで身構え直し、態勢を立て直したゲルタは、今度こそ止めようのない速さでキルヒアイスに襲いかかった。
咄嗟に銃身ではね除ける。
飛び去った刃が、慣性の法則を無視した速度で戻ってくる。
もう一度銃身で止めようとして指先を掠られた。
「く———っ」
一瞬、グリップが緩んだところへ蹴りが来た。
右の上膊で受けたが、銃を跳ねとばされた。間髪入れずに突き込んだ左の拳だが、あざやかに見切られ、キルヒアイスの視界の中でエメラルド・グリーンの目が、死の女王の微笑に金色に瞬いた。右手のナイフが煌めく。
———止めねば殺(や)られる‼
だが、止めるには彼女を殺すしかないことを、キルヒアイスは悟った。ゲルタの体技はキルヒアイスには及ばない。だが、殺さずに止めるだけの余裕はとてもない。がら空きになっている咽喉部を右肘で粉砕し、頸椎を折り砕いて即死させる以外、自分が致命傷を避ける手段がない…
キルヒアイスは無意識に身体を委ねた。
もはや本能に身を任せ、理性の制約を封じる以外、この場を切り抜ける手段はなかった。
衝撃。
予期していなかった横合いからの衝撃に、キルヒアイスは吹

き飛ばされ、丁度立ち上がりかけていたラインハルトの腕の中に飛び込んだ。ラインハルトもバランスを崩したが、そのまま壁に背をぶち当てて制止、辛うじて二人で団子になって横転する無様さだけは免れることができた。
「な―――」
「馬鹿、ゲルタ、止めろ！」
「リーフェンシュタール少将？」
　我ながら間の抜けた声だ…キルヒアイスはそう思ったが、後でラインハルトは『よく、あの場であれはリーフェンシュタール少将だと分かったな』と感心していた。
　ゲルタを正面から組み止め、その動きを封じていたのはヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール以外の何者でもなかった。
「少将、血が、怪我を…‼」
「ああ…そうだな…」
　にやりと微笑う。
「かすり傷だ」
「しかし…」
　リーフェンシュタールはゲルタの右手を押さえていたが、切っ先は深く右の肩口に入っており、そこからじわじわと鮮紅の染みが広がり始めていた。
「大丈夫だ。この服は防弾になっている。刃先は通ったが、傷は浅いさ…さ、ゲルタ、もう止めろ。シュミットバウアー男爵家はこれで絶えたんだ。大帝陛下のお言葉は、ヨハン・クレメンツがヴァルハラで改めてお返しするだろうさ。だから、馬鹿なことは止めるんだ…」
　ゲルタの硬直が解けた。
　握りしめていたハンド・ナイフから手を離し、ヴィンフリートと、それからラインハルト、キルヒアイスに目をやり、初めて自分が何をしたか気付いたようだった。憑き物が落ちたように目の光が戻り、それからヴィンフリートに抱きついたまま気が狂ったように泣き出した。
「少将、これは？」
「遅れて済まなかった」
　泣きじゃくるゲルタの背を何度も叩いてやりながら、ヴィンフリートは唇を引きつらせた。
「ルドルフ大帝陛下はシュミットバウアー男爵家の始祖にシュミットバウアーの名と爵位を与えるに当たって、こう仰ったのさ。帝室のため、身を挺せよ、とね」
「帝室のために…身を？」
「そう。それが五〇〇年近くにわたってシュミットバウアーの家を縛った。珍しいほどの話だ。栄達よりまず皇帝陛下の御為。戦場での勝利より、帝室の安寧を。宮中での勢力争いは陛下の御為にならぬ。無用の出兵、無名の師、無為の滞陣、無理な遠征、すべて帝室を揺るがすがゆえに、代々のシュミットバウアー男爵は身を挺しての諫言を試み、戦場で戦い死んできた。帝室のために身を挺するため、大帝の恩に報いるため…に」
「われわれが帝室のためにならぬ…と？」
「ヨハン・クレメンツはそう考えた」
　キルヒアイスはフロアから銃を拾い上げる。発射可能であることを確認すると、銃口をヴィンフリートに向けた。
「告発なさるのですか、ラインハルトさまを？」
「告発とか、証拠とか、そういう話じゃない。これはヨハン・クレメンツの心の問題さ。最後の、真の帝室の藩屏たる男の…こいつは世の中が見えないような馬鹿じゃない。いや、人一倍見えたからこそ、帝室の行く末を案じたのさ…まあ、そういうことだ。

悪いが、後始末は私と、ゲルタの二人でさせてくれ」
　ヴィンフリートは、まだ激しく震え続けているゲルタの背を、何度も繰り返し撫でてやっていた。愛しげに、何度も何度も。
「ゲルタもシュミットバウアーの人間なんだ。分かってくれないか」
　キルヒアイスは銃を下ろした。
「大丈夫、馬鹿なことはこれで終わった。ゲルタのしたことは詫びでは済まないと思う。いずれ、償いはさせてもらうが、今は何もなかったことにして退出してくれないか」
「分かった…」
　頷いてから、ラインハルトは顔をしかめて上着を脱ぐ。背が数十センチにわたって切り裂かれ、切り口はその下のワイシャツ、さらに肌着にまで及んでいた。肌が無傷だったのが奇跡のようなものである。
「まあコートを着ればごまかせるな…良いだろう、リーフェンシュタール少将。我々はここでは何も見なかったし、何も起こらなかった…それでいいな」
「感謝する」
　深々と頭を下げ、ヴィンフリートはゲルタを椅子に座らせた。放心したような横顔がちらと見えたが、まるで壊れた人形のように表情を失って蒼白だった。
「そちらも時間がないだろうが、こちらも時間切れだ。早くしないと、病院の連中に気付かれる。いろいろとやることがあるから、話はいずれ…と言うことにしてくれ。いずれ…があれば。それと、ヨハン・クレメンツのことはよかったらこう思ってくれ。先が見えているのにあくまで馬鹿であることに固執した馬鹿な奴さ。そんな馬鹿な奴のことを一人くらい、覚えていて、その名前を嗣いでやる人間がいても良いじゃないか、とね」
「どうも卿の言っていることはよく分からないが…『いずれ』とやらに期待することにしよう」
　ヨハン・クレメンツの病室のドアを閉ざし、特に誰にも怪しまれることなく建物を出て、真冬の青空を見上げたとき、ふたりは同時に口を開いた。
「一体あれは…」
「ラインハルトさま、さっきのは…」
　言い差し、それっきり二人は黙り込んだ。明るい日差しの下、病室での一幕はまるで一瞬の白昼夢のようで現実感に欠けたのだ。
『帝室のために身を挺せよ』なる一言。五〇〇年前に際限のない自己肥大と自己神聖化に走った一人の軍人政治家の吐いたたった一言が、今も一人の有能な軍人と、一人の前途ある女性の心を縛っていたというのか。
「俺には信じがたいな」
　キルヒアイスに比肩する銃の技量を持つヨハン・クレメンツが、なぜ敢えて戦傷も治癒しない時点でラインハルトに銃を向けたのか。問答無用でなら少なくともラインハルトだけは射殺できたはずなのに、なぜ、わざわざ声をかけ、キルヒアイスに反撃の瞬間を与えたのか。
　准将という地位を手に入れ、さらに高処に駆け上がろうとする翼に僅かな疲れも感じぬとは言え、ラインハルトはまだ一七歳の若者としての限界を持っていた。五〇〇年近くを、始祖が与えられた、その血筋が存在すべき理由のすべてとも言うべき言葉の呪縛の重さは理解の地平の遥か彼方にしか存在しなかったのだ。
「しかし、リーフェンシュタール子爵が嘘をつかれるとも思えませんが」
「いずれ、分かる。たった五〇〇〇で一個の制式艦隊を敵に回した男だぞ。味方にできなくとも敵にはしたくない。そうだろう、

キルヒアイス？」
　ラインハルトは小さく何か呟いたが、キルヒアイスの耳には届かなかった。届かなかったが、彼には分かっていた。ラインハルトは言ったのだ、五〇〇年前の亡霊などに負けるものか、と。今はまだ、銀河の星を仰ぐ者でしかないにしても、あと数年の内には宇宙を手に入れ、そして星をさえ砕く力を手にしてみせる。その時、一人キルヒアイスだけではない。あの男（フリードリヒ四世）に思い知らせてやるのだ。銀河に住まう人類は、貴様以外のすべてが自分と行を共にすることを望むのだ…と。

　この一〇日後、ヴィンフリートはヨハン・クレメンツの戦病死を公表し、二月の半ばにはその葬儀を執り行ったが、その葬儀の列席者の名簿にジークフリード・キルヒアイスの名が見いだされる。
　ヨハン・クレメンツの墓所は、後に旧帝都と呼ばれるに至るオーディンの一角に置かれた。ローエングラム王朝時代を迎えても、ヨハン・クレメンツの墓所が墓碑銘と彼に墓碑銘を与えた者の名を消し去ることは決してなかったのである。
「身を挺し、叛徒に痛撃を与え、帝国の名誉を守る。ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーは紛れもなく、シュミットバウアー男爵家の栄誉を伝えた一人だった」
　フリードリヒ四世から与えられたと伝えられる、それがヨハン・クレメンツの墓碑銘である。
　ラインハルト自身が断言したように、ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールの水面下での接触はこれ以降も延々と続くことになる。この翌年、オスカー・フォン・ロイエンタールとウォルフガング・ミッターマイヤー、至宝と称せられる帝国軍の双璧を自陣営に迎え入れた後も、ラインハルトはヴィンフリートとの接触を完全には断たなかった。驚くべきことに、両者のコンタクトは、ゴールデンバウム王朝の落日を決定づけたリップシュタット戦役に至ってなお保たれたのである。
　しかし、にもかかわらず、ヴィンフリートがラインハルト陣営で兵を率いて立つ日が来ることはなかった。
　ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール子爵中将がシュミットバウアー男爵の名を嗣ぐのは、三年後の帝国暦四八八年初め。リップシュタット戦役直前のことである。

星を仰ぐ者（下）完

親愛なるヴィンフリート

この書簡は、我が帝国貴族としての生涯において、最後の任を果たすものとなると信じる。

私は運命を信じない。この世の有り様のすべては、人の為したものであると信じるからだ。だが、何らかの理由により、この書簡が予定よりも早く卿に届くこともあり得たならば、それは一つの運命として受け入れるにやぶさかではないが。

本日午前一〇時一五分――この書簡が、私の意図したとおりの時刻に卿に届いていると仮定してのことだが――私は、作戦に於いて負傷した下僚としての権利において、ラインハルト・フォン・ミューゼル准将の病床への見舞いを要請した。

要請は、ミューゼル准将の帝室への野心を糾し、罪を問うて彼の生命を奪う意図のもとである。ただ、キルヒアイス大尉がミューゼル准将と行を共にするであろうから、准将を射殺し得、なお我が生命を全うし得る、あるいは我が生命を代償に彼の人物の野心を、その生命と共に断ち切れる可能性は、決して高くない。不意打ちであれば、あるいは成功も望み得るかも知れぬが、私は敢えて我が意を言葉で伝えた上で、行動に及ぶつもりでいる。

ラインハルト・フォン・ミューゼルが帝国のあり方を変え、あるいは銀河の歴史そのものを変えるだろうと言う、卿の考えに、私も全面的な首肯を与える。だが、それは同時に彼が帝室に対する致命的な脅威であることを意味している。敢えて愚挙に就く以外の選択肢を見いだせぬ、この愚物への理解を卿に求めようとは思わない。シュミットバウアー男爵の名を嗣ぐ者は、帝室への明白な脅威を看過し得ぬ。歴史上、この行為にどのような評価を与えられようとも、この一点だけは決して忽(ゆるが)せにはできぬ。

矛盾するが、私は卿が、ラインハルト・フォン・ミューゼルがもたらすであろう、新たな歴史の一端を担い得る人物であることを信じている。遠くない未来は、新たな流れをもたらす者を、一家系に対する忠誠を理由に拒む愚者が現れない世界であることを信じてペンを置く。

いや、今ひとつ――我が妹、コルネリア・ゲルトルーデを卿に託す我が儘を許してもらいたい。ゲルタの生命を救ってやって欲しい。我が死を目前にしたとき、ゲルタは、それをもたらした者を理性によって許せようとも感情によっては決して許さぬであろうし、ミューゼル准将とキルヒアイス大尉は、ゲルタの復仇を、その死によってしか止め得ぬであろうから。

愚かな友、愚かな兄と嗤って欲しい。
卿と共に往きたかった。

シュミットバウアー男爵の名に縛られ、誰をも幸福にできず、卿に不条理ばかりを押しつける我が身の愚かしさを――心より恥じる。

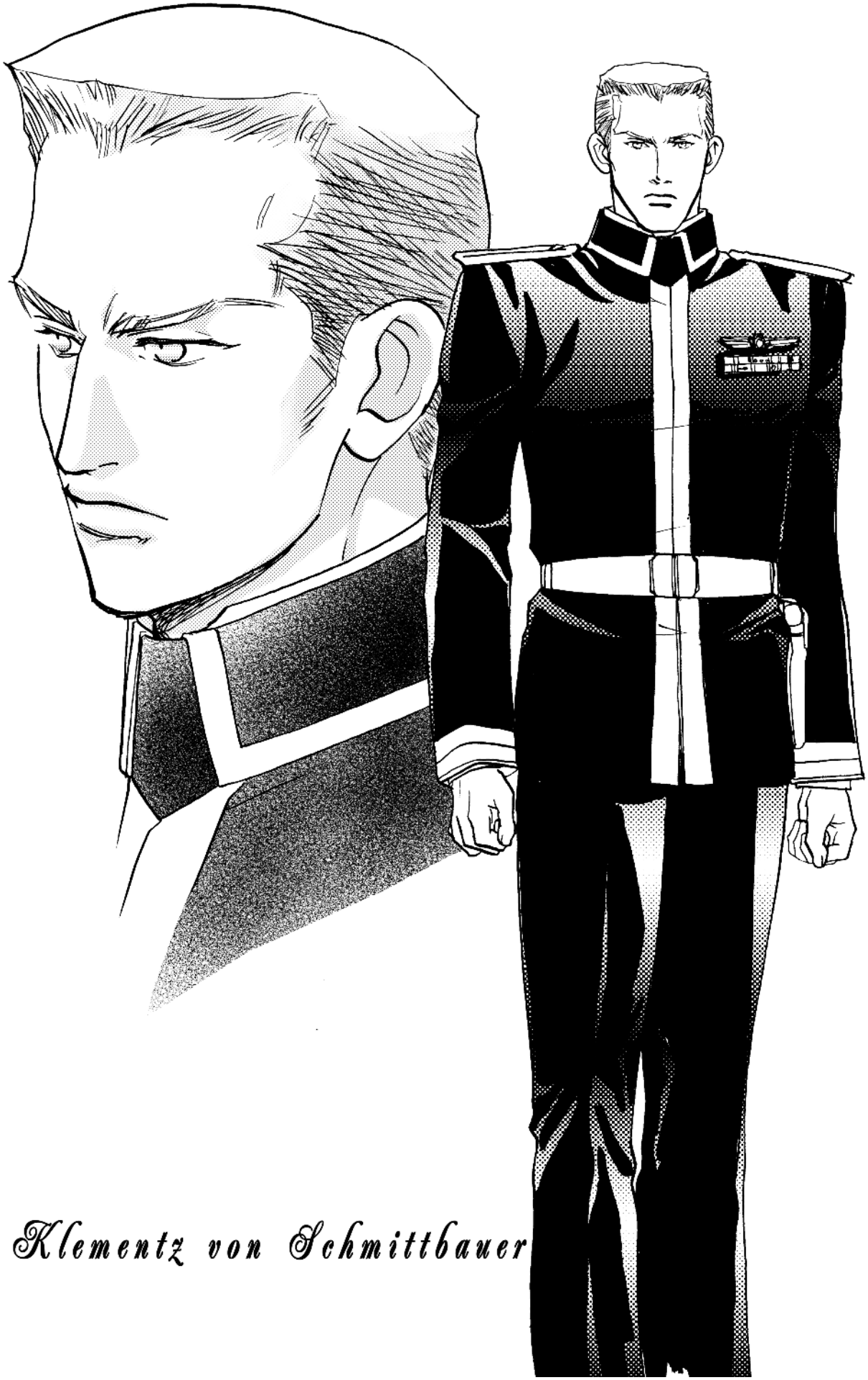
Johan Klemantz von Schmittbauer

参考資料

田中芳樹,『銀河英雄伝説』,ISBN4-19-152624-3,一九八二年,徳間書店

阿川弘之,『日本海軍に捧ぐ』,ISBN4-569-5700-5,二〇〇一年,PHP文庫

田中芳樹(監修),『銀河英雄伝説ハンドブック』,ISBN4-19-905132-5,二〇〇三年,徳間デュアル文庫



Johan Klementz von Schmittbauer

Winfried von Kiefensthal

Cornelia Gertrude von Schmittbauer